

しの の い い せ き ぐん
篠ノ井遺跡群(5)

—主要地方道長野上田線 塩崎バイパス 長野県単独事業地点—

2002年3月

長野市教育委員会

序

1998年に開催された長野冬季オリンピックもすでに昔日の感があり、21世紀へと時代は移り変わってきました。この間、数多くの建設工事が実施され、利便性の向上とともに長野市の景観も大きく様変わりをしてきました。長野市内にて周知される約500カ所に及ぶ埋蔵文化財包蔵地はこうした建設工事に先立ち発掘調査が実施され、私たちに過去の歴史を語りかけてくれます。各地で調査された遺跡からは、古代より営々と続いてきた人々の知恵と工夫をみることができます。

本書に所収しております篠ノ井遺跡群は、千曲川が形成する自然堤防上に展開した県内有数の大遺跡群として知られております。平成7年度より5カ年にわたって実施した調査では、おびただしい数の遺構や遺物が確認され、地下に埋まった先人達の生活の跡がまざまざと目の前に現れてきました。今回の発掘調査によって得られた成果は、先人の足跡を物語るほんの一部にしかすぎませんが、地域史解明の一助としてお役に立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました長野県長野建設事務所、工事を請け負われた川中島建設株式会社ならびに株式会社竹中土木、北陸新幹線建設に関連して調査区内における各種調整にご理解をいただいた東日本旅客鉄道株式会社、建設省北陸新幹線建設局の関係各氏、発掘作業に携わっていただきました地元発掘作業員の皆様、また、報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます。本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成14年3月

長野市教育委員会

教育長 久保 健

例 言

- 1 本書は、長野市篠ノ井塩崎における「主要地方道長野上田線道路改良事業」にともない、平成7年度から平成13年度に発掘調査を実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、委託者 長野県長野建設事務所長 と受託者 長野市長 との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）が実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野県長野市篠ノ井塩崎字東田沢・西田沢・横捲・古堂・庚申堂・古寺にわたる。調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地「篠ノ井遺跡群」の範囲に収まり、調査位置を明示するため、地点名として「県道長野上田線塩崎バイパス地点（略記号 SNNU）」と呼称する。
- 4 本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その概要を提示することに主眼をおいた。掲載内容は以下のとおりである。
 - ・遺構は、確認された遺構すべてを調査区ごとに全体図の中で提示した。縮尺は1/80である。
 - ・遺物のうち土器は、図化可能な遺物について遺構別に掲載した。縮尺は1/4である。土器以外の遺物については、第4章に種別ごとに掲載した。
- 5 掲載図版については以下のとおりである。
 - ・掲載した方位はすべて座標北を示す。
 - ・図中に示した座標・標高は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅶ系の座標値と日本水準原点の標高を基準としている。
 - ・遺構の略号は、住居：SB 掘立柱建物：SH 井戸：SE 土坑：SK 溝：SD ビット：P 周溝墓：SDZである。
 - ・遺構図は1/80、遺物実測図は土器類：1/4、土器拓影・金属器・石器：1/3、玉類・銅銭：1/2を基本縮尺としたが、例外もあるため、適宜縮尺を提示してある。
 - ・遺構実測図における焼土・炭化物の範囲、土器実測図における黒色処理・赤色塗彩については網掛けにより下記のとおり表示した。

（遺構実測図）

焼土



炭化物



貼床範囲・・・点線

（土器実測図）

黒色処理



赤色塗彩



須恵器断面



- 6 本書作成に係る各作業は調査員が分担して担当した。担当者については後記した。
- 7 本書の編集・執筆は、矢口忠良の指導・助言のもと、風間栄一が担当し、宮川明美が補佐した。
- 8 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）で保管している。
- 9 現地調査の実施から整理作業に関して、多くの方々よりご指導・ご助言を賜った。ご芳名を記して、感謝の意を表する（敬称略）。

青木一男 出河裕典 白居直之 大脇 潔 小林秀夫 坂口 一 澤谷昌英 白澤勝彦 辻 史郎 土屋 積
傳田伊史 西山克己 畠山幸司 原 明芳 百瀬長秀 森田利枝
長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター 長野県立歴史館

目 次

序文	
例言	
I 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査の経過	2
①調査区の設定	
②各年度の発掘調査経過	
③整理作業の実施経過	
3 編集方針と検出遺構・出土遺物の掲載	6
①本書の編集方針	
②検出遺構の整理と掲載	
③出土遺物の選別と掲載	
4 調査体制	7
II 調査地点と篠ノ井遺跡群	8
1 篠ノ井遺跡群の位置	8
2 篠ノ井遺跡群既往調査地と調査地点	10
III 発掘調査の概要	12
1 基本層序	12
2 調査面の設定	12
3 仁和洪水と善光寺地震	13
IV I区の調査	14
1 1次面の調査	14
2 2次面の調査	26
V II区の調査	36
1 1次面の調査	36
2 2次面の調査	55
VI III区の調査	66
1 1次面の調査	66
2 2次面の調査	86
3 3次面の調査	87
VII IV区の調査	98
1 1次面の調査	98
2 2次面の調査	120
VIII V区の調査	140
1 1次面の調査	140
2 2次面の調査	144
IX VI区の調査	150
1 1次面の調査	150
2 2次面・3次面の調査	185
X VII区の調査	214
1 1次面の調査	214
2 2次面の調査	243
XI VIII区の調査	266
1 1次面の調査	266
2 2次面の調査	306
XII IX区の調査	332
1 調査実施範囲の確定過程	332
2 調査の概要	332
XIII 市道篠ノ井大当線地点の調査	342
1 1次面の調査	342
2 2次面の調査	347
XIV 遺物各説	358
1 石製品	358
各種石器 砥石 石製模造品	
子持勾玉 異形垂飾品 石製蛇尾 玉類	
ガラス小玉 白玉 白玉未成品 石製紡錘車	
2 土製品	365
土製紡錘車 羽口	
3 金属製品	366
1 青銅製品 2 銭貨 3 鉄製品	
4 木製品	369
5 その他の出土遺物	370
1 紙仏 2 瓦塔	
3 瓦 4 埴輪	
5 陶硯 6 灯明皿	
報告書抄録	374

図表写真一覧

表1 年度別発掘調査実施概要一覧表

表2 平成7～9年度発掘調査実施経過

表3 平成10・11年度発掘調査実施経過

表4 篠ノ井遺跡群発掘調査実施地点一覧表

図1 調査地と字名

図2 調査地名

図3 篠ノ井遺跡群の位置

図4 篠ノ井遺跡群と周辺遺跡群

図5 篠ノ井遺跡群調査地点位置図

図6 土層堆積状況実測図(Ⅱ-a区)

写真1 調査地周辺空撮写真

写真2 土層堆積状況

Ⅳ I区の調査

表5 1次面主要検出遺構一覧表

表6 2次面主要検出遺構一覧表

図7 1次面遺構分布図

図8～13 1次面遺構実測図①～⑥

図14 S地点1次面SK08実測図

図15 N地点1次面SK20実測図

図16～17 1次面出土器実測図①、②

図18 2次面遺構分布図

図19～24 2次面遺構実測図①～⑥

図25 2次面出土器実測図

写真3 N地点1次面全景(東から)

写真4 N地点1次面全景(西から)

写真5 S地点1次面全景(東から)

写真6 S地点1次面全景(西から)

写真7・8 SK08人骨検出状況

写真9 SK20人骨検出状況

写真10 S地点1次面1号焼土遺構

写真11 S地点1次面2号焼土遺構

写真12 N地点2次面全景(西から)

写真13 S地点2次面全景(西から)

写真14 S地点2次面SD07・08

写真15 S地点2次面SD05

写真16 N地点2次面SD07

写真17 S地点1次面SB02

写真18 N地点1次面SB01

写真19 N地点1次面SB03

写真20 N地点1次面SB04

写真21 N地点1次面SX01

写真22 N地点2次面SB07

写真23 N地点2次面SB08

写真24 N地点2次面SB08・11

V II区の調査

表7 1次面主要検出遺構一覧表

表8 2次面主要検出遺構一覧表

図26 1次面・2次面遺構分布図

図27～36 1次面遺構実測図①～⑩

図37 N-a地点1号焼土遺構実測図

図38 N-a地点2号焼土遺構実測図

図39～41 1次面出土器実測図①～③

図42～49 2次面遺構実測図①～⑧

図50 2次面出土器実測図

写真25 N-a地点1次面全景

写真26 S-a地点1次面全景

写真27 N-b地点1次面全景

写真28 1号焼土遺構(半截状況)

写真29 1号焼土遺構(半截状況)

写真30 2号焼土遺構

写真31 2号焼土遺構石材検出状況

写真32 2号焼土遺構

写真33 N-a地点2次面全景

写真34 N-a地点1次面SK07

写真35 N-a地点1次面SB08

写真36 N-a地点1次面SB04

写真37 N-b地点1次面SB05

写真38 N-b地点1次面SB06

写真39 S-b地点1次面全景

写真40 N-a地点2次面SB12

写真41 N-a地点2次面SB14カマド

Ⅵ III区の調査

表9 1次面主要検出遺構一覧表

表10 2次面主要検出遺構一覧表

図51 1・2次面遺構分布図

図52～60 1次面遺構実測図①～⑨

図61～65 1次面出土器実測図①～⑤

図66～71 2次面遺構実測図①～⑥

図72 2次面出土器実測図①

図73～75 2次面出土器生土器拓影①～③

写真42 S-b地点1次面全景

写真43 N-c地点1次面全景

写真44 S-c地点1次面全景

写真45 N-a地点1次面全景

写真46 S-a地点1次面溝群

写真47 N-c地点1次面SB05・06・07・16

写真48 N-c地点1次面SB12・13・14

写真49 N-c地点1次面SB15

写真50 S-c地点1次面SB02

写真51 S-c地点1次面SB05

写真52 S-b地点1次面SB01・02

写真53 N-c地点2次面全景

写真54 N-c地点2次面SB07下層溝状遺構

写真55 S-c区2次面SB08

写真56 S-a地点3次面自然木出土状況

Ⅶ IV区の調査

表11 1次面主要検出遺構一覧表

表12 2次面主要検出遺構一覧表

図76 1次面遺構分布図

図77～85 1次面遺構実測図①～⑨

図86 SB01遺物および獣骨検出状況実測図

図87～94 1次面出土器実測図①～⑧

図95 2次面遺構分布図

図96～104 2次面遺構実測図①～⑨

図105 SD201周溝内土器群出土状況実測図

図106～111 2次面出土器実測図①～⑥

写真57 1次面全景(東から)

写真58 1次面全景(西から)

写真59 SB01全景

写真60 SB01遺物出土状況

写真61 SB01全景

写真62 SB01遺物出土状況

写真63 SB01獣骨出土状況

写真64 SB01馬骨検出状況

写真65 SB01牛骨検出状況

写真66 2次面全景(東から)

写真67 2次面全景(西から)

写真68 SK56遺物出土状況

写真69 調査区西壁土器出土状況

写真70 SD201全景

写真71 SD201周溝内土器出土状況

写真72 1次面SB14

写真73 1次面SB14床面上焼土遺構

写真74 1次面SB10

写真75 1次面SB05

写真76 1次面SK15

写真77 1次面SK07

写真78 1次面SB17・18

写真79 1次面SB19

写真80 1次面SB21

写真81 1次面SB22

写真82 1次面SB23

写真83 1次面SB24

写真84 2次面SB03

写真85 2次面 SB06
写真86 2次面 SB07
写真87 2次面 SB04
写真88 2次面 SB02
写真89 2次面 SK06-09・12-14
写真90 2次面 SDZ01・02 SH02
写真91 2次面 SDZ02

Ⅶ V区の調査

表13 1次面主要検出遺構一覧表
表14 2次面主要検出遺構一覧表
図112 1次面遺構実測図
図113 2次面遺構実測図
図114・115 1・2次面出土土器実測図
写真92 1次面全景（東から）
写真93 1次面全景（西から）
写真94 SB01
写真95 SB01カマド
写真96 SB02
写真97 SH03
写真98 SB04
写真99 SB05
写真100 焼土遺構（2次面SB06様道か）
写真101 SK03とSK16
写真102 V区2次面全景（西から）
写真103 SB06
写真104 SB07
写真105 SB14
写真106 SB17
写真107 SB11
写真108 SB11
写真109 SB11焼土上遺物出土状況
写真110 SB11床面上遺物出土状況

Ⅷ W区の調査

表15 1次面主要検出遺構一覧表
表16 2・3次面検出主要遺構一覧表
図116 1・2次面遺構分布図
図117-127 1次面遺構実測図①-⑬
図128 SK08遺物出土状況実測図
図129-145 1次面出土土器実測図①-⑴
図146-156 2次面遺構実測図①-⑱
図157 N-2地点SB20遺物出土状況実測図
図158 1号土器検出状況実測図
図159-170 2次面出土土器実測図①-⑳
図171 3次面出土土器実測図
写真111 S-3地点方形ピット群

写真112 N-1地点SB35
写真113 N-2地点1次面（東から）
写真114 S-1地点1次面（東から）
写真115 S-2地点1次面（東から）
写真116 N-1地点1次面（西から）
写真117 S-3地点1次面（東から）
写真118 N-1地点SB34・38
写真119 N-1地点SB36・37・39
写真120 N-2地点SB45
写真121 N-2地点SB50
写真122 S-1地点SB09
写真123 S-1地点SB04
写真124 S-2地点SB19
写真125 S-2地点SB23
写真126 S-3地点SB24
写真127 S-3地点SB27
写真128 SK08遺物出土状況
写真129 SK08遺物出土状況（下図）
写真130 S-3地点3次面全景
写真131 SB20遺物出土状況
写真132 1号土器棺
写真133 N-1地点2次面全景
写真134 N-2地点SB22
写真135 S-3地点SDZ01
写真136 N-2地点2次面全景
写真137 N-2地点土器集中
写真138 SK30（西側土器集中）
写真139 SK31（東側土器集中）
写真140 N-2地点SB21土器出土状況
写真141 N-2地点SDZ07・08
写真142 S-1地点2次面全景
写真143 S-1地点SB02下層床面検出状況
写真144 S-1地点SB08炭化物検出状況
写真145 S-1地点SB04
写真146 S-3地点SDZ02
写真147 S-3地点SDZ03

X Y区の調査

表17 1次面主要検出遺構一覧表
表18 2次面主要検出遺構一覧表
図172 1次面・2次面遺構分布図
図173-180 1次面遺構実測図①-⑸
図181 N-2地点SK58遺物出土状況実測図
図182-194 1次面出土土器実測図①-⑳
図195-202 2次面遺構実測図①-⑸
図203 SB3538実測図
図204-213 2次面出土土器実測図①-⑲

写真148 S-3地点方形ピット群
写真149 N-1地点SB33・34・35・36
写真150 N-1地点SB34・35
写真151 N-1地点SB37・38
写真152 N-1地点SB32
写真153 S-1地点SB01
写真154 S-1地点SB06
写真155 S-1地点SB03
写真156 S-3地点SB18
写真157 N-2地点全景
写真158 N-1地点全景
写真159 S-1地点全景
写真160 S-2地点全景
写真161 S-3地点全景
写真162 SK58遺物出土状況（南から）
写真163 SK58遺物出土状況（北から）
写真164 SK58遺物出土状況（東から）
写真165 N-2地点SB30
写真166 S-1地点SH01
写真167 N-2地点全景（西から）
写真168 S-2地点全景（西から）
写真169 N-3地点全景（西から）
写真170 S-2地点SB12・SB08
写真171 N-3地点SB36
写真172 SB35・38
写真173 SB38遺物出土状況
写真174 N-1地点SB23
写真175 N-1地点SB28
写真176 N-3地点SB34
写真177 S-1地点SB03
写真178 S-1地点SB01
写真179 S-2地点SB13（土器出土状況）
写真180 S-2地点SB14
写真181 S-3地点SB18

Ⅸ Z区の調査

表19 1次面主要検出遺構一覧表
表20 2次面主要検出遺構一覧表
図214 1次面・2次面遺構分布図
図215-223 1次面遺構実測図①-⑲
図224 SB03カマド実測図
図225 SB35カマド実測図
図226 SB14遺物出土状況実測図
図227 SB36獣骨出土状況実測図
図228-246 1次面出土土器実測図①-⑳
図247-254 2次面遺構実測図①-⑸
図255 SB12柱状石出土状況

図256 S-3地点SB41土器出土状況実測図
 図257・258 N-4 SB57遺物出土状況実測図
 図259～268 2次面出土土器実測図①～⑧
 写真182 方形ピット群(N-3地点)
 写真183 鉄杖遺構(S-2地点)
 写真184 N-2地点全景(東から)
 写真185 N-3地点全景(西から)
 写真186 N-4地点全景(東から)
 写真187 S-1地点全景(西から)
 写真188 S-2地点全景(東から)
 写真189 S-3地点全景(西から)
 写真190 SB03検出状況(東から)
 写真191 SB03検出状況(南から)
 写真192 SB35カマド検出状況(西から)
 写真193 SB14遺物出土状況
 写真194 SB14(完測)
 写真195 SB36遺物・獣骨検出状況
 写真196 SB36獣骨検出状況
 写真197 SB36獣骨検出状況
 写真198 N-1地点SB23
 写真199 N-1地点SB21
 写真200 N-2地点SB22
 写真201 N-2地点SB25
 写真202 N-3地点SB48・50・51・53
 写真203 N-4地点SB33
 写真204 N-4地点SB37
 写真205 S-1地点SB01
 写真206 S-1地点SB02
 写真207 S-1地点SB02カマド内遺物出土状況
 写真208 S-2地点SB29・30・31
 写真209 S-2地点SB37
 写真210 S-2地点SB04
 写真211 S-2地点SB04カマド内土器出土状況
 写真212 S-2地点SB12
 写真213 S-3地点SB06
 写真214 S-3地点SB08
 写真215 S-3地点SB15
 写真216 N-1地点全景(西から)
 写真217 N-2地点全景(東から)
 写真218 S-1地点全景(東から)
 写真219 S-2地点全景(東から)
 写真220 S-3地点全景(西から)
 写真221 N-1地点SB44・SB23
 写真222 N-1地点SB23白玉出土状況
 写真223 S-1地点SB24
 写真224 S-1地点SB24石製模造品出土状況
 写真225 N-2地点SB46

写真226 N-2地点SH02
 写真227 N-3地点SB13
 写真228 S-1地点SB26
 写真229 S-2地点SB12
 写真230 S-2地点SB12柱状石出土状況
 写真231 S-3地点SB41
 写真232 S-3地点SB41遺物出土状況
 写真233 N-4地点SB57
 写真234 N-4地点SB57遺物出土状況
 写真235 N-4地点SB57遺物出土状況
 写真236 N-4地点SB57遺物出土状況
 写真237 S-1地点SB33
 写真238 S-1地点SB28
 写真239 S-2地点SB36
 写真240 S-3地点SB40
 写真241 S-3地点SB42
 写真242 S-3地点SB43

Ⅱ Ⅸ区の調査

表21 主要検出遺構一覧表

図269 土層層様状況実測図

図270 遺構分布図

図271・272 遺構実測図①～②

図273～267 出土遺物実測図①～④

写真243 Ⅸ区全景(西から)

写真244 Ⅸ区全景(東から)

写真245 SB02・SB07

写真246 SB03・SB06

写真247 SB04

写真248 SB04カマド(石芯)

写真249 SB05

写真250 SB08・SB09

写真251 SB11

写真252 SB13

写真253 SB14

写真254 SB17

Ⅲ 市道橋ノ井大当線地点の調査

表22 1次面主要検出遺構一覧表

表23 2次面主要検出遺構一覧表

図277 1次面遺構分布図

図278 1次面出土土器実測図

図279～281 1次面遺構実測図①～③

図282 2次面遺構分布図

図283 SB04カマド実測図

図284・285 2次面遺構実測図①～④

図286～290 2次面出土土器実測図①～⑤

写真255 H7 1次面全景(北から)

写真256 H9 1次面全景(北から)

写真257 H7 SK01(右上角部が鏡東)

写真258 全景

写真259 南側全景

写真260 SB04

写真261 SB04カマド(完測状況)

写真262 SB03(検出状況)

写真263 SB03土器・石材出土状況

写真264 SB04・01・03・02・05重複状況

写真265 SB01

写真266 SB02-05

写真267 SB05カマド周辺土器出土状況

写真268 SB08

写真269 SB10

写真270 SB09

写真271 SB09カマド

写真272 SB12・SD01

写真273 SB12・SD01獣骨検出状況

Ⅳ 遺物各説

表24 出土土器一覧表

表25 出土鉄貨一覧表

図291 石器実測図①

図292 石器実測図②

図293 石製模造品(鏡形・勾玉形・削形)実測図

図294 石製模造品(有孔円板)実測図

図295 子持勾玉・石製蛇尾・垂飾品実測図

図296 石製紡錘車実測図

図297 土製紡錘車実測図

図298 青銅製品実測図

図299 鏡貨拓影および実測図

図300 木製曲物実測図

図301 甌弘実測図

図302 瓦葺実測図

図303 I-N(2)SB10出土瓦実測図

図304 埴輪拓影

写真274 白玉未成品

写真276 主要鉄製品

写真275 高杯転用器口

写真277 軒羽

写真278 埴輪(夾帯部)

写真279 IV(1)SK15出土円面鏡

写真280 円面鏡・石製鏡

I 調査経過

1 調査に至る経過

篠ノ井遺跡群や塩崎遺跡群、石川糸里遺跡などの埋蔵文化財包蔵地が密集する篠ノ井塩崎地区では、昭和63年度着工の高速道路「長野自動車道」の建設事業を中心に、各種関連事業による土木工事が活発になっており、発掘調査が継続的に実施されている。

この長野自動車道の着工により、インターチェンジへのアクセス道路の整備ならびに交通集中による慢性的渋滞の緩和を目的とした周辺道路の整備事業が必要となり、長野建設事務所では、主要地方道長野上田線（県道77号線）道路改良事業が計画された。現行の長野上田線のうち、塩崎地区は道路の両側に住宅が建ち並ぶ状況で現行道路の拡幅による改良事業は難しく、現行道路南側への新設バイパスの建設が事業内容であった。

事業予定地は篠ノ井橋より栗佐橋付近まで達する新設道路である。聖川以南については千曲川氾濫原に計画されるため、塩崎遺跡群の範囲外となるが、篠ノ井橋～聖川間は篠ノ井遺跡群の範囲内に位置する。このため、県教育委員会・市教育委員会・長野建設事務所の三者により保護協議を実施し、発掘調査の実施が決定された。

現地調査は平成7年3月20日に現地にて長野建設事務所と埋蔵文化財センターの二者で保護協議を実施して、調査着手に当たっての現地確認等を行い、平成7年度からの事業着手に至っている。



図1 調査地と字名 (S=1/10,000)

2 発掘調査の経過

現地における発掘調査は平成7年4月に着手した。調査着手時には北陸新幹線の建設工事が同時併行で実施されており、事業予定地が新幹線工事区間への搬出入用の仮設道路として既に使用されていた。また、この仮設道路は隣接する畑地への出入口としても利用されていたため、それぞれの導線を確認しながらの調査となり、調査区が細分化される結果となった。また、事業実施当初は区分けしたⅠ区～Ⅻ区まで同一事業として実施する予定で着手したが、長期事業計画に係る継続協議の中でⅠ区～Ⅹ区が長野県単独事業、Ⅺ区～Ⅻ区が国庫補助金事業として実施することが明らかとなったため、それぞれを別事業として取り扱うこととした。本書にて報告するのは、Ⅰ区～Ⅹ区である。

現地調査は平成7年4月27日に着手し、単年度契約の継続事業として各年度4月から3月末日まで実施し、平成11年11月22日に終了した。この間、現地での稼働日数は実に918日を数える。各年度の実施概要については下表に示し、発掘調査経過については後述する。現地調査終了後、国庫補助金事業区であるⅪ区～Ⅻ区の現地調査と併行して整理作業を実施し、平成12年度に完了した。

本書刊行は当初、整理作業完了期日である平成13年3月の計画であった。しかし、出土資料が多量なうえ、整理作業の進捗に応じて出土遺物の復元率が非常に高いことが把握され、また、木製品等の保存処理にも時間を要することから、長野建設事務所との報告書刊行期限延長の協議を実施し、長野県議会の承認を受けて、1年間の期間延長を受けた。そして、平成14年3月29日付で本書刊行の運びとなっている。

年度	7年度(1995)	8年度(1996)	9年度(1997)	10年度(1998)	11年度(1999)
調査地区	Ⅰ区 Ⅲ区 市道篠ノ井大当線	Ⅱ区 Ⅲ区 Ⅳ区 Ⅴ区	Ⅲ区 Ⅵ区 Ⅶ区 市道篠ノ井大当線	Ⅵ区 Ⅶ区 Ⅷ区	Ⅷ区 Ⅸ区 Ⅹ区
字名	東田沢 西田沢	西田沢 横橋 古堂	西田沢 古堂	古堂 庚申堂	古堂 庚申堂 古寺
調査面積	5,000㎡	6,000㎡	5,000㎡	4,200㎡	2,700㎡
発掘期間	4月15日 ～3月29日	4月15日 ～3月28日	4月1日 ～3月27日	4月7日 ～3月26日	4月12日 ～11月22日
発掘日数	184日	204日	171日	222日	137日

* 調査面積は対象面積を示し、複数面での調査を実施しているため、実際の調査面積はこれを上回る。

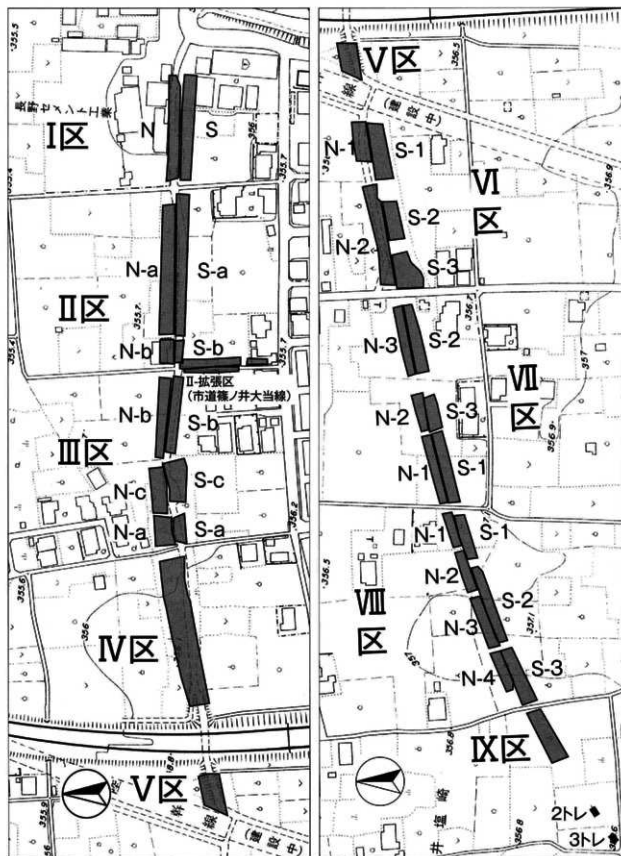
表1 年度別発掘調査実施概要一覧表

① 調査区の設定

調査地は新設道路建設用地で、調査着手前は宅地および畑地であった。調査地は千曲川に沿って東西に広がるため、南北に走る市道およびしなの鉄道軌道と直交して分断される。この調査対象地外となる現行交通路との交差部分を基に東よりⅠ区～Ⅹ区に区分けを行い、発掘調査を実施した。

全面調査が実施できたのは、Ⅳ・Ⅴ区のみで、それ以外の調査区については工事用搬出入路や隣接畑地への出入口により細分される。基本的に調査前に設置されていた北陸新幹線工事用仮設道路により北と南に二分し、それぞれにⅢ区、Ⅴ区と呼称した。さらに、このⅢ区・Ⅴ区は隣接畑地への出入口のあるいは地下埋設物により、それぞれ3地点ほどに小区分けされ、一つの調査区をおよそ6地点ほどに分割して調査を行ったこととなる。

以上により分割された調査区名は図2のとおりである。



新幹線以東地区 (I~VI区)

新幹線以西地区 (V~IX区)

図2 調査区名 (S = 1/2,500)

② 各年度の発掘調査経過

<平成7年度の発掘調査>

調査区名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
I区	S区		1	2								
	N区							1	2			
II区	Na区											1
	Nb区											
II区	大当線											
III区	Na区				1	2						
	Nb区					1	2					
	Nc区				1	2						

<平成8年度の発掘調査>

調査区名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
II区	Na区	1	2									
	Nb区											
	Sa区									1		2
	Sb区											1・2
III区	Sa区									1		2 3
IV区					1		2					
V区									1	2		

* 2月3日～23日までフリースタイルスキー世界選手権大会のため、調査中断

<平成9年度の発掘調査>

調査区名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
II区	大当線	1	2									
III区	Sb区		1	2								
	Sc区	1・2										
VI区	S1区				1	2						
	S2区						1	2				
	S3区								1	2	中断	3
VII区	S1区					1	2					
VIII区	S1区											1
	S2区											1

* 6月下旬は調査区が新幹線以东から以西への移動により、作業一時中断。

* 1月23日～3月2日まで 長野オリンピック開催のため、調査中断

表2 平成7年度～9年度 発掘調査実施経過一覧表
(表中の調査実施を示したトーン内部の数字は調査面を示す)

<平成10年度の発掘調査>

調査区名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ⅵ区	S 3区		3									
	S 2区			補足調査								
	N 1区					1	2					
	N 2区							1	2			
Ⅶ区	S 2区									1	2	
	S 3区											1
Ⅷ区	S 1区	1		2	3							
	S 2区	1	2	3	4							
	S 3区						1	中断		2		

*Ⅶ区S 3区の中断は水没による

<平成11年度の発掘調査>

調査区名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ⅵ区	S 3区	1	2									
	N 1区					1	2					
	N 2区						1	2				
	N 3区						1	2				
Ⅶ区	N 1区	1	2									
	N 2区		1	2								
	N 3区				1	2						
	N 4区				1	2						
Ⅷ区												

*7月中旬は連日の降雨により作業できず

表3 平成10年度～11年度 発掘調査実施経過一覧表

③ 整理作業の実施経過

発掘調査は一覧表で示したとおり、各年度4月より3月までの通年事業として実施し、冬季を含めて基本的に中断期間を設けていない。各年度ごとに遺構図面ならびに写真資料の整理は実施していたが、平成11年11月の発掘調査完了後も引き続き国庫補助事業区間の発掘調査に着手したため、調査担当者によるまとまった整理作業時間を確保することが難しい状況であった。このため、平成11年度に基礎作業に着手し、平成12年度事業の着手にあたって調査体制の見直しを図り、本格的に整理作業に着手した。

平成11年度は、出土遺物の洗浄ならびに注記作業に着手し、一部接合作業を実施した。

平成12年度は、引き続き接合作業を進めるとともに、各年度ごとに実施した遺構図面を全体の中で再整理した。また、接合が完了した地区より、順次遺物の実測作業に着手した。

平成13年度は、遺物の実測作業を継続し、遺構・遺物実測図の浄書ならびに報告書編集作業を実施した。こうして平成14年3月29日付で、本書刊行に至っている。

3 本書編集の方針と検出遺構・出土遺物の掲載方法

①本書の編集方針 平成7年4月から4年8ヶ月にわたって実施した発掘調査では、各地区途切れない遺構が確認され、多量の遺物が出土した。これら膨大な調査資料に関する本格的な整理作業は、発掘調査が通年での実施ということもあり、現地調査完了後を予定していた。しかし、平成10年に一連の道路改良事業が二つの事業に分割実施されることとなり、報告書もこれに合わせる事となった。整理作業は平成11年度より着手したが、分割した国庫補助事業区間の発掘調査との同時併行となり、調査担当者が各作業を分担して進めることが難しい状況となった。このため、調査内容すべてについての詳細な報告は難しいと判断され、可能な限り図面類を掲載し、調査内容の概要を公にすることを基本姿勢とした。また、発掘調査に直接関わっていない職員でも作業の延滞を最小に止めて進められるよう、調査区を報告の基本単位として遺構と遺物を別々に掲載する方法により進めた。

②検出遺構の整理と掲載 検出遺構の遺構番号は各地区・各地点・各調査面ごとに個別に番号を付している。これは北陸新幹線建設工区への出入口の確保、掘削土の場内仮置場の確保などの制約により、隣り合う調査区でも年度を違えて調査対象となるため、実質的に連番としての遺構管理が難しいことによる一時的措置として実施した。そして整理作業の際にすべてを連番として付け直す予定であったが、作業実施予定の変更によりこの準備が整う前に整理作業が本格化することとなり、連番としての再整理は断念した。このため、すべて調査時の遺構番号を使用している。ここで問題となるのは、同一調査区においても地点や調査面の違いにより同じ遺構番号が発生している点である。地点・調査面を合わせるにより遺構は特定されるので、注意が必要となる。

分割された調査区それぞれで確認された遺構のうち、調査区や地点を超えて同一と考えられる遺構が認められる。本来、これらは同一遺構として遺構番号を付け直し、一括して掲載・報告すべきであるが、前述のとおり遺構番号の再整理は行わなかったことにより、それぞれの遺構番号に即して掲載している。なお、同一遺構の可能性については、各地区概要の項に掲載した検出遺構一覧表中に記載したので、ご参照願いたい。

検出遺構の掲載については、まず各地区報告の最初に全体図ならびに検出遺構一覧表を提示して地区別・調査面別に示した。遺構個別図については、最大限遺構図を掲載するために調査区・調査面ごとに全体図を1/80として分割掲載した。基本的に左頁から右頁に連続するように西側より順次東へ向けて掲載している。また、掲載範囲は版面によって規制されるため、極力同一遺構の分割を避けるよう努め、各図重複部分を持たせながら作成した。なお、遺構断面図はほとんどの遺構について掲載していない。

③出土遺物の選別と掲載 出土遺物のうち、土器・陶磁器類の選別は、口縁部あるいは底部が $\frac{1}{2}$ 以上残存する個体を基本的に実測対象とし、小破片でも必要と認められるものについては実施した。ただし、接合作業時における特徴的・数值的選別から漏れた破片資料については、すべてを確認することはできなかった。掲載は各地区遺構図の後に一括した。縮尺は $\frac{1}{2}$ とし、調査時に付した遺構番号に従って、N区よりS区という順で掲載している。また、時代的に新しいものから古いものへと配列するように心掛けたが、厳密に実施しきれていない。遺物の帰属遺構については、現地調査時の所見を最大限尊重した。帰属遺構の特定が難しい場合は、確実に混入と考えられるものであっても調査時に取り上げられた出土遺構に含めて掲載した。また、調査区を異にして同一遺物の可能性が高い遺物があるが、不要な混乱を避けるために調査時の遺構番号によって別に掲載している。

鉄製品・青銅製品・石製品・木製品・軋仏・埴輪等については、地区別の報告の後にそれぞれ個別に節を立てて報告した。なお、鉄製品・青銅製品については本書編集段階で保存処理が完了していないことから、保存処理以前の状況を提示している。

4 調査体制

発掘調査は、長野建設事務所長と長野市長が締結した委託受託契約に基づき、長野市教育委員会の受託事業として埋蔵文化財センターが担当・実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体者 長野市教育委員会 教育長 滝澤忠男（～10年度） 久保 健（11年度～）
 調査機関 埋蔵文化財センター 所長 丸田修三（7～9年度） 小林重夫（10年度）
 中島昌之（11年度） 磯野久夫（12年度～）

庶務担当 所長補佐 小林重夫（～9年度） 宮沢秀幸（10年度）
 係長 北村実寛（11年度～） 事務職員 青木厚子

調査担当 所長補佐 矢口忠良
 係長 青木和明（～9年度） 専門員 西沢真弓
 係長 千野 浩 専門員 小野由美子
 主査 飯島哲也 専門員 堀内健次
 主事 風間栄一（担当） 専門員 藤田隆之
 主事 小林和子 専門員 永井洋一（7年度）
 専門主事 清水 武（～9年度） 専門員 勝田智紀（8年度）
 専門主事 荒木 宏（10～12年度） 専門員 小林まゆ佳（8～11年度）
 専門員 中殿章子（担当） 専門員 宮川明美（8年度～）（担当）
 専門員 山田美弥子 専門員 清水竜太（10年度～）
 専門員 寺島孝典（7年度） 専門員 内山 梢（13年度～）

調査員 青木善子 池田寛子 鳥羽徳子 武藤信子 矢口栄子
 調査補助員 藤井 恵（昭和女子大学生） 杉山 歩（山口大学生） 岸田 真（電気通信大学生）
 杭全美也 小山真奈 西沢咲香 西村真理 塚田あずさ

発掘調査参加者 石坂好子 内山直子 内山春男 大矢ひろ子 兼山忠晴 岸田武子 北沢やすい
 倉石みつ江 小林義光 桜井志げ子 塩原恵美子 清水節子 島田茂子 鈴木竹子
 袖山 弘 曾根川好武 中澤ヒデ子 西沢 乾 橋爪孝次 福島幸子 藤本百合
 松崎とみ子 丸山美知子 三宅計佐美 三宅利正 宮崎和子 宮本ひろ子 矢島喜和子
 矢島秀子 山田令子 山本芳子 湯田夕紀子 若林ひろ子

整理作業参加者 岡沢治子 小泉ひろ美 倉島敬子 清水さゆり 岡崎文子 田中はま江 田中むつ子
 塚田容子 徳成奈於子 冨田景子 西尾千枝 松澤ナオエ 三好明子 向山純子 村松正子

遺構測量委託 株式会社写真測図研究所 代表取締役 杉本幸治
 重機掘削業務 川中島建設株式会社 取締役社長 加藤正男

調査の実施にあたって、発注者である長野建設事務所には、現地調査・整理作業を通して多大なご支援をいただいた。また、工事請負業者である川中島建設株式会社・株式会社竹中土木には、調査の進捗状況に応じて、工程の変更等柔軟な対応をとっていただいた。さらに、国土交通省北陸新幹線建設局ならびにJR東日本旅客鉄道株式会社よりも調査の円滑な進行のための様々なご便宜を図っていただいた。5年間四季を通じて現地作業に関わった作業員や隣接住民、調査実施区の区長ほか多くの関係各位の協力があつたことを明記し、謝意を表する。

II 調査地点と篠ノ井遺跡群

1 篠ノ井遺跡群の位置

本書にて報告する篠ノ井遺跡群は長野県北部の長野市に所在する。長野市は北西部ならびに南東部の山間部とその間に挟まれた南北に細長い、通称「善光寺平」の一角を成す盆地底の平地部より成る。標高は市内最高所である飯縄山頂で1918m、平地部で350m前後を測る。

平地部は市域東側を北流する千曲川によって形成される沖積地と市域のほぼ中央を貫いて東流する犀川をはじめ 堀花川 や浅川、その他の中小河川によって形成される大小さまざまな扇状地より構成されている。これらが所によっては絡み合っただ複合地形を形成し、河川流路とともに遺跡立地を規定している。

篠ノ井遺跡群が所在する長野市南部の篠ノ井地区には、千曲川が形成した大規模な自然堤防が発達している。この自然堤防上は水稲耕作が導入されて以来、好適な居住地として選択され、利用されてきたらしく、間断ない遺物の散布が認められる一大遺跡密集地となっている。この自然堤防上に広がる包蔵地はいくつかの遺跡群として把握されており、左岸域では上流から八幡遺跡群（更埴市）、塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群・横田遺跡群（以上、長野市）、右岸では粟佐遺跡群・屋代遺跡群・土口遺跡（以上、更埴市）とほぼ連続した集落域が想定されている。また、それぞれの後背湿地には石川条里遺跡（左岸）、更埴条里遺跡（右岸）と、現在も条里景観を残す生産遺跡の存在が明らかとなっており、集落域・生産域が一体化した歴史的空間が把握できる希有な地となっている。

篠ノ井遺跡群は前述した千曲川左岸の自然堤防上に展開する遺跡群のうち、自然堤防を開削して千曲川に流れ込む聖川と岡田川によって区分された地域を呼称する遺跡名である。聖川を挟んで塩崎遺跡群と、岡田川を挟んで横田遺跡群とそれぞれ接している。篠ノ井遺跡群の範囲は東西およそ2kmにも及び、所在地の地籍名は実に25を数える。間断ない遺構の連続からは、小区域ごとに分割呼称することが難しく、群として把握する所以である。

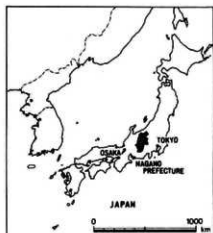


図3 篠ノ井遺跡群の位置

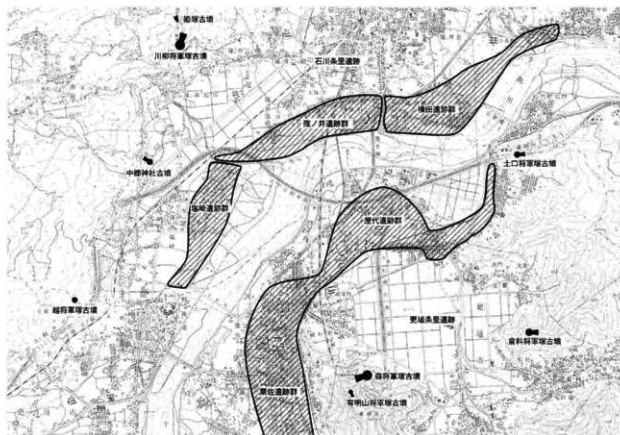


図4 篠ノ井遺跡群と周辺遺跡群 (S= 1/50,000)



写真1 調査地周辺空撮写真 (平成2年度 株式会社ジャスティック撮影)

2 篠ノ井遺跡群既往調査地と調査地点

篠ノ井遺跡群における発掘調査は、長野市教育委員会、財長野県埋蔵文化財センターによってこれまで複数回の発掘調査が実施されている。本書にて報告する県道長野上田線塩崎バイパス地点は、ちょうど篠ノ井遺跡群の範囲に新設道路幅24mのトレンチを入れた形となり、既往調査実施地点と直接あるいは間接的な位置関係を持っている。これまで実施された篠ノ井遺跡群の発掘調査地点は以下のとおりである。

本書にて報告するⅠ～Ⅸ区は、Ⅴ区・Ⅵ区で新幹線地点と直交し、Ⅸ区にて市道塩崎中央線地点と直交する。また、市道篠ノ井大当線はⅡ区より南側へ延びる市道拡幅工事に伴う発掘調査であるが、当該事業の付帯工事という事業計画に基づき、Ⅱ-拡張区として発掘調査を実施し、本書にて報告している。

番号	地点名	調査年度	報告書名
1	大規模自転車道地点	昭和54年度	『篠ノ井遺跡群』長野市教育委員会
2	市道山崎唐猫線地点	昭和63年度	『篠ノ井遺跡群Ⅱ』長野市教育委員会
3	中部電力鉄塔地点	平成元年度	『篠ノ井遺跡群Ⅲ』長野市教育委員会
4	市営塩崎体育館地点	平成元年度	『篠ノ井遺跡群Ⅲ』長野市教育委員会
5	聖川堤防地点	昭和55年度～平成3年度	『篠ノ井遺跡群（4）』長野市教育委員会
6	高速道地点	昭和63年度～平成3年度	『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16』 財長野県埋蔵文化財センターほか
7	新幹線地点	平成5～7年度	『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4』 財長野県埋蔵文化財センターほか
8	市道塩崎中央線地点	平成4～	整理中
9	(主)長野上田線 塩崎バイパス地点	平成7～平成13年度	本書
10	(主)長野上田線 国補事業区間	平成11年度～	継続実施中

表4 篠ノ井遺跡群発掘調査実施地点一覧表

調査地は篠ノ井遺跡群として把握される範囲のほぼ中央部を東西に横断する位置に当たり、東側調査開始点はほぼ群範囲の東端部付近に該当する。国道18号線関連や隣接アパート建設に関わる試掘調査等からⅠ区のさらに東側では包含層が希薄となり、遺構が見られない空白域となることが想定されている。このため、調査実施範囲の東端部にあたるⅠ区がほぼ篠ノ井遺跡群の東端部の一点を示すと把握される。

既往調査成果との関連では、Ⅳ区の周溝墓の検出やⅤ・Ⅵ区における弥生時代後期・古墳時代後期集落の確認、Ⅵ区における瓶仏の出土等は直交する新幹線地点での調査成果と合致し、遺構群の広がりや展開状況を把握する上で注目される。

また、Ⅸ区を中心とした古墳時代中期集落の検出はこれまで篠ノ井遺跡群や塩崎遺跡群において希薄であった時期の遺構検出として、これまでの調査成果にない新しい事実を追加することとなった。時期別遺構分布の把握とともに、篠ノ井遺跡群の構造把握に新しい情報を提供することになったと考えられる。



図5 様 / 井邊跡群調査地点位置図 (S=1/10,000)
番号は表4に対応 破線は様 / 井邊跡群想定範囲

Ⅲ 発掘調査の概要

1 基本層序

堆積層位は各調査区において堆積土の厚さの違いが認められるが、基本的に共通している。第1層 表土層／第2層 耕作土層／第3層 明黄褐色砂層（仁和洪水砂）／第4層 黒褐色粘質土層（包含層）／第5層 黄褐色粘質土層（基盤層）が基本層序となる。

第3層明黄褐色砂層は調査区全域で確認される純粋砂層で、平安時代の遺構を直接覆う事例が認められることから、仁和四（888）年に起こった大洪水に際して形成された砂層と考えられる。

第4層黒褐色粘質土層は土器等を大量に含む遺物包含層である。堆積厚1m程の間に弥生時代から平安時代に至る各時代の遺物を含み、遺構掘り込み面も本層内で確認される。この遺構掘り込み面を中心に堆積状況を観察すると各時期に対応した土層堆積の把握が可能と想定されたが、後述する第1次面以外は上層からの掘り込みによって失われた部分が多く、より細分層された時期対応土層として把握することは難しい状況であった。

第5層基盤層は堅く締まる黄褐色粘質土で、直上に締まりの弱い同質土の漸移層が観察される。本層を掘り込み面とする遺構は存在しないが、第4層下層より掘り込まれた遺構は確実に本層まで達している。なお、基盤層下は井戸跡ならびに地震痕跡である噴砂の断ち割りによって現地地表下5mほどまでトレンチ掘削がおこなったが、遺構の痕跡や遺物の包蔵は確認されなかった。

第2層は耕作土層として一括したが、図6の3層のように地区によっては第3層直上に暗褐色粘質土の堆積が確認された。この土層中には微量ながらも遺物の包蔵が認められ、仁和四年の洪水に起因する砂層形成後の遺物包含層に該当する可能性が想起される。そこで、調査当初には第2層下層で調査面を設定したが、遺構の検出はなかった。また、いずれの地区においても耕作による攪拌が及んでいて、部分的な残存が確認できるにすぎない。第3層形成以後に包含層が形成されたことは確実視されるが、これに伴う遺構調査は実施していない。

2 調査面の設定

前述の基本層序認識に基づき、調査は第4層を対象に実施した。第4層は遺物包含層として一括したが、図6に示したように細分層が可能で、調査面の設定にあたって遺構の掘り込み面を中心に各時期に対応した土層把握を試みた。しかし、上部からの掘り込み等により下層での掘り込み面の特定が困難で、遺物もこれらの影響で層位的な把握が難しい状況であったことから断念した。このため先行して実施した試掘坑の観察所見を加味し、包含層上層を除去した最も遺構が集中するレベルにて第1次面、基盤層上20cm程度で第2次面と、第4層遺物包含層中に2次の調査面を基本的に設定した。各地区の表土掘削にあたっては堆積土層の厚さの違いから一律の数値的設定ができず、調査区内排水溝の掘削を合わせて基盤層下まで壁面掘削を実施のうえ、土層観察から決定する方法をとっている。このため、同一調査区内であっても細分された地点間では調査面の高さが完全には一致していない。さらに、重複が激しい部分では検出できなかった遺構の存在も予測されるところであり、未検出遺構の存在については注意を要する。

発掘調査はほぼ全地区で2次面調査を実施したが、Ⅱ区Nb地点ならびにⅢ区はトレンチによる下層遺構確認時に明確な遺構の存在が認められなかったことから1次面の調査で完了している。一方、Ⅶ区S1・S2地点では2次面検出遺構の重複が激しく、さらに下層遺構のプラン確認が困難であったため3次面を設定した。Ⅶ区S2地点では3次面調査時に弥生時代後期を主とする前代の遺物が認められたことから、さらに4次面を設定して調査を実施している。また、Ⅲ区Sa地点でも3次面調査を実施したが、湿地状の旧地形確認のために実施した調査面で、遺構は認められなかった。なお、掲載した遺構図においては、3次面・4次面調査遺構は2次面に含めて図示している。



写真2 土層堆積状況

3. 仁和洪水と善光寺大地震

地震による液状化現象によって発生する噴砂は篠ノ井遺跡群・塩崎遺跡群の発掘調査においては頻繁に確認され、当地点の調査でも各地区で認められている。ただし、平面的に噴砂が確認される事例は多いが、調査区壁面に噴砂の上昇限界を把握した事例はそれほど数多く報告されてはいない。今回、Ⅲ区壁面において9世紀代に発生したとされている善光寺地震の噴砂が確認でき、仁和洪水砂に比定される第3層砂層との前後関係を把握することができた。明確な噴出面の把握には至らなかったが、図6に示すとおり洪水砂と噴砂上部の間には間層を挟んでおり、噴砂が洪水砂層まで達していないことは確実である。Ⅱ区において洪水砂に覆われた聖穴住居の覆土にまったく噴砂が含まれないことも合致し、仁和四(888)年に発生した洪水以前に大規模な地震が発生したことが確実視できる。さらに、9世紀代までに形成された遺物包含層を含む堆積土層を噴砂が貫いていることからはこの噴砂を生じさせた地震発生が平安時代以前に遡ることはなく、ほぼ9世紀前半代に発生した地震と把握することが可能と考えられる。

『続日本後紀』には、承和八(841)年に「二月甲寅(中略)信濃國言、地震。其聲如雷、一夜間凡十四度、墻屋倒頽、公私共損」(『信濃史料』第2巻 信濃史料刊行会)と信濃國で地震が発生し、甚大な被害が発生したことが記されている。液状化現象による噴砂の発生は地震の規模が大きい場合に限られ、想定される年代の合致からも、各地区でみられる噴砂はこの地震によって発生した可能性が高いと考えられる。9世紀代の篠ノ井遺跡群は841年の大地震・888年の大洪水と2度にわたる未曾有の大災害に見舞われる受難の世紀であった。

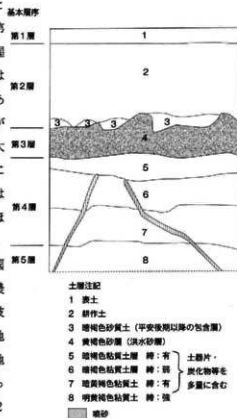


図6 土層堆積状況実測図(Ⅲ-b区)

S = 1/40

Ⅳ I区の調査

I区は東西に2分割して調査を実施した。発掘調査はN・S区ともに平成7年度に実施している。

1 1次面の調査

検出された遺構は竪穴住居・溝・土坑・ピット・井戸で、平安時代～中世にかけての時期の所産と考えられる。竪穴住居の分布は散発的で、住居間で重複関係をもつものはない。図化可能な資料に恵まれないが、竪穴住居出土遺物で中世に下るものはほとんどなく、平安時代集落の一角と把握される。竪穴住居ではN区SB01やN区SB04で床面上に炭の散布や平坦な石材の存在が確認され、極少量ではあるが鉄滓の出土からも小鍛冶が行われた住居と考えられる。また、N区SB04に隣接するSX02や調査区西端部付近に分布するN区SX01、S区1号・2号焼土遺構は覆屋等の付帯施設が存在が明らかでないが、焼土・炭を多量に伴う特殊遺構である。特にS区1号・2号焼土遺構は非常に強く焼けた焼土土坑が確認され、出土遺物がないため時期の特定は難しいが、住居内で確認された小鍛冶に関連する施設の可能性も考えられる。

溝は調査区全域に認められ、南北方向に開削されるものがほとんどである。

井戸は調査区全面に分布している。いずれも木枠や石積等の壁面構造物を持たない円形素堀である。確実に井戸と把握されるもので完掘できたものはないが、確認面下2mほどで覆土の水含有量が増す傾向にあり、さらに下層で湧水が認められるものと考えられる。また、N区SE08・10、S区SE02では覆土中に石材の集積が認められ、井戸廃棄に伴う封印に関連する可能性が想起される。

土壌墓は2基検出されている。N区SK20は明黄褐色砂が堆積した溝状の落ち込み部より、頭蓋骨1を検出した。約40×30cmの楕円形土坑で明黄褐色砂を掘り

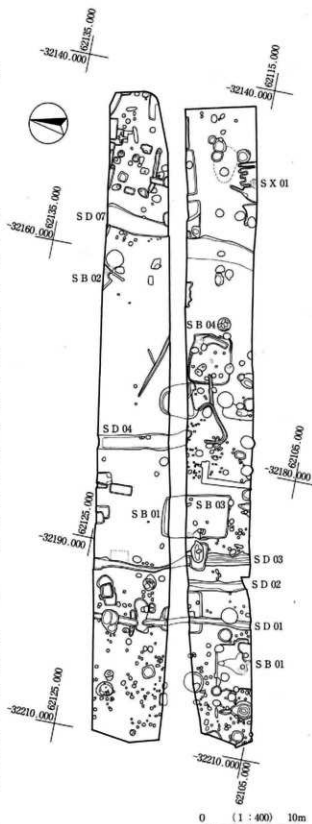


図7 I区1次面遺構分布図 (S = 1/400)

込んでいた。土坑内より人骨が確認されたが、木の根が入り込んでおり、攪拌が著しい。副葬遺物の出土はないが、砂層を掘り込んでいる点からは平安時代後半期以後の所産と考えられる。S区SK08は1.5m×1.1mを測る長方形土坑の南東側角部より頭蓋骨ほかを検出した。人骨は土坑南東隅部の壁際で土坑底と同レベルから検出された。ただし、この土坑は壁沿いに溝が巡らされているが、人骨はこの溝覆土上で確認され、この土坑以後に掘り込まれた別遺構に伴う可能性が考慮される。

発見名	遺構ID	時代	調査箇所		調査状況	付随施設	発掘状況	調査	遺構ID 部番号	土器ID 部番号	写真 番号	
			南	西								
N	SD06	平安			不明瞭 未確認				S区で検出されず 発掘の可能性低い	8	16	
N	SE09	平安以降				表層				8	17	
N	SX01	不明					焼土遺構			8		21
S	SD03	平安		SD04	不明瞭 検出されず		大半は南側調査区外			8	17	
S	SD04	平安か	SD03		不明瞭 検出されず		大半は南側調査区外			8		
S	SD05	平安	SK20		不明瞭 検出されず		大半は南側調査区外			8	17	
S	1号焼 土遺構	不明					焼土土坑			8		10
S	2号焼 土遺構	不明					焼土土坑			8		11
N	SD05	平安			無副 未確認				S区で検出されず 発掘の可能性低い	9	16	
N	SK13	不明					覆土中より貝殻が出土			9		
N	SK30	不明					人骨検出			9 15		9
S	SD02	平安		SD03	埋込層 検出されず	カマド・溝道	大半は南側調査区外			9	17	17
S	SD03	平安以降	SD02			表層				9		
S	SD07	平安					N区で検出されず			9	17	
S	SK15	平安								9	17	
N	SD04	平安		SE10・11	中央部跡像 不明瞭	壁溝			南西部を中心に炭を検出	10	16	20
N	SE07	平安以降	SX02			表層	底部確認 遺棄なし		土土器よりも新しい可能性が高い	10	17	
N	SE08	平安以降							石材残棄	10		
N	SE10	平安以降	SD04						石材残棄	10		
N	SE11	平安以降	SD04				表層			10		
N	SX02	不明		SK19 SB07				焼土・炭を多量に検出		10		
N	SX03	平安			無副						17	
N・S	SX04	平安								10	17	
N	SD03	平安			無副 なし				S区(SD01)と同遺構か	11	16	19
N・S	SD04	平安以降							調査区検出せず	11		

地点名	遺跡名	時代	発掘時期		断面 坑穴	付属施設	特記事項	備考	発掘回 数番号	土器回 数番号	写真 番号
			北	南							
N	SD04	中世				漆層	北西端に 遺構なし		11	16	
S	SD01	平安				船形 検出されず		N区 SD03と同一住居	11	17	
N	SD02	平安		SD01		船形		S区で検出されず	12	16	
N・S	SD01	平安以降	SD02				遺物八割あり	南北に調査区覆射	12		
N	SD02	平安以降					覆土は明黄褐色砂	S区で検出されず	12		
N・S	SD03	平安以降						調査区覆射	12	17	
S	SD02	平安以降				漆層 石材散見			12		
S	SK08	平安				埋没跡に溝	人骨検出		12 14		7・8
N	SD01	平安	SK08・09 SD06		船形 なし	焼土ピット	鉄釘・金庫石	小沢治住居	13	16	18
N	SD02	平安以降	SK03			漆層			13		
N	SD06	平安以降	SD01			漆層			13	17	
N	SK08	平安以降	SD01						13		
N	SK09	平安以降	SD01						13		

表5 I区1次面主要検出遺構一覧表



写真3 I区N地点1次面全景(東から)



写真4 I区N地点1次面全景(西から)



写真5 I区S地点1次面全景(東から)



写真6 I区S地点1次面全景(西から)

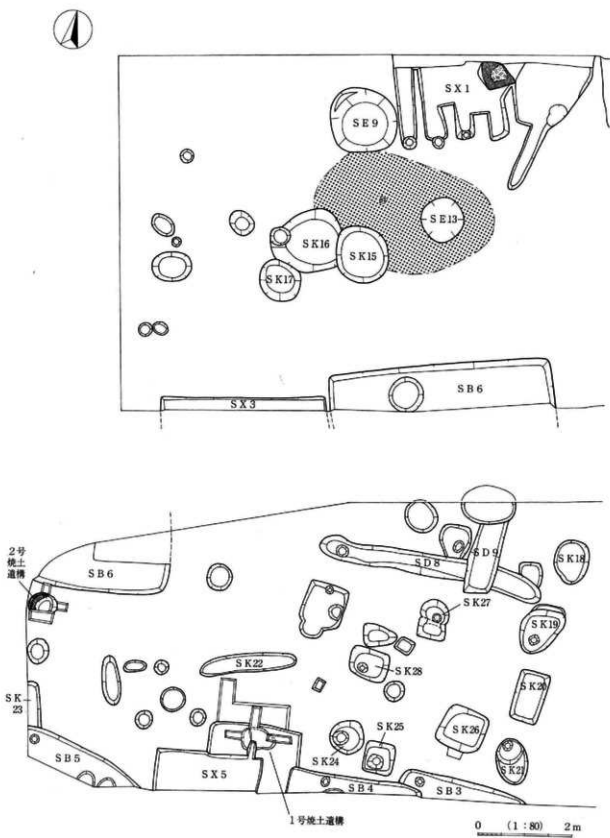


图8 I区1次面遺構実測图① (S=1/80)

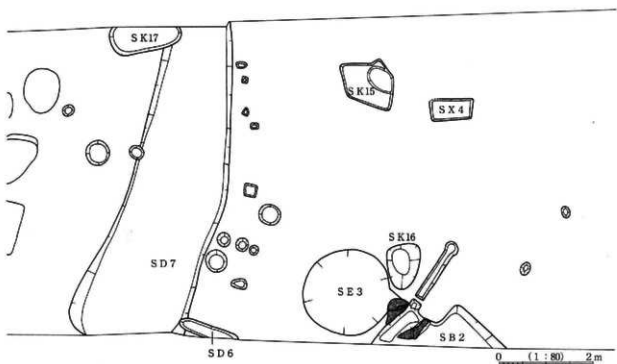
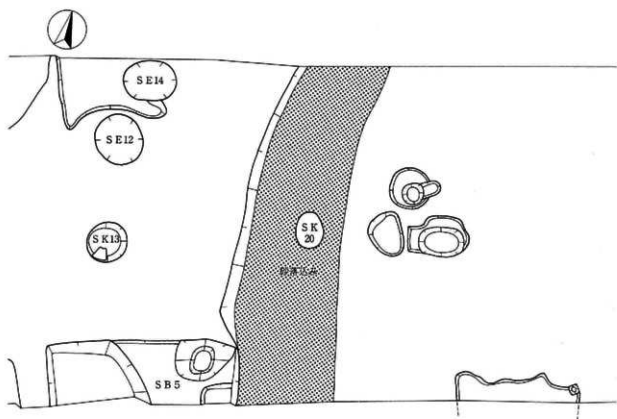


图9 1区1次面遺構実測図② (S = 1/80)

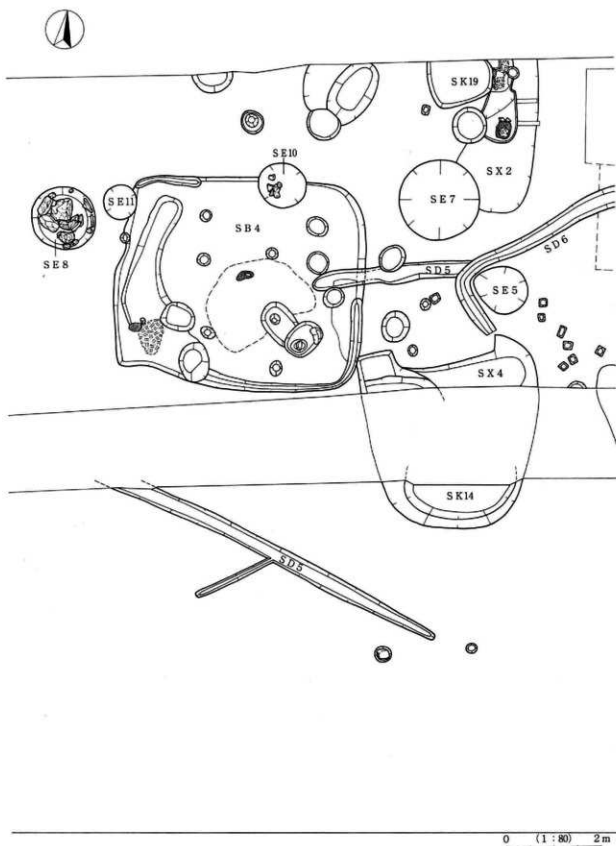


图10 1区1次面遺構実測図③ (S = 1/80)

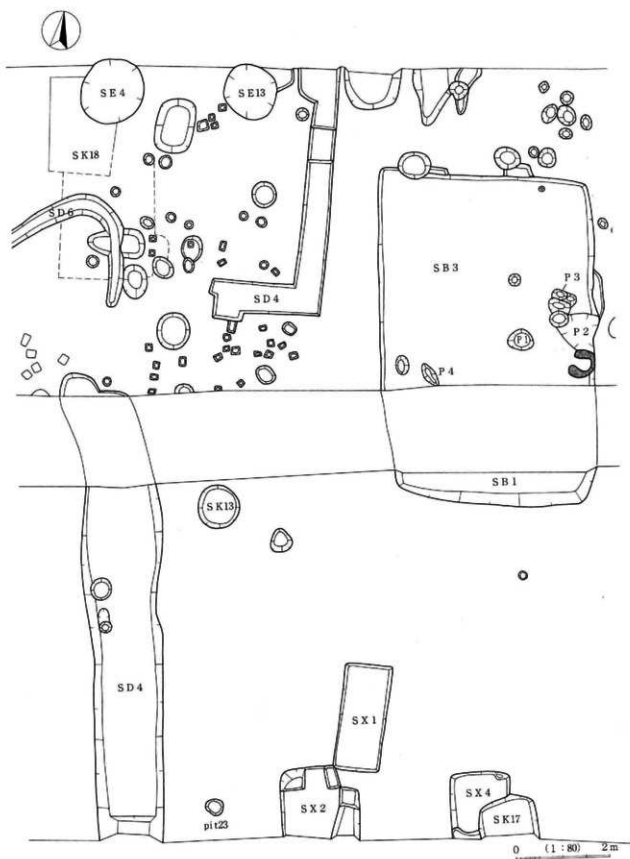


图11 I区1次面遺構実測図④ (S = 1/80)

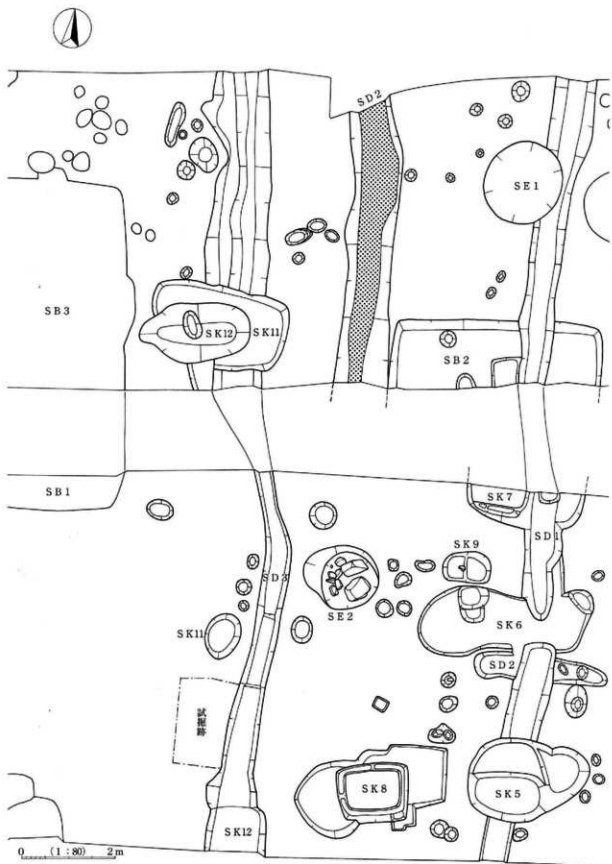


图12 I区1次面遺構実測图⑤ (S = 1/80)

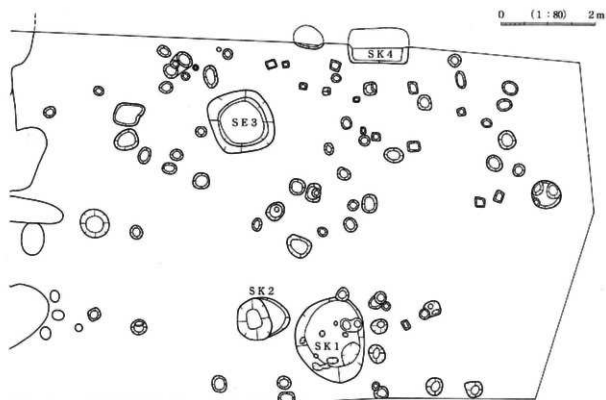
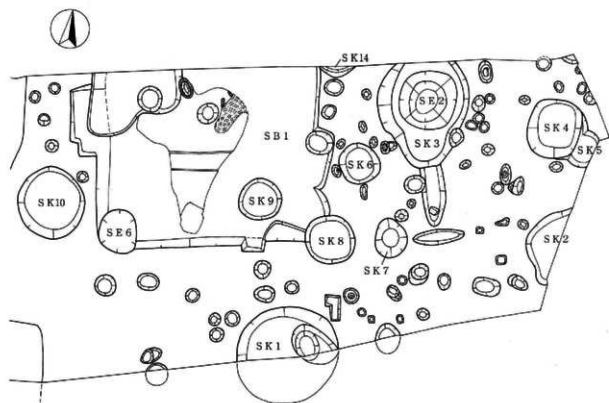


图13 I区1次面遺構実測図⑥ (S = 1/80)

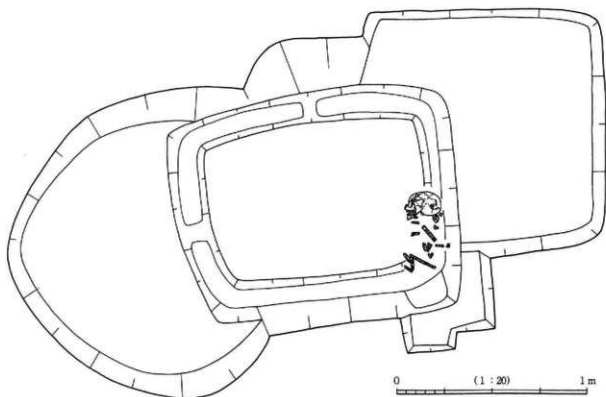


図14 S地点1次面SK08人骨検出状況図 (S = 1/20)

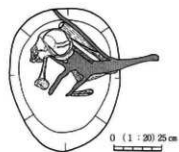


図15 S地点一次面SK20人骨検出状況図 (S = 1/20)
トーン部は木の根



写真7・8 SK08人骨検出状況



写真9 SK20人骨検出状況

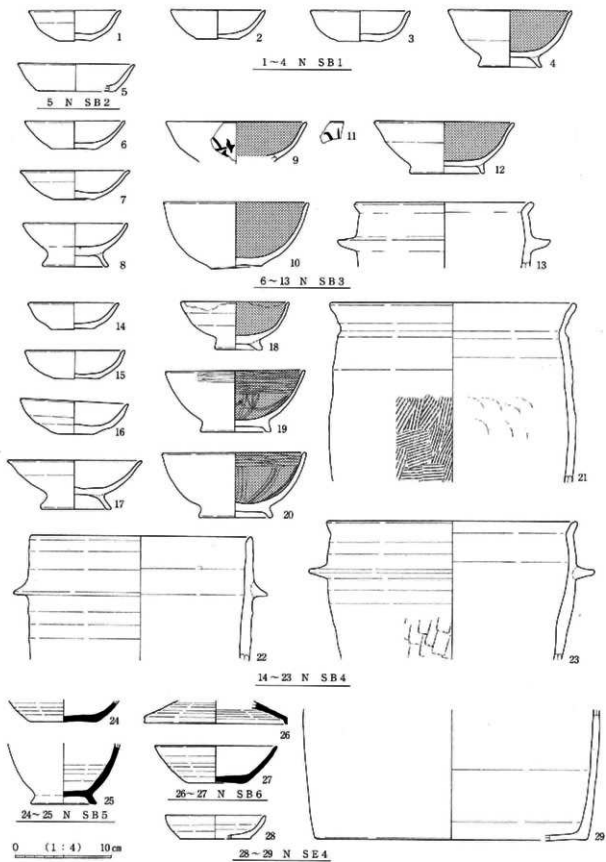


图16 I区1次面出土土器实测图①(S=1/4)

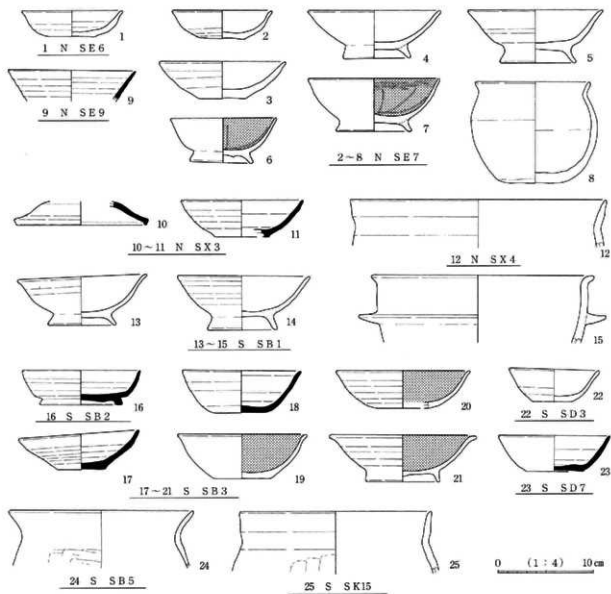


图17 I区1次面出土土器实测图② (S=1/4)



写真10 S地点1次面 1号烧土遺構



写真11 S地点1次面 2号烧土遺構

2 2次面の調査

2次面は1次面にて検出された遺構出土遺物とは様相が異なり、明らかに年代的相異が認められる。仁和四(888)年に発生したとされる大洪水による堆積砂層を根拠として層位的に区分される篠ノ井遺跡群平安時代前半期に2次面が、後半期以降に1次面が該当すると把握される。

検出された遺構には竪穴住居・掘立柱建物・溝・井戸・土坑・小穴があるが、遺構分布密度は希薄である。特に分布が希薄な調査区東側では掘立柱建物跡や小規模な溝が確認されるが、無遺構の空白地が目立つ。当調査区よりもさらに東側では、国道18号線建設時の試掘調査によって埋蔵文化財包蔵が確認されておらず、篠ノ井遺跡群東限の様相を示すものと理解される。

竪穴住居は2本主柱の小型住居(SB07)を含めて、4軒が調査区西側により検出されている。確認されるカマドはSB07・SB08ともに南東壁に造り付けられたとみられ、篠ノ井遺跡群における普通的方向と異なる。掘立柱建物は3棟確認されている。竪穴住居の分布範囲と明確に分けられたかのように調査区東側に分布する。遺物の出土がないため、時期の特定は困難であるが、9世紀代に竪穴住居と併存したことは確実であろう。また、調査区西側のS区SD08付近において土坑群が検出されているが、これらも掘立柱建物を構成する可能性が考えられる。

溝は比較的規模が大きく、調査区西側で北西-南東方向に開削されている。溝底部標高による傾斜方向は北から南へ傾斜しており、千曲川方向への排水溝としての性格が考慮される。調査区東側では小規模な溝状遺構が検出されたが、調査区内を縦断せず、規模が極めて小さいことから前述の溝とは性格が異なる想定される。

井戸は1次面同様にいずれも素掘である。また、N区SE08は覆土中に石材の投棄が認められ、1次面でみられた事例同様に井戸封印に伴う意図的行為の結果と考えられる。これらはいずれも平安時代後半期以降

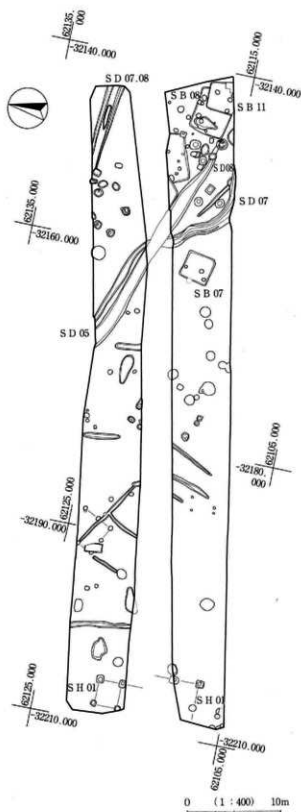


図18 I区2次面遺構分布図 (S = 1/400)

のものと同判断され、当調査面に帰属する平安時代前半期の確実な井戸は確認されなかった。

以上のように、Ⅰ区は平安時代前半期および平安時代後半期～中世の集落域の一端に該当することが明らかとなった。特に平安時代後半期には確認された複数の住居内で小鍛冶を行っていたものと考えられ、Ⅱ区の様相とともに該期集落の特性を示すものとして注目される。

地点名	遺構名	時代	位置関係		平面 形状	付属施設	特記事項	備考	遺構区 画番号	土器区 画番号	写真 番号
			先	後							
N	SB08	平安		SB11	矩形	南西壁側に地上土坑 カマド残欠か		SB11P 3は当住居の柱穴	19	25	23・24
N	SB10	平安			矩形				19		
					検出されず						
N	SD09	中世か	SD08			表層	石付投棄		19		
N	SE13	中世	SK26				底部確認 湧水なし		19	25	
N	SD06	平安		SE09 SK23				S区SD6-1と同一遺構	19・20		
N	SK26	平安	SK29						19	25	
S	SD07	平安以降		SD08				Ⅱ区SD01と同一遺構	19		14
S	SD08	平安以降	SD07					Ⅱ区SD02と同一遺構	19		14
N	SB07	平安			中央部陥没 2	南東壁にカマド残欠			20		22
N	SD07	平安						S区SD6-2と同一遺構	20	25	16
S	SD05-1	平安	SD05-3					N区SD08と同一遺構	20		15
S	SD05-2	平安	SD05-3					N区SD07と同一遺構	20		15
S	SB02	平安			6		2軒×3軒か		25		
N	SB11	平安	SB08		矩形 3(不明瞭)				24	25	24
N	SB01	平安			3				24		
S	SB01	平安			4				24		

表6 Ⅰ区2次面主要検出遺構一覧表



写真12 Ⅰ区N地点2次面全景(西から)



写真13 Ⅰ区S地点2次面全景(西から)

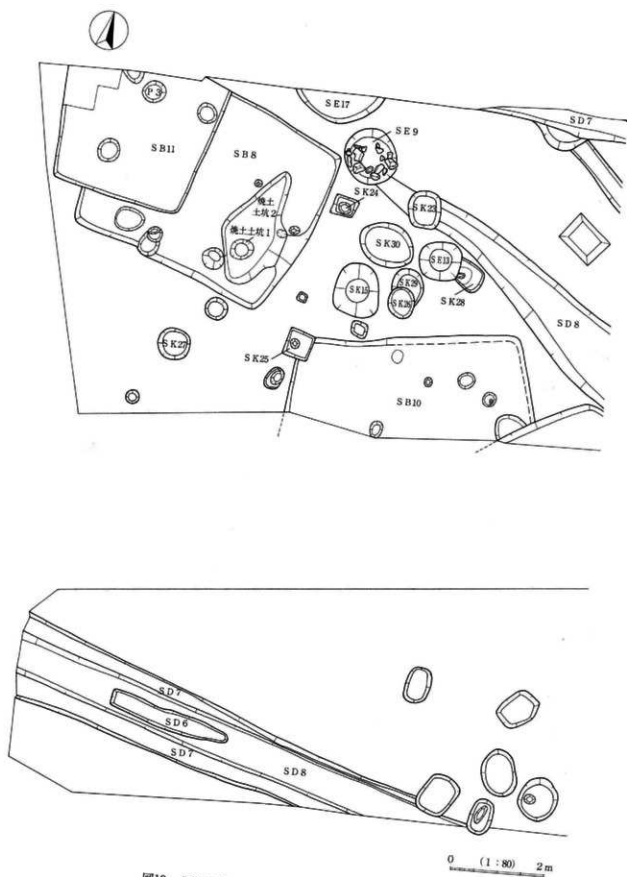


图19 I区2次面遺構実測図① (S = 1/80)

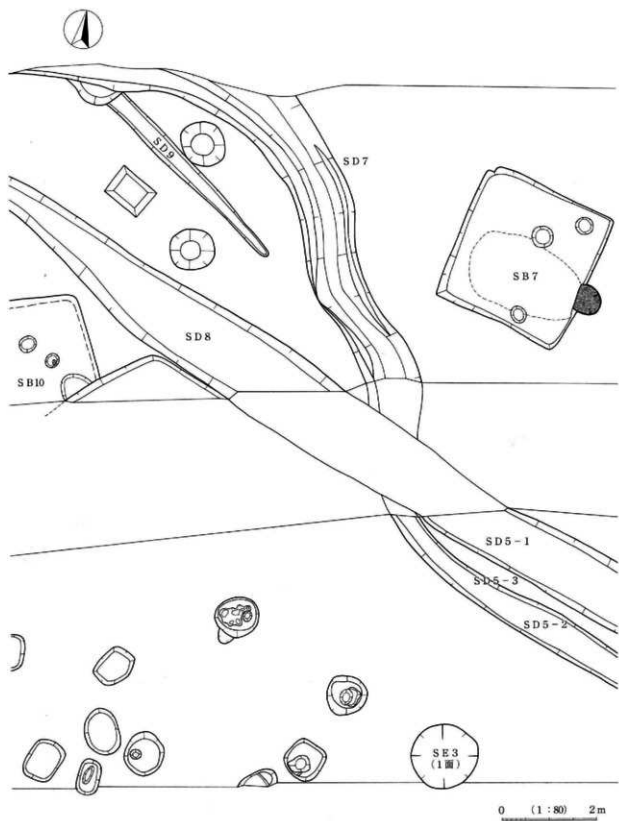


图20 I区2次面遺構実測図② (S = 1/80)

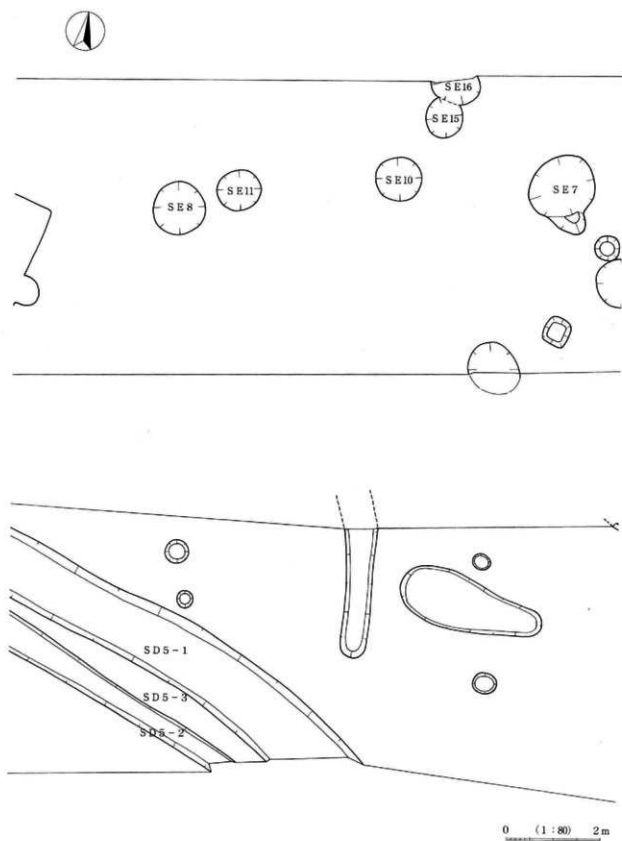


图21 I区2次面遺構実測図③ (S = 1/80)

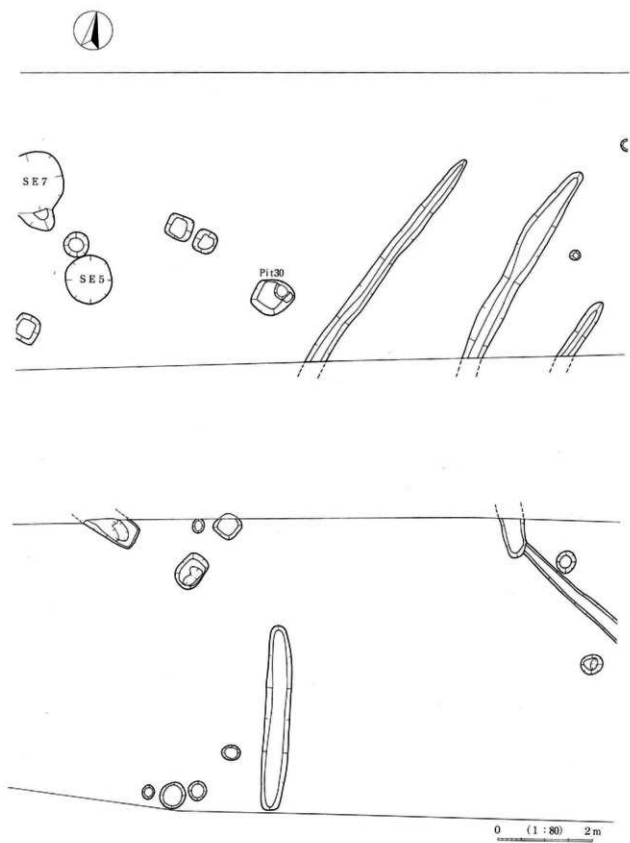


图22 1区2次面遺構実測図④ (S = 1/80)

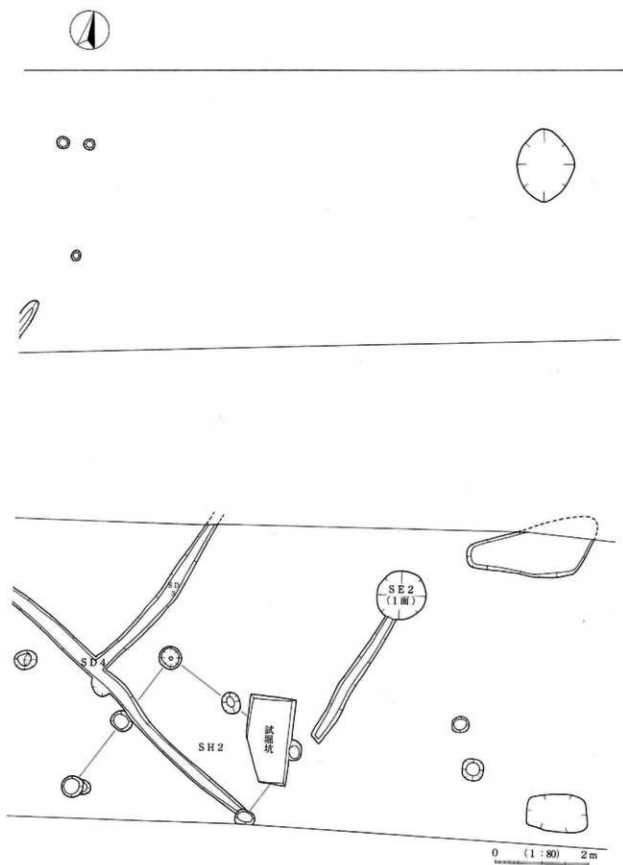


图23 I区2次面遺構実測图⑤ (S = 1/80)

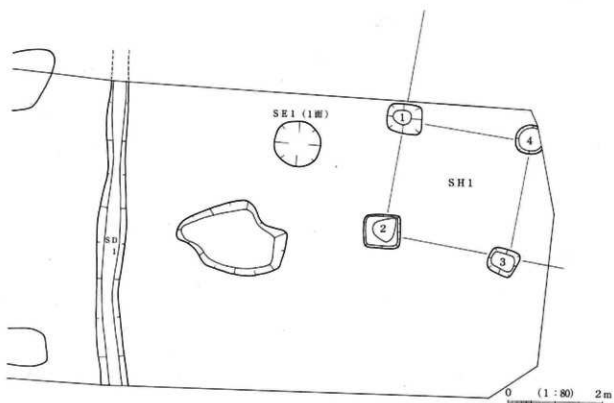
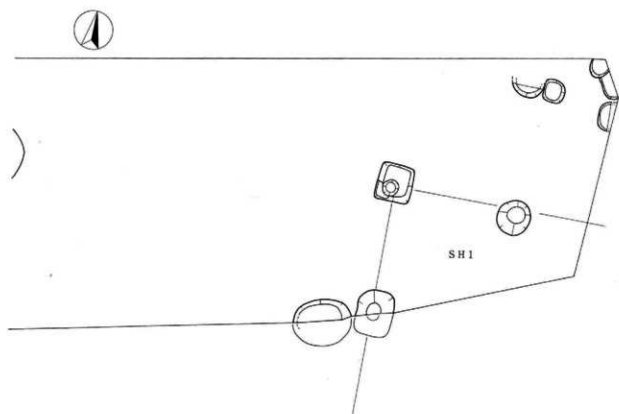


图24 I区2次面遗構実測図⑥(S = 1/80)

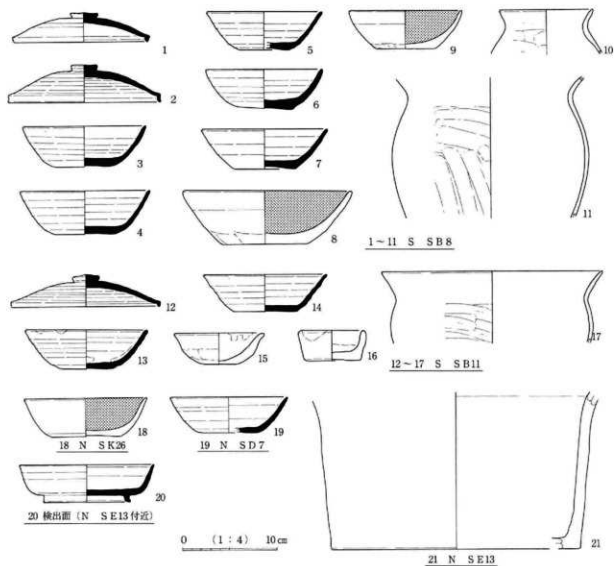


图 25 I 区 2 次面出土土器实测图 (S = 1/4)



写真14 S 地点 2 面 S D07·08



写真15 S 地点 2 面 S D05



写真16 N 地点 2 面 S D07



写真17 S地点1面 SB02



写真18 N地点1面 SB01



写真19 N地点1面 SB03

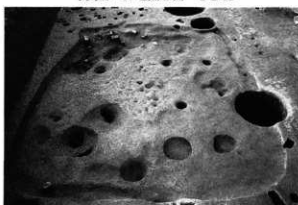


写真20 N地点1面 SB04



写真21 N地点1面 SX01



写真22 N地点2面 SB07



写真23 N地点2面 SB08



写真24 N地点2面 SB08・11

V II区の調査

II区は北陸新幹線建設用仮設道路によって南北に、西側で調査区を横断する既設水道管により東西に分割され、合計4カ所の調査を実施した。北側をN区、南側をS区、東側をa区、西側をb区と呼称し、発掘調査はN-a・b区を平成7年度、S-a・b区を平成8年度に実施した。

1 1次面の調査

1次面からは奈良時代の堅穴住居・土坑、平安時代の堅穴住居・土坑・溝、中世の井戸・土坑・溝を検出している。包含層中に含まれる遺物は平安時代を主体とし、検出遺構数からも該期が中心をなす。

中世遺構は調査区中央のSD05の両側ならびにa区西端部付近の2カ所にまとまる。遺構はいずれも仁和洪水砂下まで掘り込まれた深いもので、本来はより広く遺構が存在したと予想でき、該期遺構集中地点とできる。SK07は炭を伴った土坑で、内耳鍋・カワラケ・青磁が共存しており、注目される。井戸は調査区内全域で検出された。すべて素掘りで井戸枠は確認されていない。出土遺物が乏しく時期決定要素が少ないが、覆土中に包含層土の落ち込みがみられない点や壁際で確認されたものが仁和洪水砂層を掘り込んでいる点などより、いずれも中世以降の所産と判断される。このように中世では居住を明示する住居の検出こそなかったが、仁和洪水以後、断絶した人的営みの回復を確認できる遺構が少ないながら確認された。

平安時代遺構はほぼ全面に展開するが、南北方向に溝が検出された東側は希薄となる。この点はI区の西側とも通じ、集落構造を知るうえで注意される。堅穴住居は調査区東側の散発的な分布状況とは対比的に西側で密集して検出され、特にb区では重複関係が顕著となる。さらに西側のⅢ区においては溝が数条並行して検出されて居住域の広がりは認められず、a区西半・b区ならびに後述するⅢ区Sa地点・市道篠ノ井大当線地点付近に東西を溝によって区画された居住域が存在したと想定される。

N-b区SB05は仁和洪水砂によって埋没した最も新しい堅穴住居である。覆土は床面直上まで明黄褐色砂層の単一土層で、砂を除去することで床面ならびにカマドを検出した。ただし、柱穴を持たない構造であるため折れた柱痕はもとより覆土中で建築材の確認はなかった。さらにカマドは芯材と想定される石材を検出したが粘土貼りによる本来のカマド形状は確認されないうえ、火床部が掘り込まれてピット状になっていたことから、当住居が洪水によって倒壊したとは考えがたい。住居廃棄直後に洪水によって埋没したと考えることが妥当であろう。

N-a区西側より、焼土遺構が2基確認されている。当初、住居に布設されるカマドの単独検出を想定して周辺の精査を行ったが、住居等は検出されず、単独立地であることから焼土遺構とした。1号焼土遺構(図37)は粘土壁の立ち上がりと北側に炭の散布が確認された。ただし、北側は方形土坑であるSK11によって破壊され、その底面で炭を検出したにすぎない。主軸上の全長は約150cmで、焼土壁は南北67cm、東西82cmを測る。天井は崩落していたため構造は不明であるが、北側を除く三方に焼土壁の立ち上がりが確認された。壁高は南側主軸上内側で24cmを測る。底部は擋斜状に掘り込まれ、中央部で確認面より約27cmを測る。内部には焼土混じりの土が充填し、底部壁際に石材片が2点認められた。鍛冶炉等の生産関連遺構や火葬施設等の可能性を考慮したが、焼土内や炭内より性格を示す遺物の出土はみられなかった。

2号焼土遺構(図38)は1号焼土遺構の東約8mにほぼ並行して位置する。主軸上で全長119cm、最大幅69cm

地区名	遺構名	時代	発掘調査		埋没 状況	付属施設	特記事項	備考	遺構ID 調査号	土器ID 調査号	写真 番号
			発	掘							
Na	SD02	中世			(未定形)	表層			29	39	
Na	SD03	中世	SE04 SD01		(未定形)	表層			29	39	
Na	SD01	平安 ～中世		SE03・04					29	30	
Na	SX01	平安			平組		不整形土坑		29	39	
Sa	SD05	平安		SX02	瓦葺 なし				29	41	
Sa	SD06	平安		SK16	不明 未確認	カマド残(東壁)	木の板の残存著しく、 床面等不明		29	41	
Na	SK02	奈良 ～平安							30	32	
Na	SK12	奈良 ～平安							30	39	
Na	1号焼 土遺構	平安か		SK11			焼土層の立上り確認 SK11前で表層確認		30 37		28 29
Na	2号焼 土遺構	平安か					焼土層の立上り確認 北側に炭分布		30 38		30 31 32
Na	Ph19	平安							30	39	
Sa	SD06	平安か	SD06				N4区では検出されず		30	41	
Na	SD04	奈良			層化証 なし	カマド(北壁)	S4区SD03と同一遺構		31	39	35
Sa	SD00	奈良		SE03・04 SX01	瓦葺 2	南西隅部に焼土ビツ ト	N4区SD04と同一遺構	瓦葺の埋没遺構は層位にはならず	31	41	
Sa	SX01	平安	SD00						31	41	
Na	SB11	平安		SD05	瓦葺 なし		S4区SD02と同一遺構	焼土状況不良	32	39	
Na	SK14	中世		SE24	平組		S4区で検出したSK13 とは形状合致せず		32	39	
Na	SK16	中世							32	39	
Sa	SD02	平安		SD05	瓦葺 なし		N4区SB11と同一遺構	焼土状況不良	32		
Sa	SD05	平安	SD02				N4区SD02と同一遺構		32	41	
Sa	SD07	中世	SK10		(未定形)	表層			32	41	
Na	SD26	平安以降	SE27		(未定形)	表層			33	39	
Na	SK06	奈良							33	39	
Na	SK07	中世					層土は多量の炭 ただし、焼土なし	遺物は炭中より一筋出土	33	39	34
Sa	SD01	奈良		SE03・05	瓦葺 なし	カマド(火床のみ)			33	40	
Sa	SD03	平安以降	SD01		(未定形)	表層			33	41	
Sa	SD06	中世			(未定形)	表層			33	41	
Na	SD08	平安			瓦葺 4	カマド残(東壁)			34	39	35

地点名	遺構名	時代	原形図係		平面 特欠	(口)築造	発見事項	図号	遺構図 図番号	土層図 図番号	写真 番号
			先	後							
Sa	SK01	中世			(本完成)	溝堀			34	41	
Na	SK10	平安							35	39	
Nb	SK06	奈良~平安				コマド残(東壁)			27	40	38
Nb	SK10	奈良中		SK09			方形土坑		27	40	
Nb	SK09	平安	SK05 SK10				方形土坑		27	40	
Nb	SK05	平安	SK10		遺溝 なし	コマド(北壁) 石芯構成	コマド大床は張り込ま れ、ゼットとして横切 り割溝水により埋没		28	40	37
Nb	SK08	奈良					方形土坑		28	40	
Nb	SK11	平安					方形土坑		28	40	
Nb	SK01	平安	SK01		貼床 2	コマド残(北壁)			28	41	

表7 II区1次面主要遺構一覧表

を測り、北への主軸延長上55cm、最大幅約60cmの範囲に炭が散布する。天井部および北西側の一部で焼土壁が欠損していたが、不整楕円形の掘り込み面より構築されており、北西側も本来は存在したと想定される。焼土壁は主軸上内側で約9cmの比高差が確認された。焼土壁内部は撚鉢状に掘り込まれ、中央南よりに石材片が認められた。最深部で確認面より約11cmを測る。北側に散布する炭は掘り込み外側に散布し、この点で1号遺構と異なる。トレンチにより炭散布下に掘り込み等の施設はなく、そのまま遺構外に炭が捨てられた結果と考えられる。この点に関して、焼土壁が欠損していた北西部分には著しい炭の混入が観察された点は注意され、あるいは外側に散布する炭を除去するために焼土壁が除去された可能性も想定できる。1号遺構同様に性格を示す遺物の出土はみられなかった。なお、この2基の焼土遺構は、南向きという点で住居布設のカマドと方向を異にし、また、強く焼けた焼成部が検出されず、長期の使用は考えづらい点で共通する。

奈良時代は竪穴住居2軒、土坑2基が検出された。a区西側とb区よりそれぞれ1軒ずつ竪穴住居の調査を行ったが、2次面で奈良時代遺構を主体に調査を行ったため、合わせて後述する。



写真25 N-a 地点1次面全景



写真26 S-a 地点1次面全景



写真27 N-b 地点1次面全景

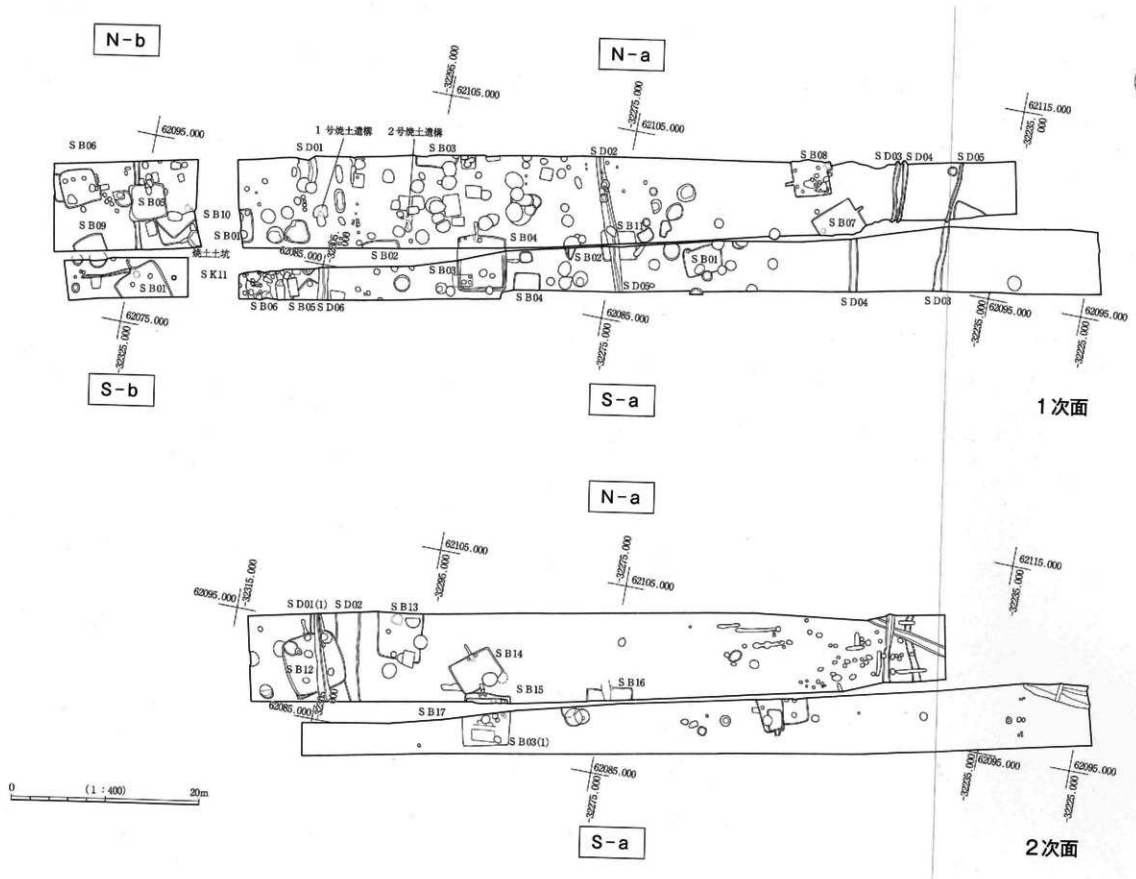


图26 Ⅱ区1次面・2次面建構分布图(S = 1/400)

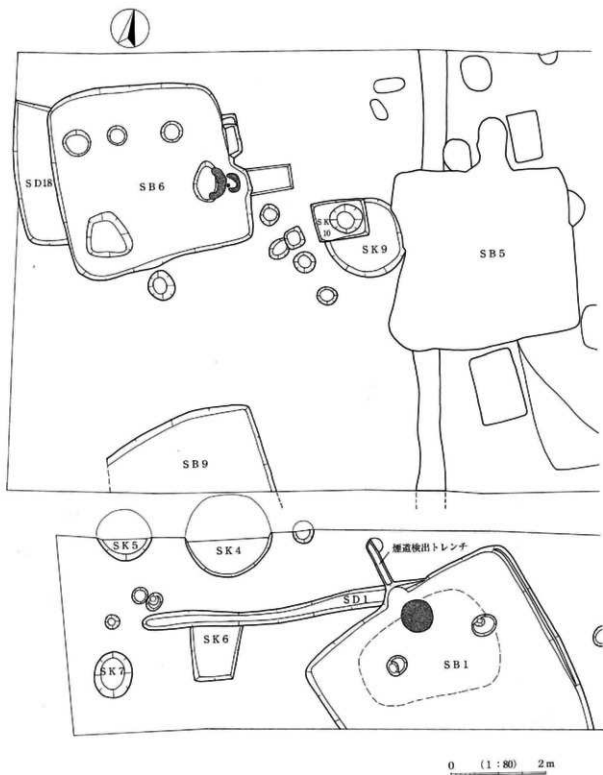


図27 II区1次面遺構実測図① (b地点) (S = 1/80)

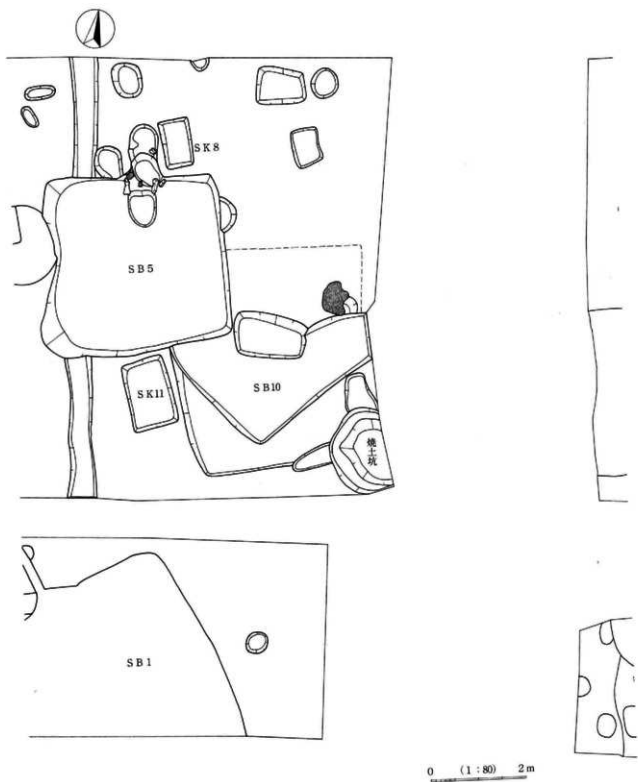


图28 II区1次面遺構実測図② (b地点) (S=1/80)

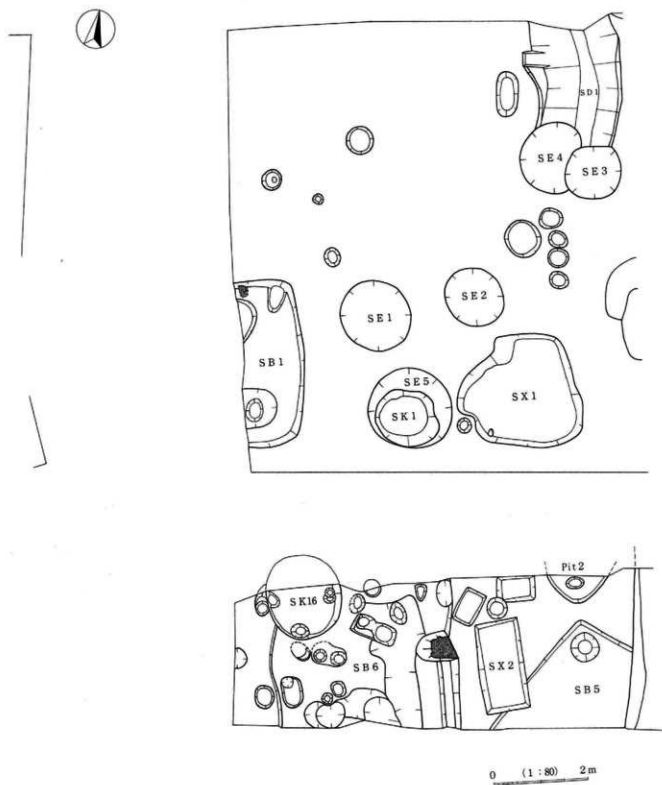


图29 II区1次面遗构实测图③(a地点)(S=1/80)

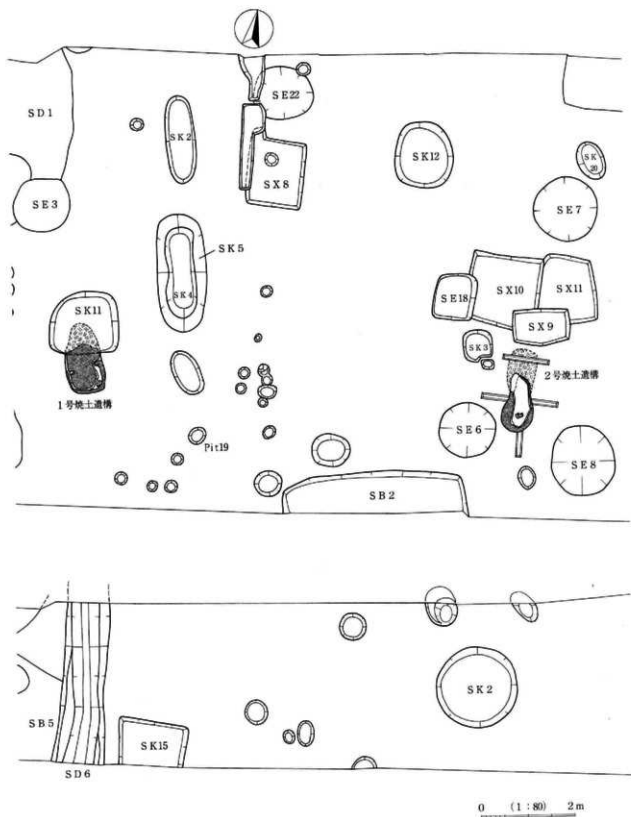


图30 II区1次面遗槽实测图④(a地点) (S=1/80)

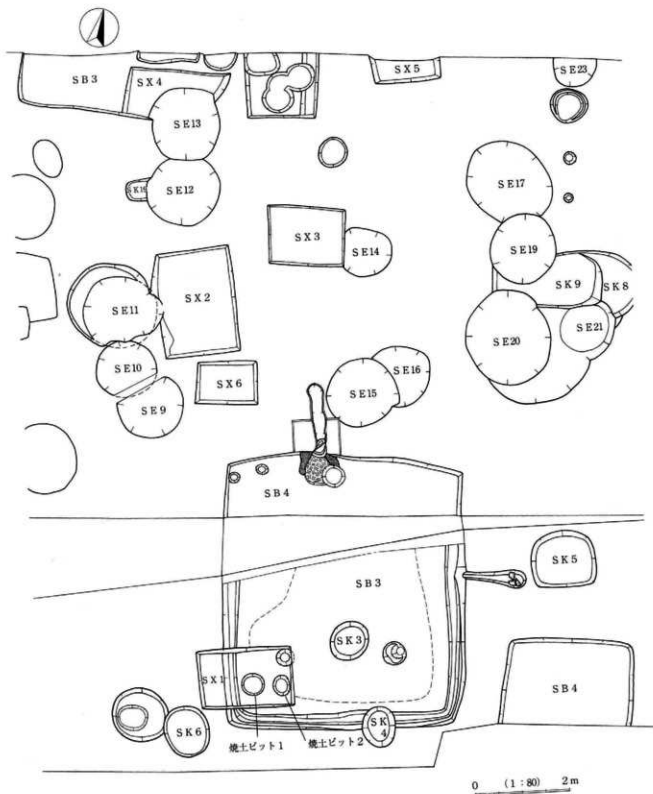


図31 II区1次面遺構実測図⑤ (a地点) (S = 1/80)

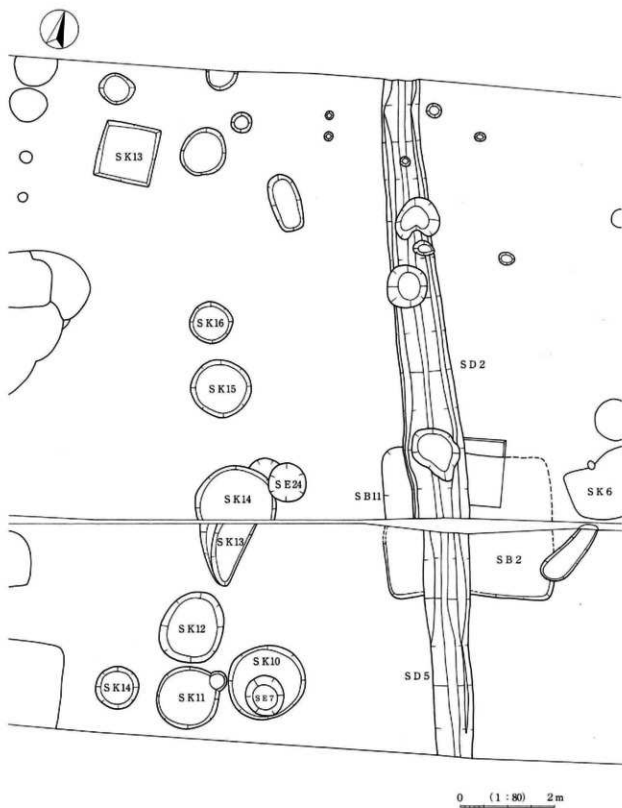


图32 II区1次面遺構実測図⑥(a地点)(S=1/80)

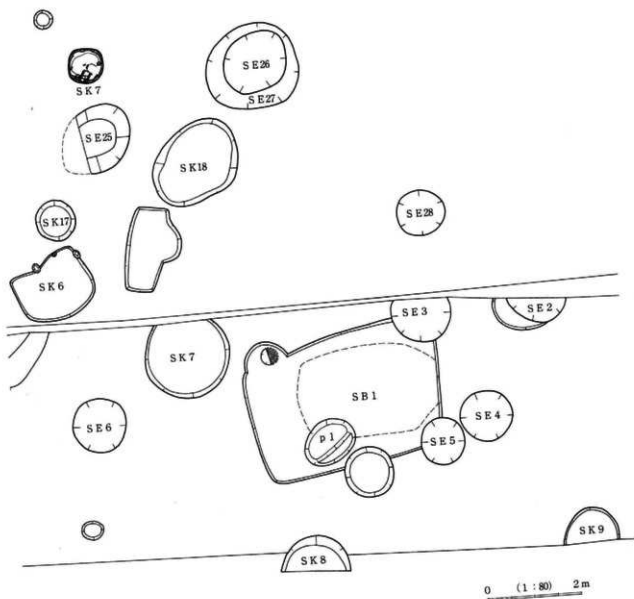


图33 II区1次面遺構実測図⑦(a地点)(S=1/80)

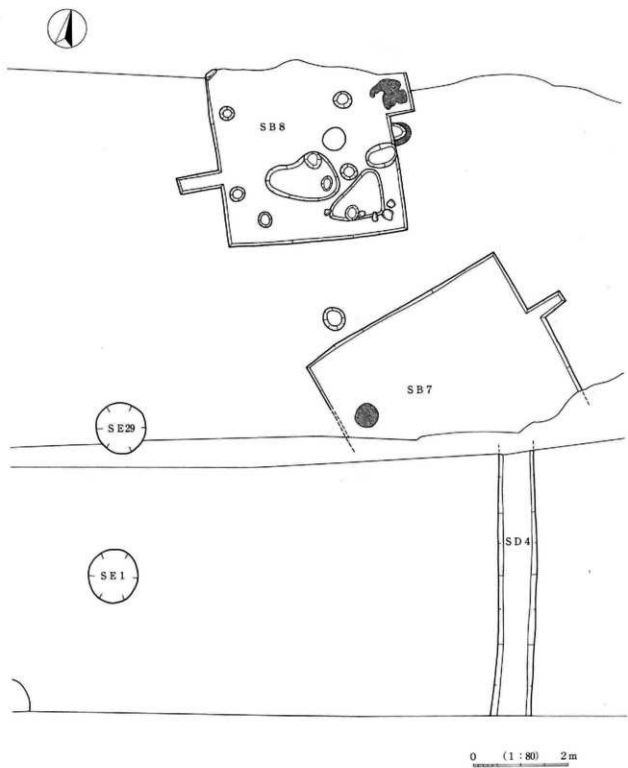


图34 II区1次面遺構実測図⑥ (a地点) (S = 1/80)

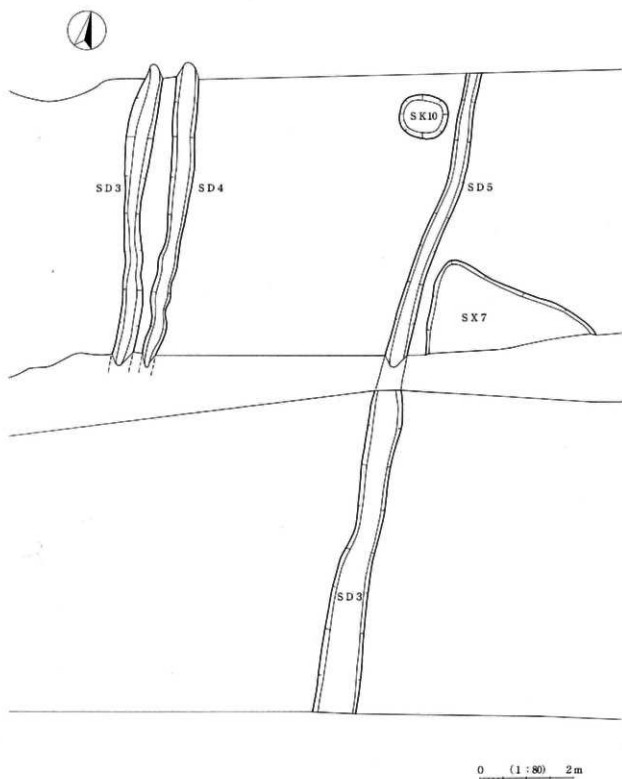


图35 II区1次面遺構実測図⑨(a地点)(S=1/80)

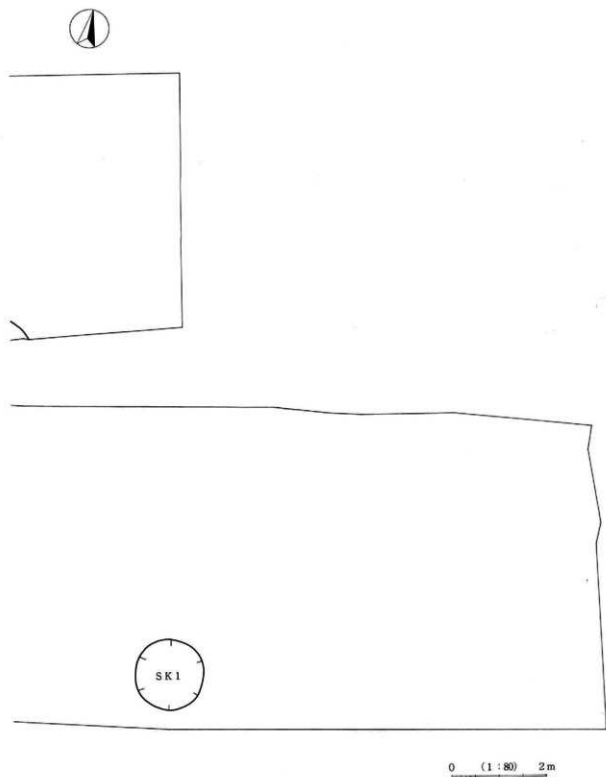


图36 II区1次面遺構実測図⑩ (a地点) (S = 1/80)

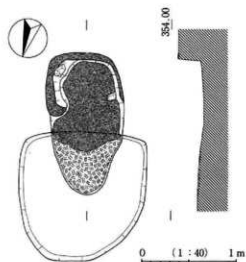


图37 N-a 地点1号烧土遗構实测图(S = 1/40)



写真28 1号烧土遺構 (半截状况)

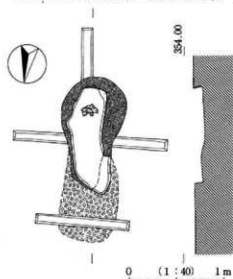


图38 N-a 地点2号烧土遺構实测图(S = 1/40)



写真29 1号烧土遺構 (半截状况)



写真30 2号烧土遺構



写真32
2号烧土遺構



写真31 2号烧土遺構石材検出状况

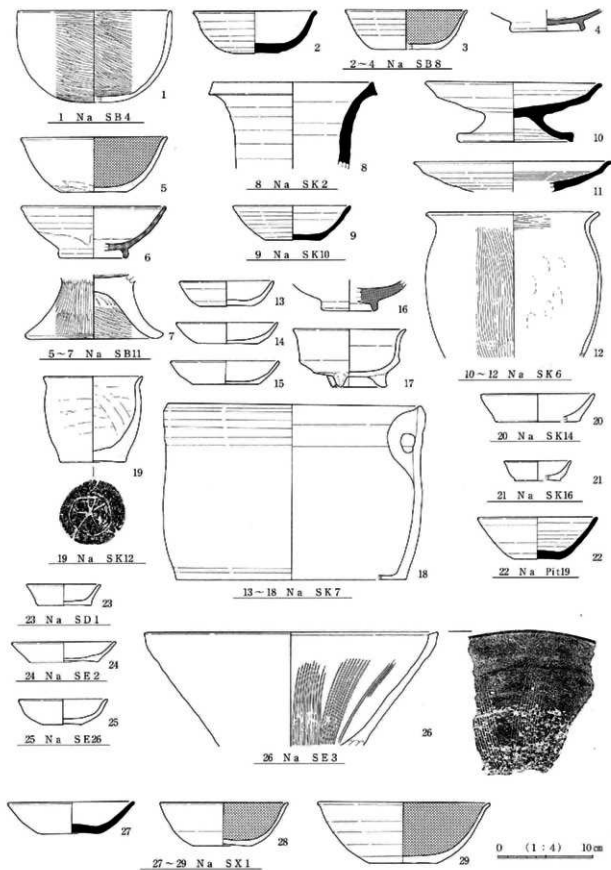


图39 II区1次面出土土器实测图①(S = 1/4)

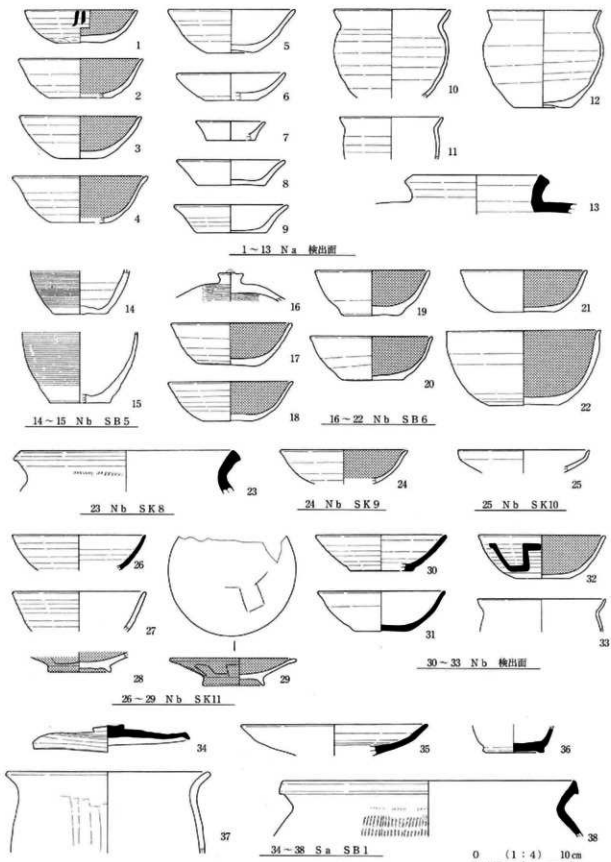


图40 II区1次面出土土器实测图② (S = 1/4)

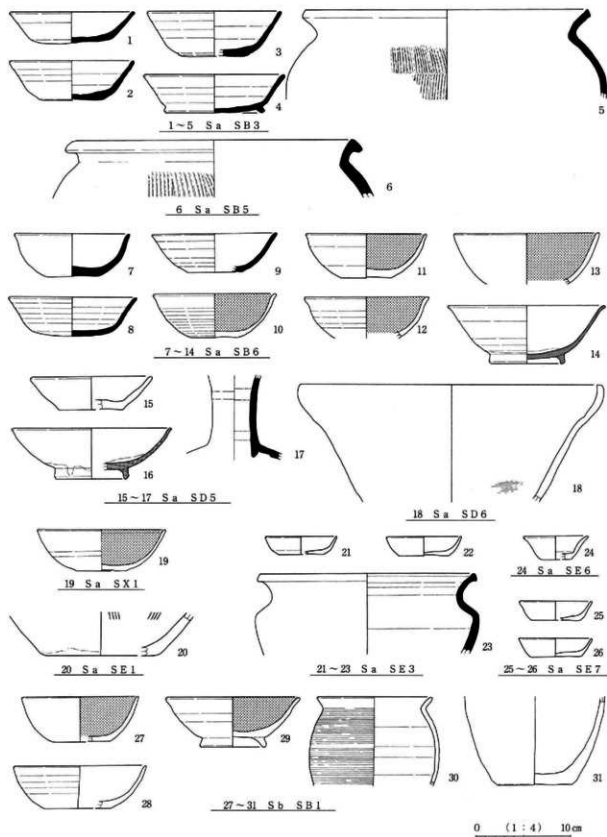


图41 II区1次面出土土器实测图③ (S=1/4)

2 2次面の調査

N・S区ともにb地点はトレンチによって2次面遺構の存在が確認されなかった。このため、2次面調査はa区のみを対象に実施している。

2次面では奈良時代の竪穴住居が確認されており、該期を主体とした調査面となる。住居群は1次面調査分を含めて5軒が西側を中心に分布し、重複関係をほとんどもたない散在的なあり方である。I区を含めた東側には該期集落の展開が確認されないことから篠ノ井遺跡群内における奈良時代集落域の東限を示すと考えられる。

1次面S-a区SB03・N-a区SB04と2次面N-a区SB12が一辺6m前後で、他は4m以下となる。N-a区SB12は一辺約6.2mを測る竪穴住居である。当調査区で調査された奈良時代住居で最も規模が大きく、4本主柱が確認されている唯一の住居である。カマド周辺に被熱した石材片が散布していたことからカマドは石芯構造であったと考えられる。カマドの方向は1次面N-b区SB06の東向きを除き、基本的に北側を向く。

N-a区SD02では弥生時代後期の土器の出土がみられ、II区において最も古い遺構となる。掘り込みは浅く、S-a区では検出されなかった。NS区間の未調査部分で完結し、千曲川まで到達しないものと予測される。



写真33 N-a地点2次面全景

地点名	遺構名	時代	遺構関係		遺構	付属施設	特記事項	調査	遺構検出番号	土器出土調査番号	年表番号	
			先	後								
N-a	SD01 (1次面)	中世	SB12					1次面SD01と同一遺構	2次面で全体の調査を実施 S-a区では検出されず	42		40
N-a	SB12	奈良	SK03 SD02	SK06 SD01	硬化面 4	カマド残(北側) 土坑2				42	50	40
N-a	SK02	奈良小			平田	直都直上に茂層				42		
N-a	SD02	弥生		SB12					S-a区では検出されず	43	50	
S-a	SP03 (1次面)	奈良			陥床 なし	焼土・焼土ピット	1次面SK03の下層床面	1次面SB03により本来のプランは把握できず		44	50	
N-a	SB15	奈良		SB17	硬化面 検出されず	カマド(北側)	1次面SB03下層床面と 同一遺構か			44		
N-a	SB17	奈良	SB15	SB15	硬化面 検出されず	北側に焼土 (カマド残骸か)	1次面SB03下層床面と 同一遺構か			44		
N-a	SB14	奈良		SB15	硬化面 検出されず	カマド(北側)			遺構はSB15ならびに1次面 骨付跡により把握	44	50	41
N-a	SB16	奈良			陥床 検出されず		北側に焼土あり			45	50	
S-a	SE08	奈良	SK13 (1次面)							45	50	
S-a	SE01	中世					1次面SB01と同一遺構			46	50	
N-a	SD01	平安以降					II-N-a区SD01・II-S-a 区SD01・I-S 区SD08は同一遺構			48	50	
S-a	SD01	平安以降								49		
S-a	SD02	平安以降					I-S区SD07と同一遺構			49		

表8 II区2次面 主要遺構一覧表

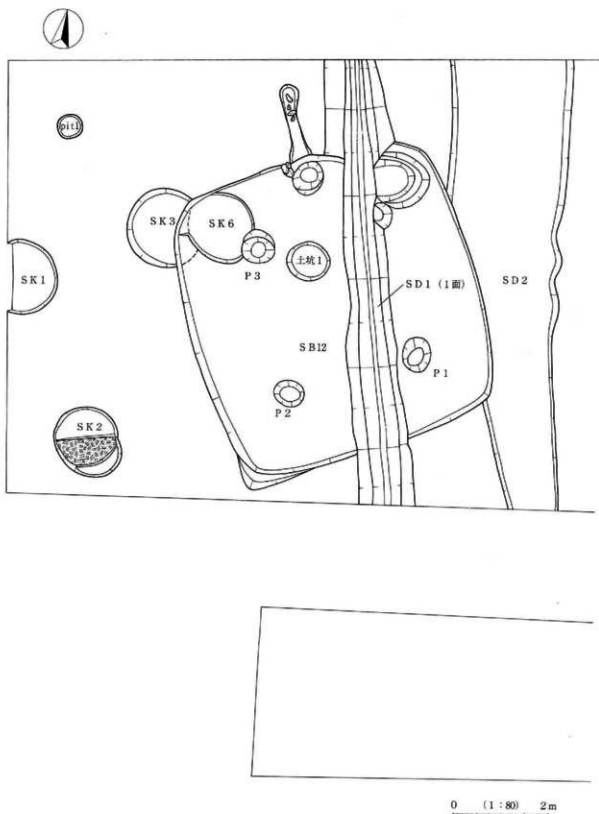


图42 II区2次面遺構実測図①(a地点)(S=1/80)

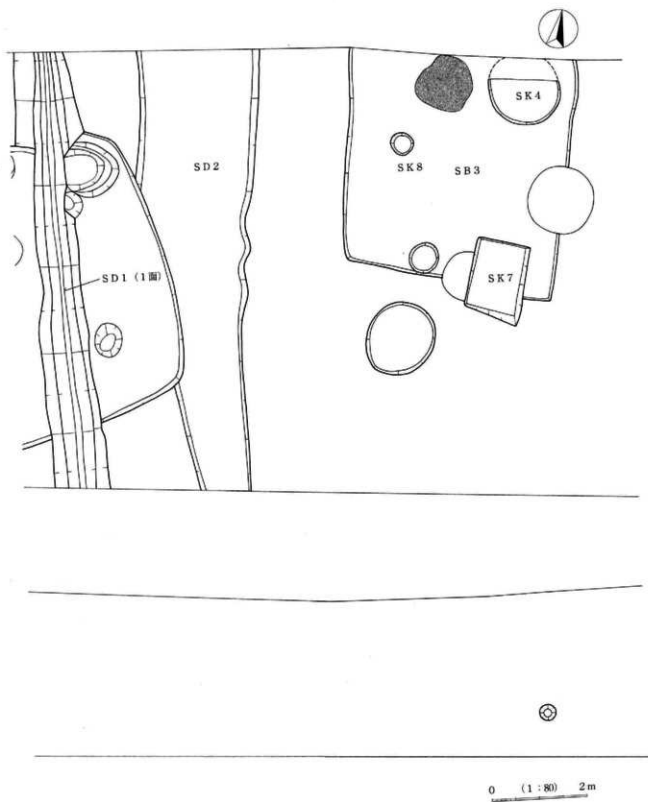


图43 II区2次面遺構実測図② (a地点) (S = 1/80)

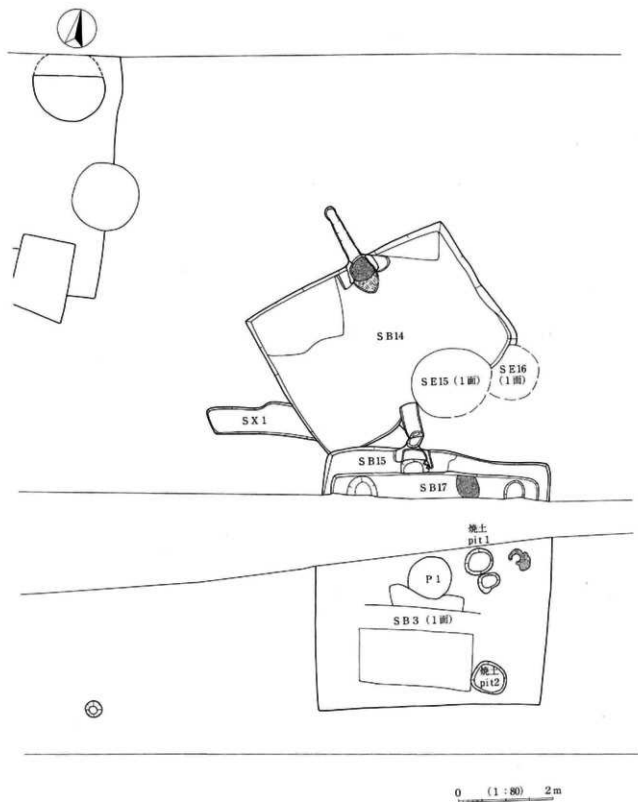


图44 II区2次面遺構実測图③(a地点)(S=1/80)

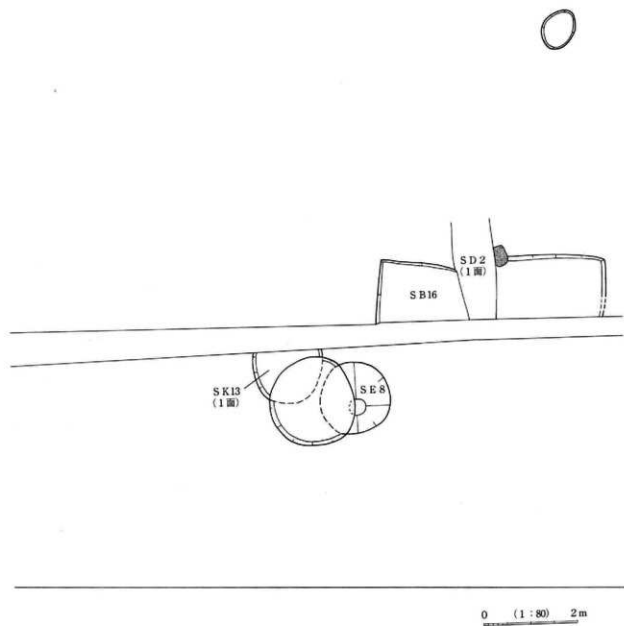


图45 II区2次面遺構実測图④(a地点)(S=1/80)

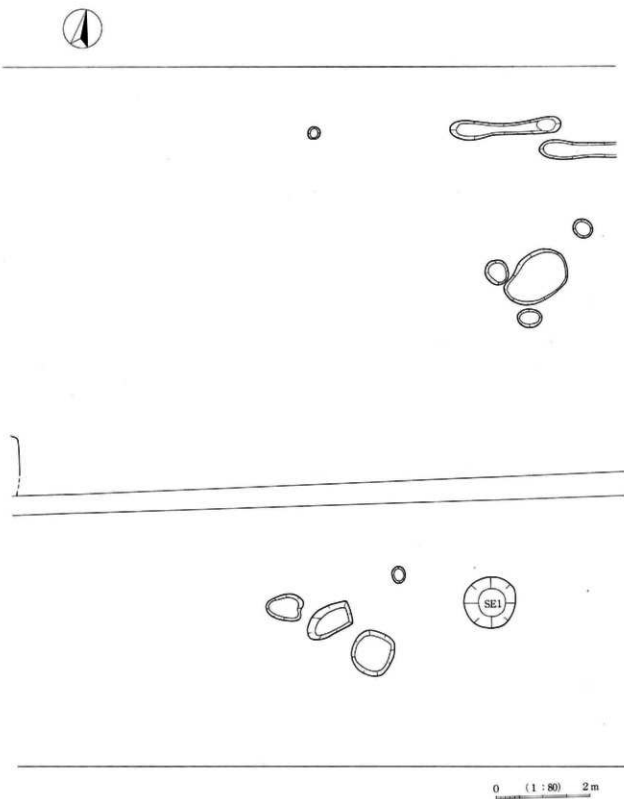


图46 II区2次面遺構実測図⑤ (a地点) (S = 1/80)

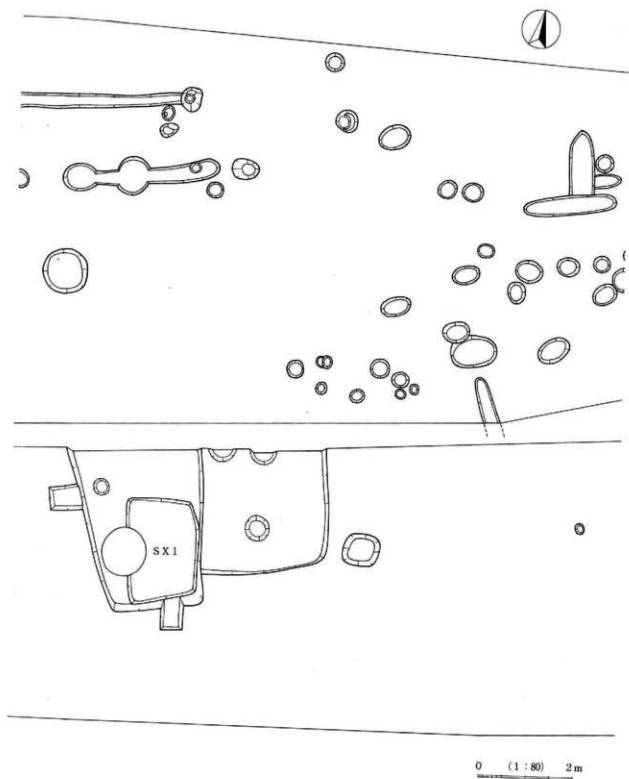


图47 II区2次面遺構実測図⑥ (a地点) (S = 1/80)

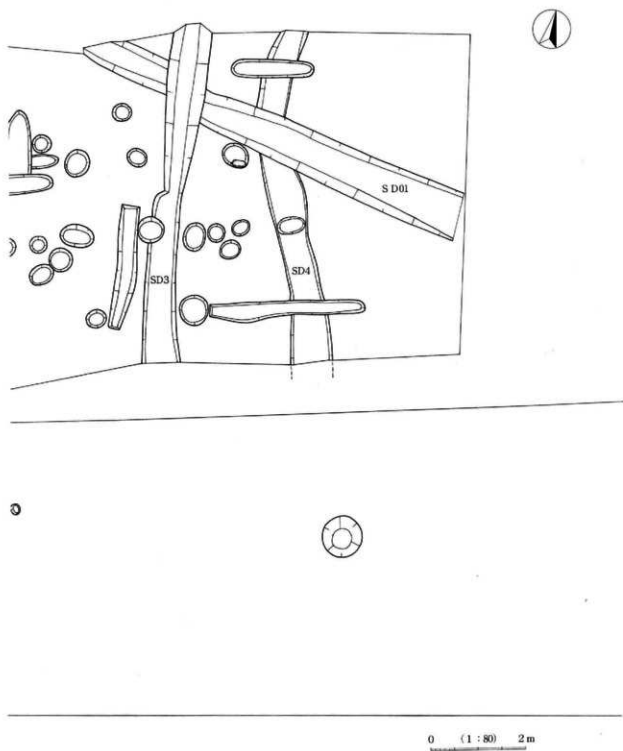


图48 II区2次面遺構実測図⑦(a地点)(S=1/80)

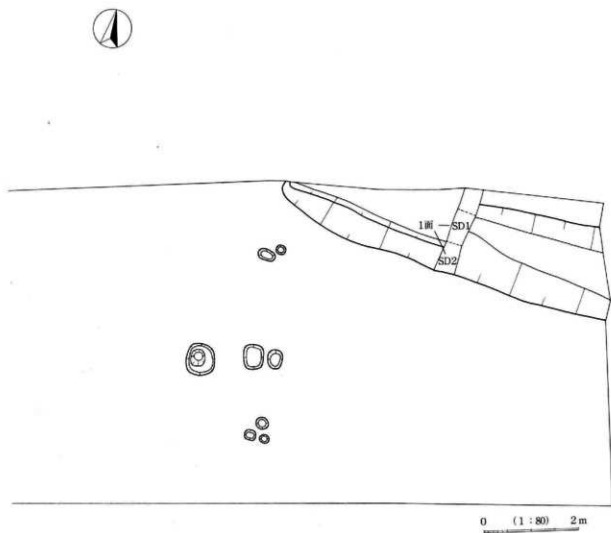


图49 II区2次面遺構実測図⑧ (a地点) (S = 1/80)

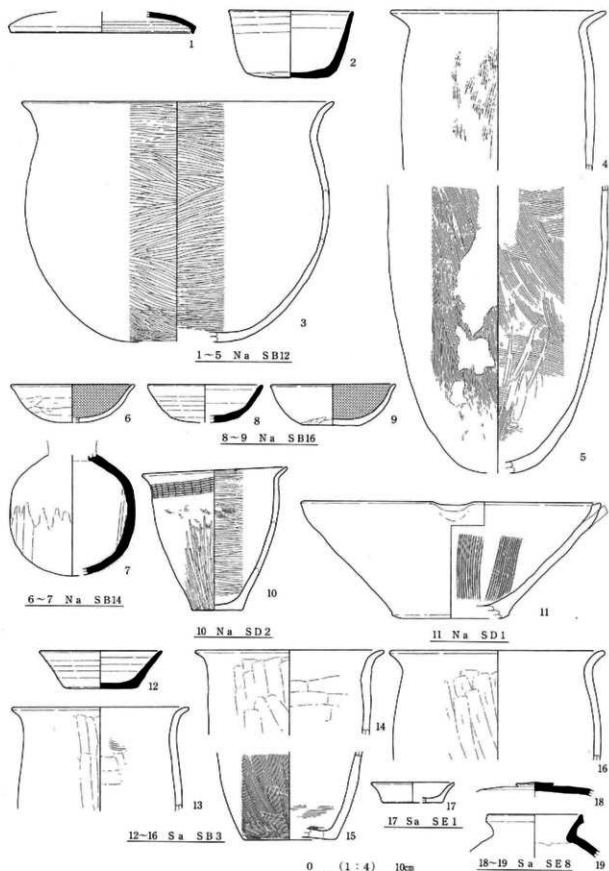


图50 II区2次面出土土器实测图 (S = 1/4)



写真34 N-a 地点1次面 SK07



写真35 N-a 地点1次面 SB08



写真36 N-a 地点1次面 SB04



写真37 N-b 地点1次面 SB05



写真38 N-b 地点1次面 SB06



写真39 S-b 地点1次面全景



写真40 N-a 地点2次面 SB12



写真41 N-a 地点2次面 SB14カメラ

VI Ⅲ区の調査

Ⅲ区の発掘調査は北陸新幹線建設用仮設道路による南北2分割に加え、調査区に隣接する住宅や畑地への出入口確保、ならびに埋設水道管の保護のため、それぞれ3分割し、合計6地区の調査を実施した。地区名称は調査実施の順番にあわせ、N・S区ともに東よりb・c・a地点と呼称している。

1 1次面の調査

平安時代を主体とした竪穴住居・溝・土坑が検出されている。遺構分布は東より、住居群(S-b区)・北東-南西方向に延びる大型の溝群(N-b区・S-b区・S-c区)・住居群(N-c区・S-c区)・南北方向の溝群(N-a区・S-a区)・溝以西の住居とそれぞれ遺構群としての把握が可能である。このうち、N-a区・S-a区の溝群とそれ以西の住居は奈良時代が主体になると考えられ、他が平安時代となる。

S-b区で検出された住居群はⅡ区より連続する平安時代居住域を形成する。N-b区で検出された溝によって北側を限定でき、市道篠ノ井大当線地点の調査状況を合わせて、居住域は南側に展開するものと考えられる。検出された遺構は竪穴住居2軒と掘立建物2棟以上であるが、攪拌を受けた部分が多く、失われた遺構が少なからず存在するものと予測される。SB01は3.4×3.2mを測る方形プランの竪穴住居で中央のみに貼床が確認された。カマド火床部が北壁側で確認された。この住居を掘り込んでSB02が位置するが、N-b区では検出されていない。これは壁際に設置した出入口部のためで、本来は一辺4mの方形プランと想定される。

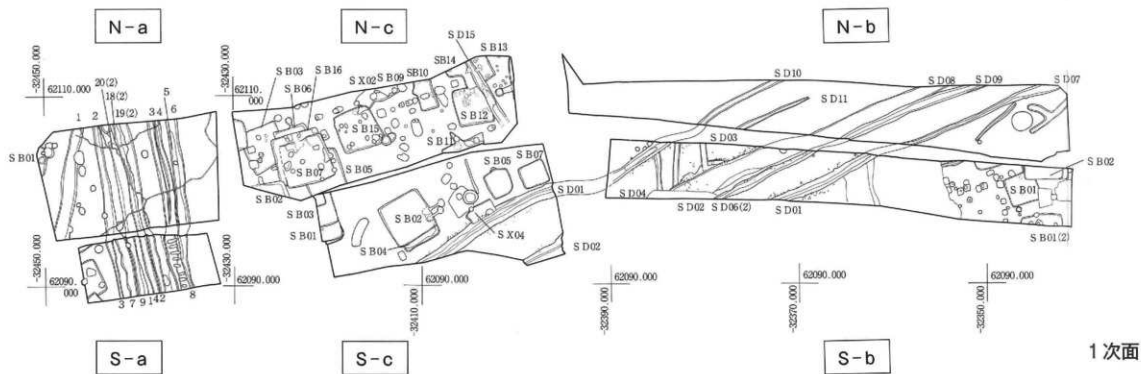
N-c区・S-c区で検出された平安時代住居群は東西を溝に挟まれた狭い地域より密集して検出された。さらに南側でb地点より延びる溝によって区切られ、北側へ展開することが予測される。竪穴住居は18軒が確認された。

N-c区SB06を除き、平安時代に該当する。また、S-c区2次面でも3軒の平安時代竪穴住居が確認されており、面的に密な分布状況を示す。重複も一部で激しく、N-c区西端部では7軒の竪穴住居が相互に重複し、このうち3軒が完全に重なった状況であった。SB06・07・16がその3軒に該当し、奈良時代のSB05を破壊して構築されていた。現地における確認状況ならびに出土遺物の様相からはSB06→16→07の順に構築されたものと考えられる。カマドは基本的に北壁に造り付けられるが、SB07では西壁側にも焼土が認められた。

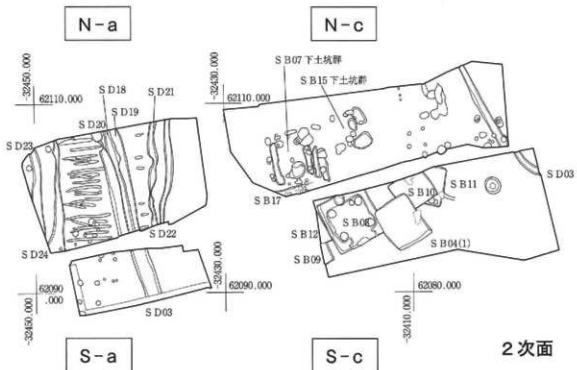
S-c区ではSB02がSB04を破壊して構築されていた。SB02床面下よりカマド残欠が検出され、SB02煙道南側より検出された煙道に連結することが確認でき、SB04に伴うことが確実である。

N-c区SB10は小型長方形の特殊遺構である。住居として調査を実施したが、調査区外となる北壁を除いた三壁は明瞭に検出され、規模が広がる可能性は低い。柱穴を持たない脆弱な床面上では円形の焼土分布が3箇所認められた。この焼土に炭がほとんど伴わず、また、カマド火床のように固く焼き締まってもいなかった。SB12・13は一辺4mと3.2mをそれぞれ測る小型住居で、SB13がSB12を掘り込む。また両住居ともSD15に破壊されている。SB12に顕著のように脆弱な床面上に焼土・炭が散布し、被熱を受けた石材破片が伴う。SD15底面で確認された炭・焼土もSB12に伴うと考えられる。これら多量の焼土と炭の散布の性格付けは難しいが、調査区内でも特定箇所集中することからⅡ区等でみられた鍛冶など生産的行為との関連も想起される。

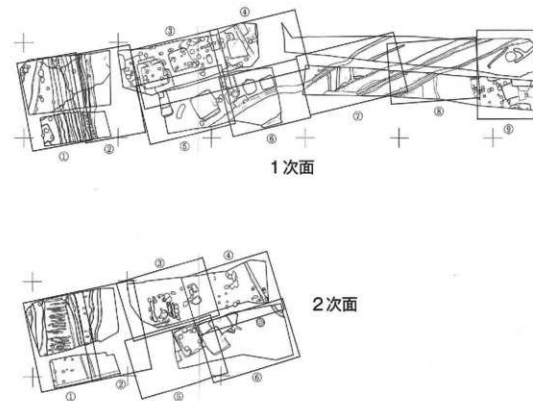
N-b区・S-b区・S-c区では北東-南西方向に4条の溝が並行して開削されている。溝群の確認面には杖状の小穴が列をなして並び、溝際に設置された小規模な横状施設の存在が考えられる。奈良時代以前には空白地であっ



1次面



2次面



遺構実測図 (S = 1/80) 掲載割付

図51 Ⅲ区1・2次面遺構分布図 (S = 1/400)

地点名	遺構名	年代	重層関係		遺構 形状	付属施設	付属事項	備考	遺構図 図番号	土器図 図番号	写真 番号
			北	南							
Na	SD01	奈良			陥没 検出されず	東部中央付近に焼土 (カマド残欠か)		大中が調査区外	52	61	
5a	SD01	奈良	SD04				Na区SD18と同一遺構		52	63	46
Na	SD03 SD04	奈良						当初、1条の溝として調査 底部直上で2条と判明	53	61	45
Ne	SD03	平安	SD04・06 SD07・16		陥没 なし				53	54	61
Ne	SD05	奈良	SD07・16		陥没 不明				54	61	47
Ne	SD06	平安	SD03	SD07・16	埋込面 不明	カマド残 (北壁)		鎌倉土器出土	54	62	47
Ne	SD07	平安	SD05・06 SB16		埋込面 4	北壁と西壁に焼土 (カマド残欠か)		鎌倉土器出土	54	61	47
Ne	SB10	平安			陥没 なし	3箇所より焼土確認	東西に規模が拡大する 可能性はない	整った住居の可能性低い	54	62	
Ne	SB15	平安			埋込面 4	北壁側に焼土 (カマド残欠か)			54	62	49
Ne	SB16	平安	SD03・06 (SB05)	SD07	埋込面 不明	カマド (北壁)			54	63	47
Ne	SX02	奈良～平安		SB15			土器はP2より出土		54	63	
Ne	SB11	平安			陥没 不明 (調査区外)	カマド (北壁)	Sc区では検出されず		55	62	
Ne	SB12	平安	SB13・14 SD15		埋込面 なし	カマド残欠 (北壁) (火床のみ確認)	床面上に焼土・灰散布 SD13範囲でも検出	鎌倉土器出土	55	63	48
Ne	SB13	平安	SB12	SD15	埋込面 なし		床面上に焼土・灰・小 石散布	SB14との重層関係不明	55	62	48
Ne	SB14	平安		SD15	埋込面 未検出			SB13との重層関係不明	55	62	48
Ne	SK20	平安		SK21					55	63	
Ne	SK21	平安	SK20						55	63	
Ne	SD15	平安	SB12・13				Sc区2次面SD03と同一 遺構か		55	63	
Se	SD01	平安		SD03	陥没 なし				56	64	
Se	SD02	平安	SD04		埋込面 なし	カマド (北壁)		鎌倉土器出土	56	64	50
Se	SD03	平安	SD01		陥没 なし			鎌倉土器出土	56	64	
Se	SD04	平安		SD02	埋込面 なし	カマド (北壁)		鎌倉土器出土	56	64	
Se	SD05	平安			陥没 なし			鎌倉土器出土	57	65	51
Se	SD06	平安								64	
Se	SD07	平安			埋込面 なし			鎌倉土器出土	57	65	
Se	SD01	平安	SX04			溝両側部に円形坑状列	N区SD10・S区SD04 と同一遺構		56	57	65
Se	SK02	平安	SK03 SK02					鎌倉土器出土	57	65	
Se	SK03	平安	SX02	SK02				鎌倉土器出土	57	65	

地点名	遺構名	時代	重要関係		東西 幅尺	付属施設	特記事項	備考	遺構目 録番号	土層目 録番号	写真 番号
			先	後							
S-c	SK04	平安							57	65	
S-c	SK02	平安	SK04	SK02・03		不詳			57		
S-c	SK04	平安		SK01 SK02		平田で掘削			57		
N-b	SD10	平安か					S-b区SD04と同一遺構		58		
N-b	SD11	平安か						SD10と並行 S区では検出されず	58		
S-b	SD02	平安	SD03・07				S-b区SD08と同一遺構		58 59	64	
S-b	SD03	平安		SD02					58	64	
S-b	SD04	平安	SD05				S-b区SD10と同一遺構	顕著土器出土	58	64	
N-b	SD07	平安					S-a区SD01と同一遺構		59 60	61	
N-b	SD08	平安					S-b区SD02と同一遺構		59		
N-b	SD09	奈良か					S-b区2次面SD05と同一遺構		59		
S-b	SK01	平安		SD02	中央部のみ掘削 なし	カマド (火庫)			60	63	32
S-b	SK02	平安	SK01		掘削 なし				60	64	32
S-b	礎石柱 建物	平安か					P 1～711まで検出。 2棟以上か	2×3軒ほどの建物が 複数存在する可能性が高い	60		

表9 Ⅲ区1次面主要検出遺構一覧表

た箇所への大規模溝の開削は北側後背湿地の条里水田と密接に関わる施設と評価することができよう。

N-a区・S-a区では東西方向に複数の溝が重複して確認された。少なくとも10条の溝が重複して掘削されており、奈良時代以来一貫して溝を開削する場所として選択されていることが明らかである。ただし、出土遺物や覆土状況からは奈良時代を主体として9世紀前半代までの使用と考えられる。また、この溝群の西側で検出された堅穴住居はいずれも奈良時代と判断される。



写真42 Ⅲ区S-b地点1次面全景



写真43 Ⅲ区N-c地点1次面全景



写真44 Ⅲ区S-c地点1次面全景



写真45 Ⅲ区 N-a 地点1次面全景



写真46 Ⅲ区 S-a 地点1次面溝群



写真47 Ⅲ区 N-c 地点1次面 SB05・06・07・16



写真48 Ⅲ区 N-c 地点1次面 SB12・13・14



写真49 Ⅲ区 N-c 地点1次面 SB15

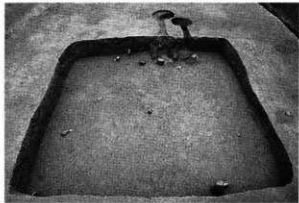


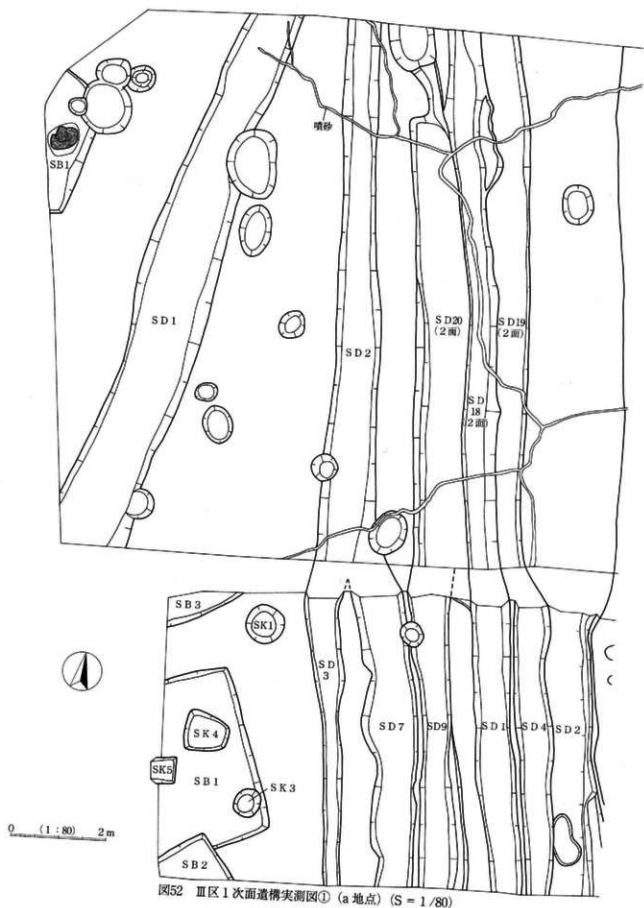
写真50 Ⅲ区 S-c 地点1次面 SB02



写真51 Ⅲ区 S-c 地点1次面 SB05



写真52 Ⅲ区 S-b 地点1次面 SB01・02



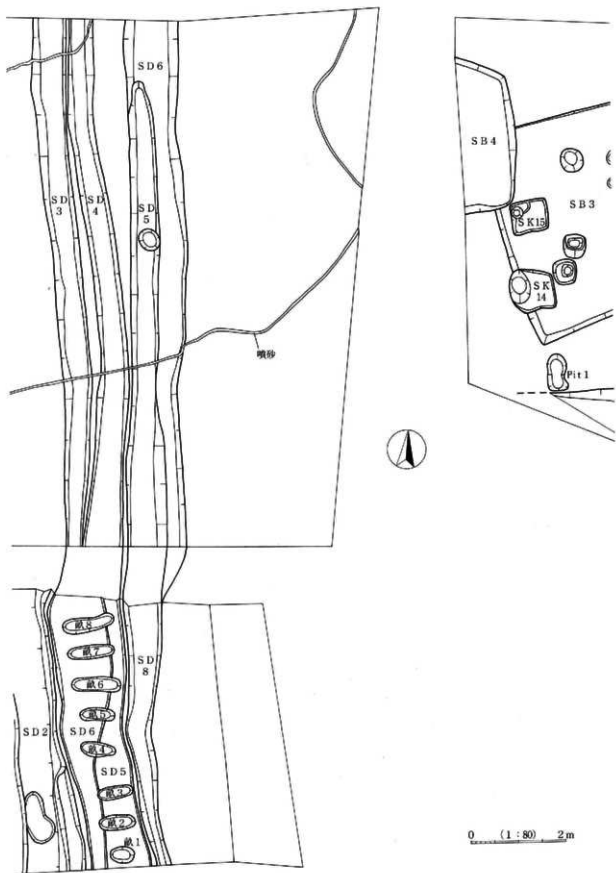
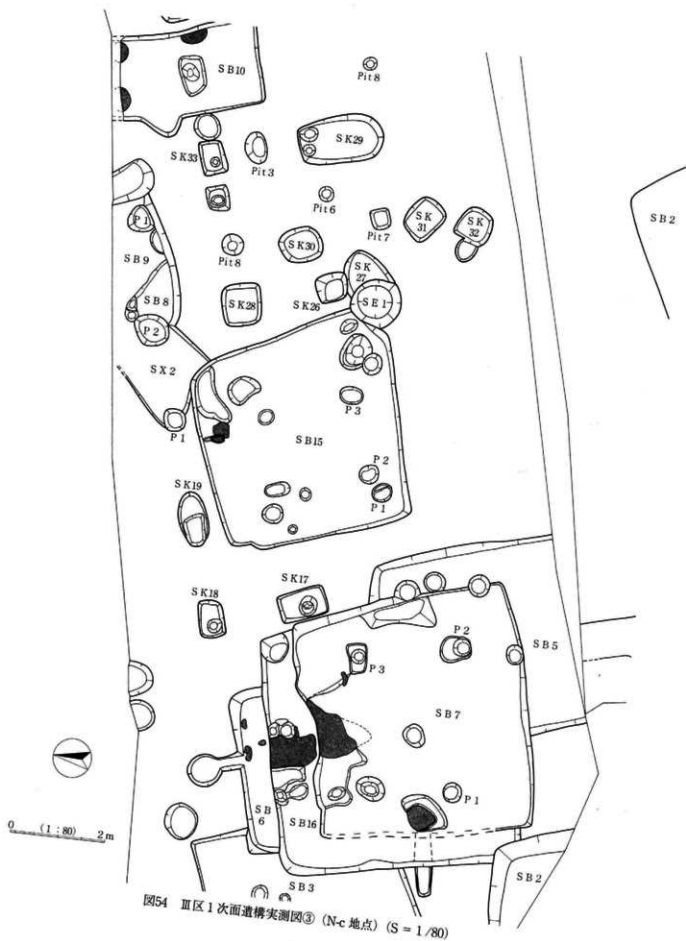


图53 Ⅲ区1次面遺構実測图② (a地点) (S = 1/80)



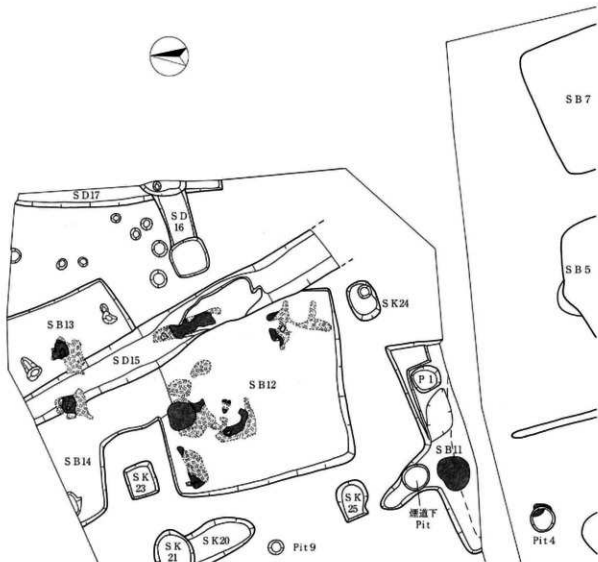
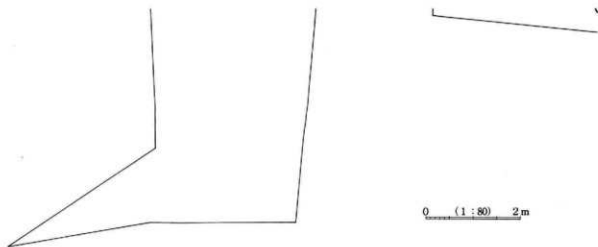


图55 Ⅲ区1次面遗构实测图④ (N-c地点) (S = 1/80)

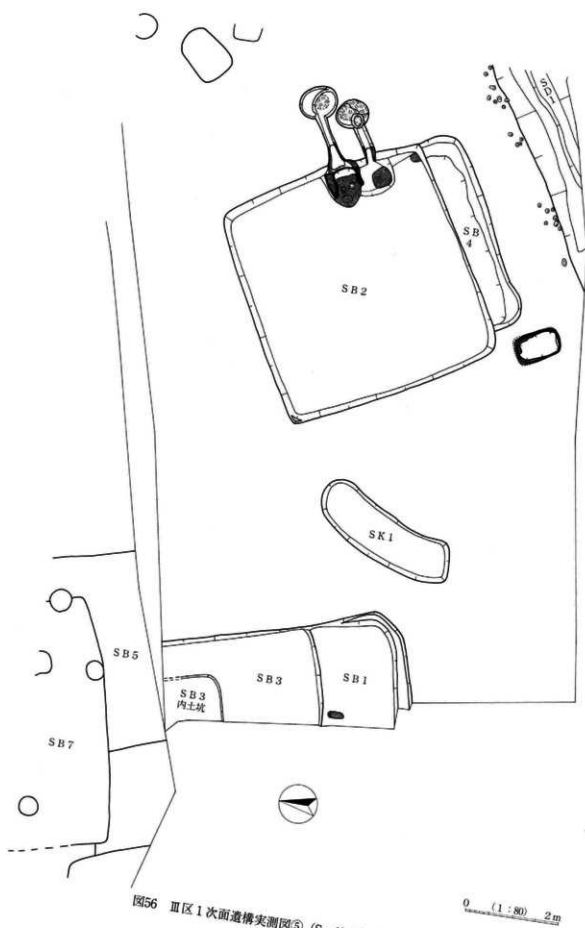
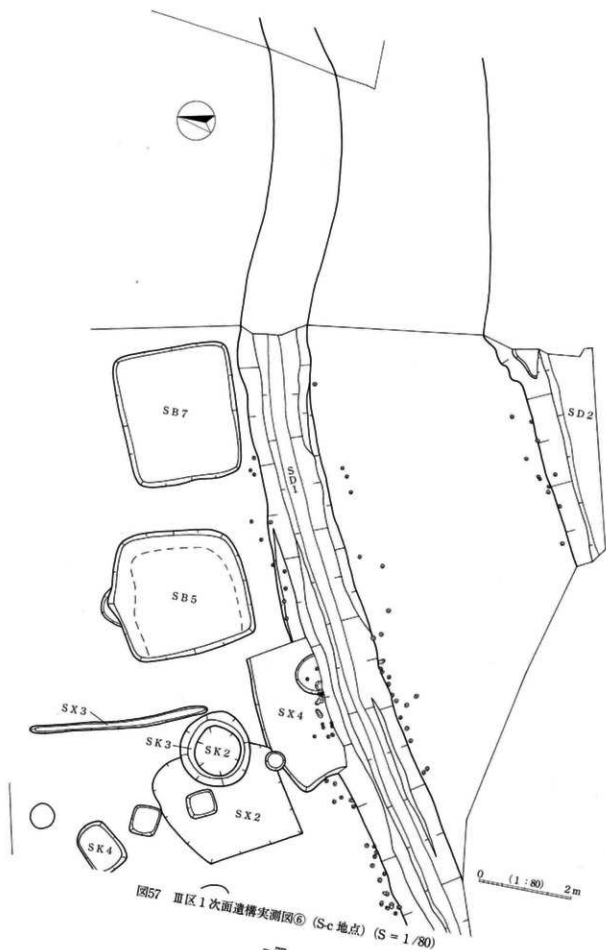


图56 Ⅲ区1次面遺構実測図③ (Sc地点) (S=1/80)



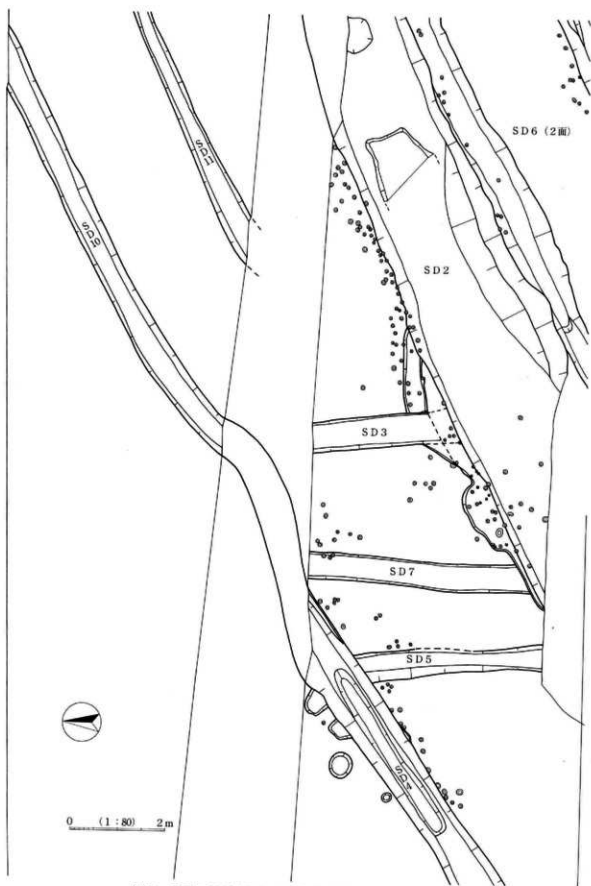


图58 III区1次面遺構実測図⑦ (b地点) (S = 1/80)

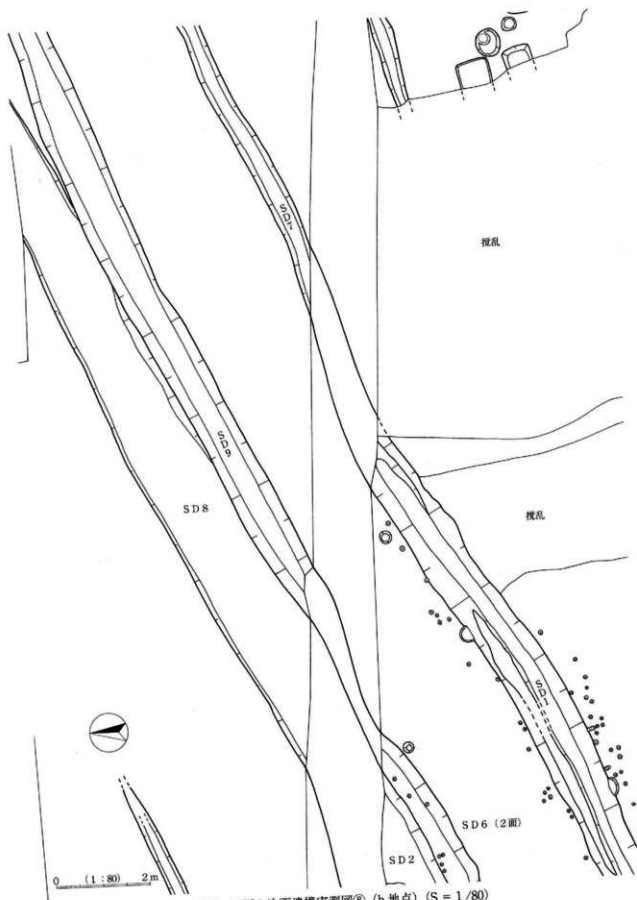


图59 III区1次面遗物实测图⑧ (b地点) (S = 1/80)

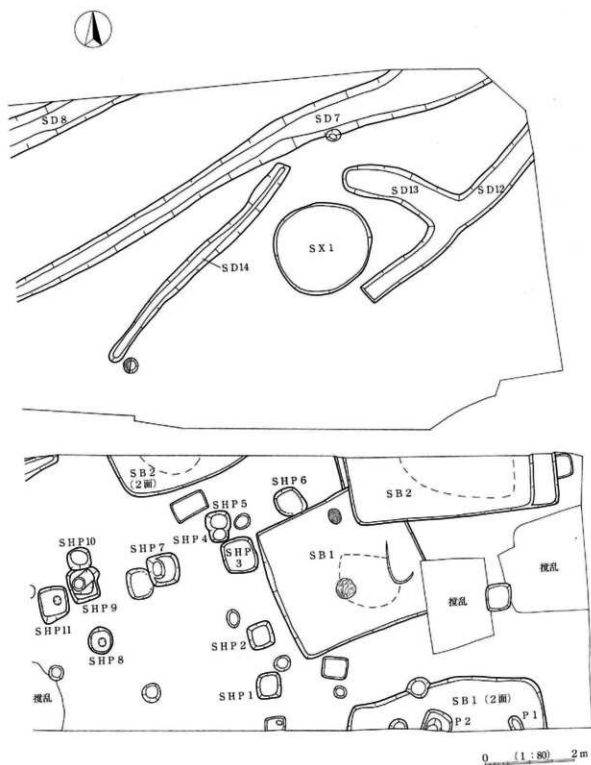


图60 Ⅲ区1次面遗物实测图⑤ (b地点) (S=1/80)

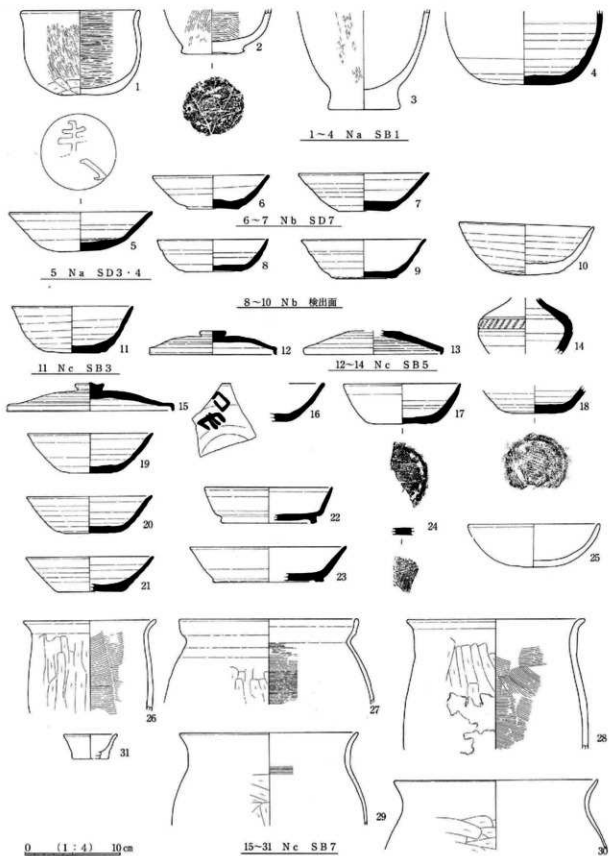


图61 Ⅲ区1次面出土土器实测图① (S = 1/4)

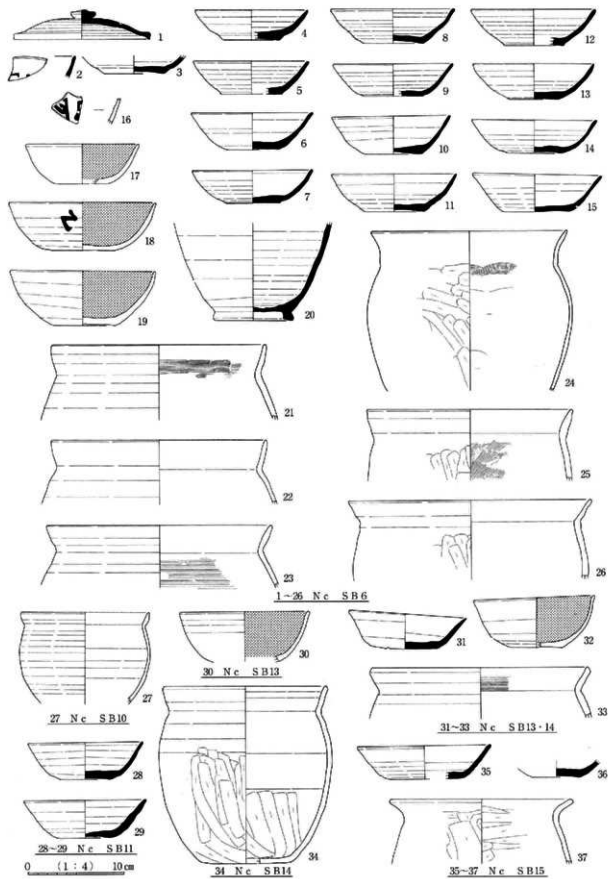


图62 Ⅲ区1次面出土土器实测图② (S = 1/4)

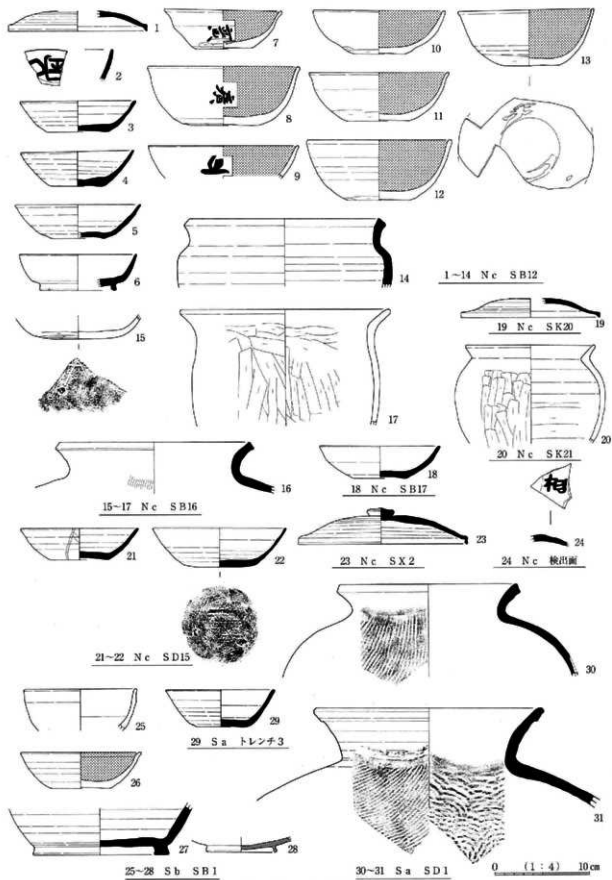


图63 Ⅲ区1次面出土土器実測图③ (S = 1/4)

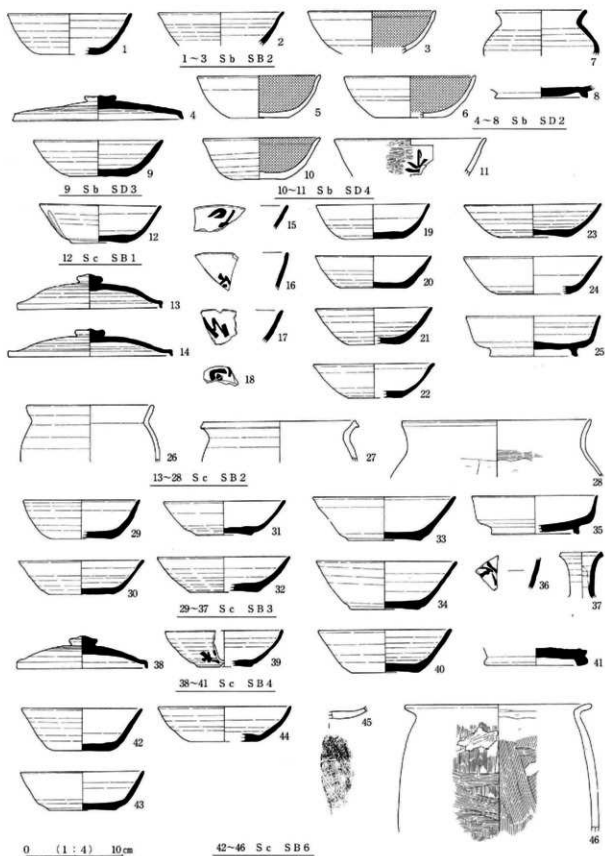


图64 Ⅲ区1次面出土土器实测图④ (S = 1/4)

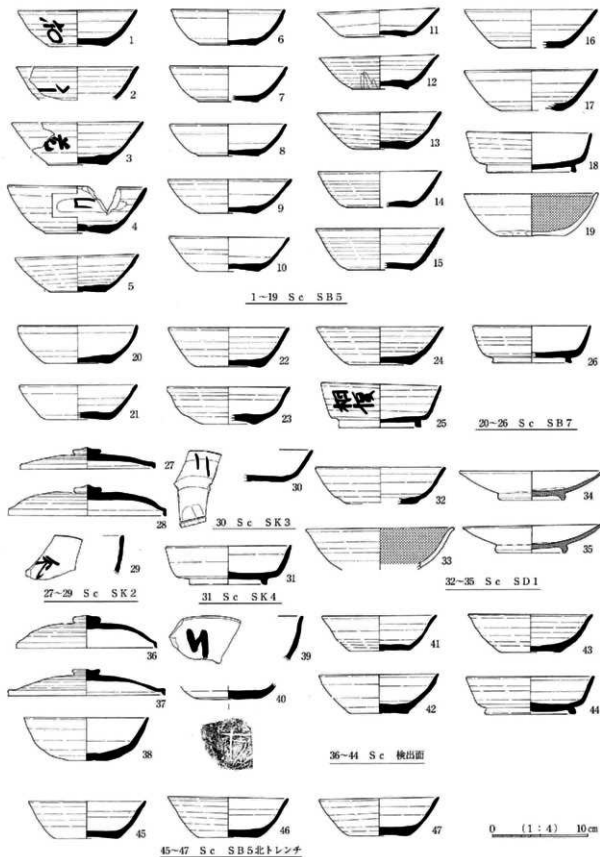


図65 Ⅲ区1次面出土土器実測図⑤ (S = 1/4)

2 2次面の調査

東側のb区では2次面調査を実施したが遺構分布が確認されなかったため、a・c区のみを図化・掲載している。基本的に奈良時代が主体となり、1次面で確認した遺構下層の平安時代遺構群もあわせて調査を実施した。奈良時代遺構は1次面確認分をあわせ、竪穴住居3軒が散在的に認められ、より東側のb区には分布していない。

竪穴住居はNa区・Nc区・Sc区にそれぞれ1軒ずつで、極めて散在的な分布状況である。平安時代に繋がる居住域には遺構が認められ、当地区の開発が後期に遡ることは確実であるが、面的広がりには確認されない。Sc区SB08は5.8×5.6mを測る方形の竪穴住居で、4本主柱を備える。カマドは北壁に造り付けられていたが、袖部は破壊され、残存していなかった。Nc区SB17はその大半を1次面で確認された平安時代竪穴住居に破壊され規模等は不明であるが、カマドは北壁で痕跡を確認した。この2軒の竪穴住居はN・S両地区でそれぞれ別に調査されたが、c地点西側端部付近(a地点側)に隣接して位置する。

N・Sa地点では複数の溝と竪穴住居が検出された。溝は南北方向に1次面を合わせて14条ほどが並行して開削され、出土遺物が確認されたものはいずれも奈良時代であった。さらに1次面の遺構検出時にはほとんどの確認面で9世紀前半代に発生した地震に起因すると考えられる噴砂が確認されており、地震発生以前に埋没していたことが確実である。溝はSD18・19・20のように一部で重複関係を持ちながらも、ほぼ同じ規模で同じ方向に開削されている。溝の同時性は遺物の出土が希薄であるため確定できないが、溝に直交する方向で1次面・2

地点名	遺構名	時代	測量関係		平面 状況	付属施設	特記事項	備考	遺構目録 番号	土器目録 番号	写真 番号
			先	後							
Na	SD18	奈良	SD19・20				Na区SD01(1次面)と同一遺構		66	72	
Na	SD19	奈良小		SD18			Na区SD01(1次面)と同一遺構		66		
Sa	SD03	奈良					初生土器混入 1次面SD01・SD04T	1次面SD01・04と同一遺構 である可能性が高い	66	72	
Nc	SD17	奈良		SB05	竪穴面 未検出	カマド残欠(北壁)	床上上に炭灰層		68	72 63	
Nc	P1	奈良		SD007			SB07によって破壊された住居の痕跡か	SD007床面下	68	72	54
Nc	SD02	奈良		SB07			SB07によって破壊された住居の痕跡か	SD02床面下	68	72	54
Sc	SB08	平安		SD02 (1次面)	硬化面 4	カマド(北壁)	壁部は床面より1段低くなる		70	72	55
Sc	SB12	平安			風呂 未検出				70	72	
Nc	SB12	平安				薬屋		藤巻土器出土	69	72	
Sc	SB04	平安			硬化面 なし	カマド残欠(東壁) 基礎跡に留意		1次面で確認 2次面で完観	71	72	
Sc	SB10	平安	SB11	SB04	硬化面 なし	カマド残欠(北壁)			71	72	
Sc	SB11	奈良		SB10	船庫 1のみ検出	カマド残欠(東壁)			71	72	
Sc	SB01	平安以降					田SK05	藤巻土器出土	71	72	
Sc	SD03	奈良小					Nc区1次面SD16と同一遺構か		71	72	
Sb	SD06	奈良小		SD02			Nb区1次面SD09と同一遺構	遺構区は1次面に同軌	58	59	72

表10 Ⅲ区2次面主要検出遺構一覧表

次面ともに検出された畝状の遺構により傾向が把握できる。1次面ではSa区西側で溝に重複し、2次面ではNa区中央に位置する。この畝状遺構の時期は不明であるが、調査区中央から西へ移動したことは確実で、溝は畝状遺構とは逆に西から東へ位置を変えて掘削されたものと想定される。この溝群の西側、a地点の西壁際では1次面で竪穴住居が2軒ほど検出されている。奈良時代の住居と判断され、IV区に継続する居住域と考えられる。

このように、奈良時代遺構群は本調査区西側に集中して分布し、東側への展開はみられない。篠ノ井遺跡群の範囲内で東端部に該当すると考えられるII区奈良時代集落との間には空白域が存在し、小規模居住域の点的分布が明瞭に把握される。東への集落域拡大の先駆的状況として評価することができるであろう。

2次面の検出ならびに各遺構下層からは、弥生時代中期前半の土器片の出土が認められた。特にN-c区SB07直下およびその周辺の溝状遺構や土坑覆土からの出土が目立ち、該期遺構の残欠と判断される。篠ノ井遺跡群では全般的に栗林式期の遺物出土は認められものの、遺構はほとんど検出されていない。中期前半代においても同様な状況が確認でき、自然堤防の形成・安定が栗林期以後である可能性を示す。この点はSa区における3次面の調査と関連して、注意される点である。

3 3次面の調査

Sa区では3次面の調査を実施した。現地表下約4mにて湧水点を確認し、クルミ・桃核等の出土を確認した。遺構は認められなかったが、湧水点の直上には弥生時代中・後期の包含層堆積が確認でき、弥生時代には低湿な環境であったことが想定される。2次面出土の土器片とあわせ、弥生時代には水場周辺の活動圏にあったことが想定される。また、この地点が奈良時代以降、溝を継続的に掘削する地点として選択された背景にはこうした低湿な環境が古代まで継続し、居住域としては適当でなかった可能性も考慮される。



写真53 III区 N-c 地点 2次面 全景



写真54 III区 N-c 地点 2次面 SB07下層溝状遺構



写真55 III区 S-c 区 2次面 S B08



写真56 Sa 地点 3次面 自然木出土状況

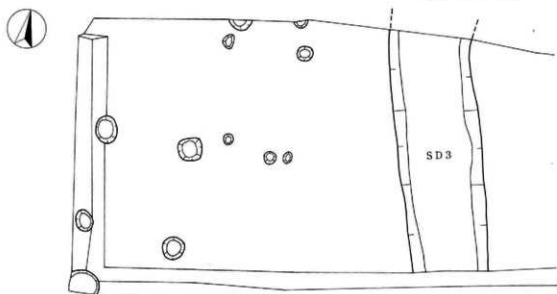
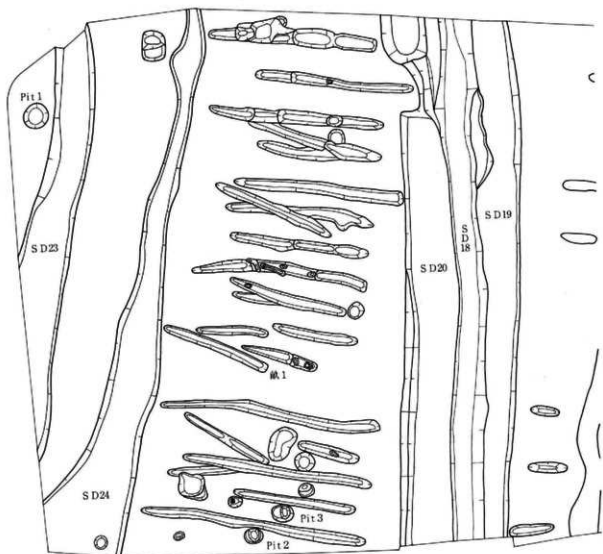


图66 Ⅲ区2次面遗構実測図①(a地点) (S=1/80)



图67 Ⅲ区2次面遺構実測图② (a地点) (S = 1/80)

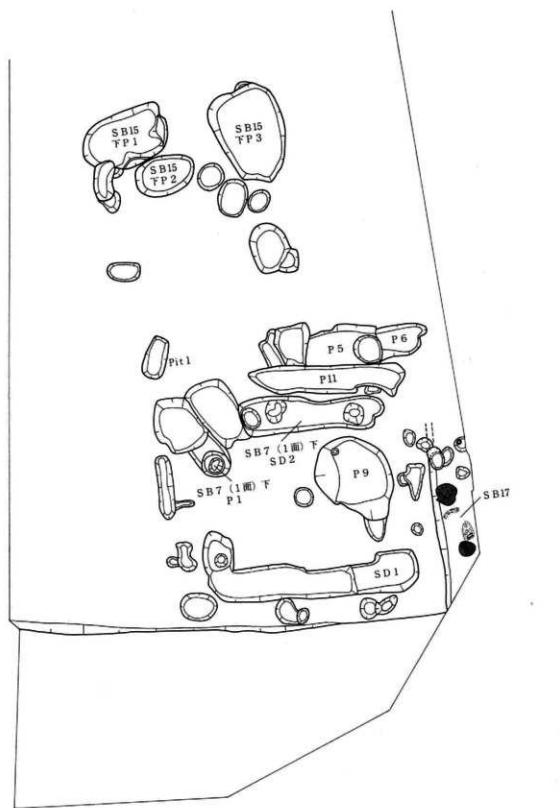


图68 Ⅱ区2次面遺構実測図③ (N-c地点) (S=1/80)

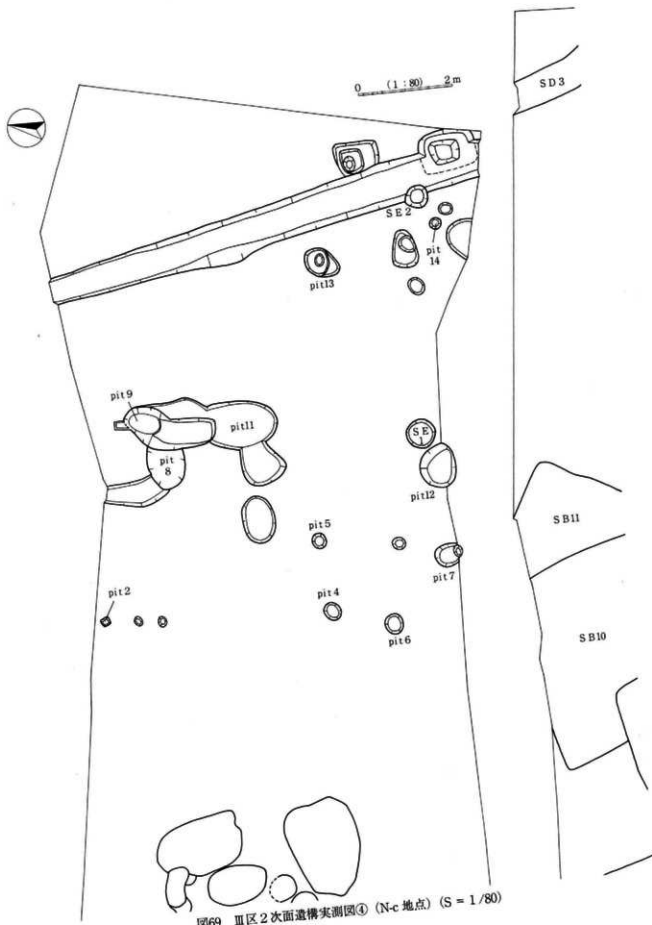


图69 Ⅲ区2次面遺構実測图④ (N-c地点) (S=1/80)

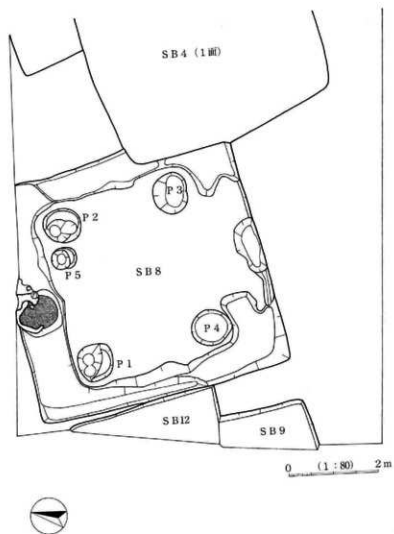


图70 Ⅲ区2次面遺構実測図⑤ (Sc地点) (S = 1/80)

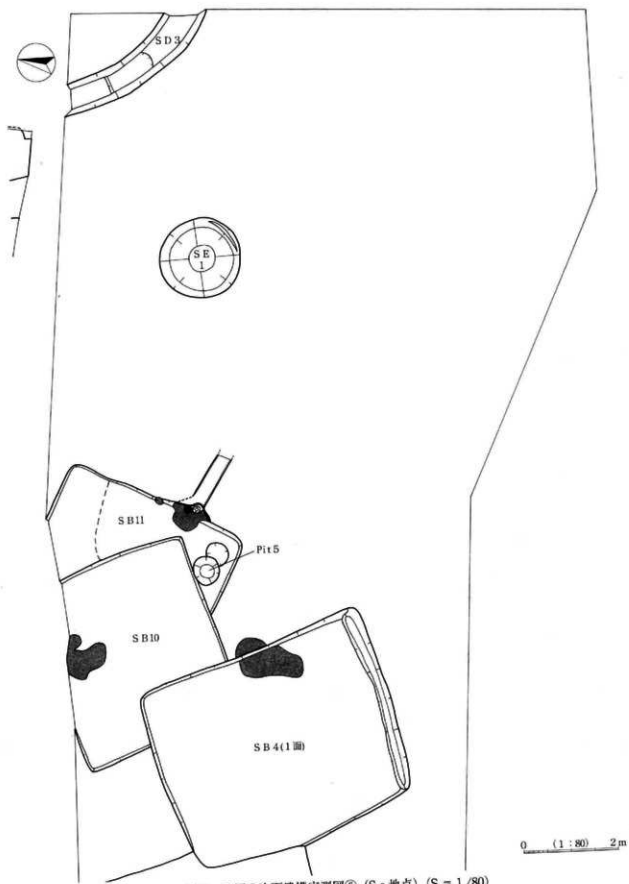


图71 Ⅲ区2次面遺構実測図⑥ (S-c地点) (S = 1/80)

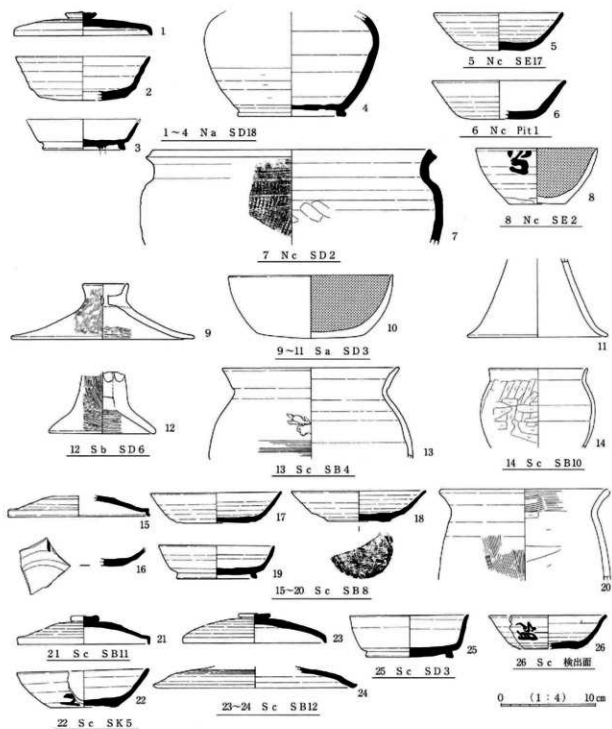


图72 III区2次面出土土器实测图① (S = 1/4)

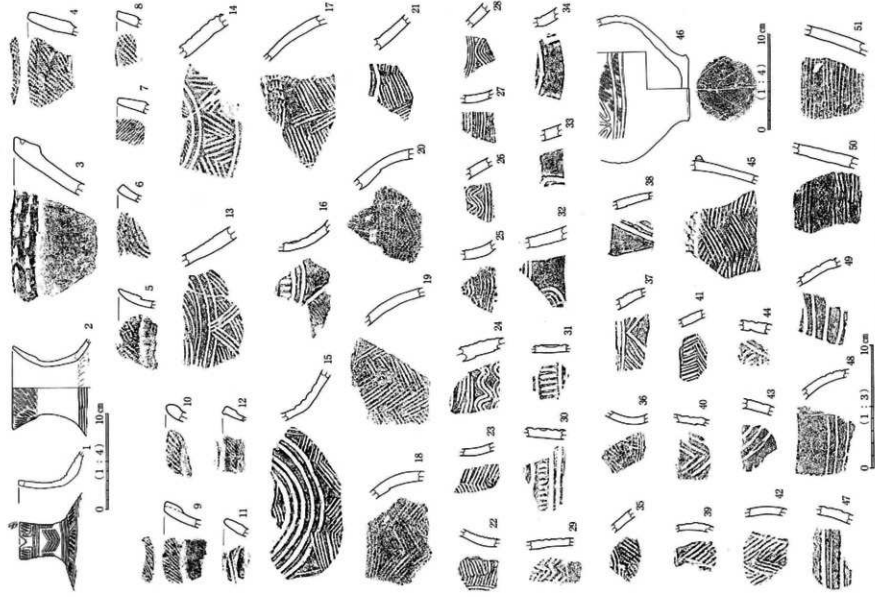


图73 Ⅲ区2次面出土弥生土器拓影①(S=实测图:1/4 拓影:1/3)

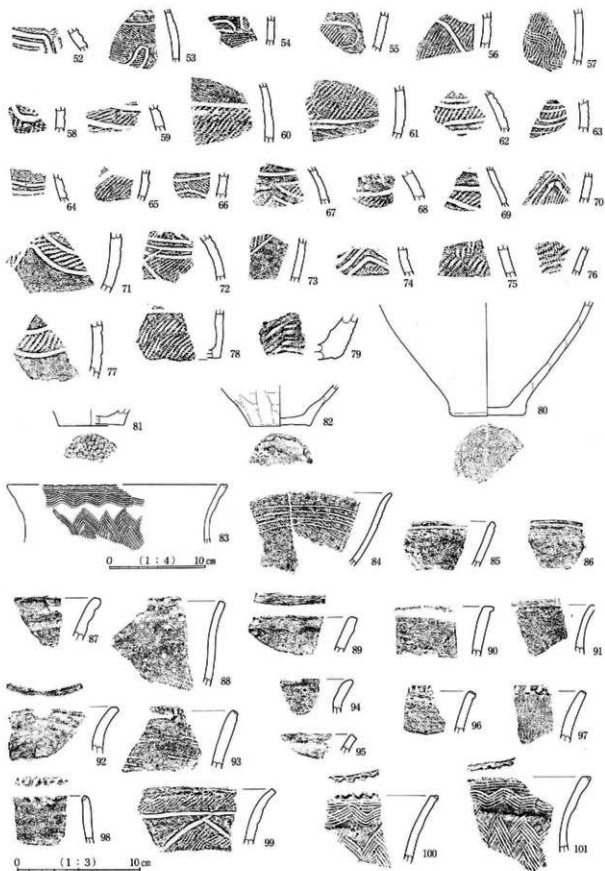


图74 III区2次面出土弥生土器拓影② (S=实测图: 1/4 拓影: 1/3)

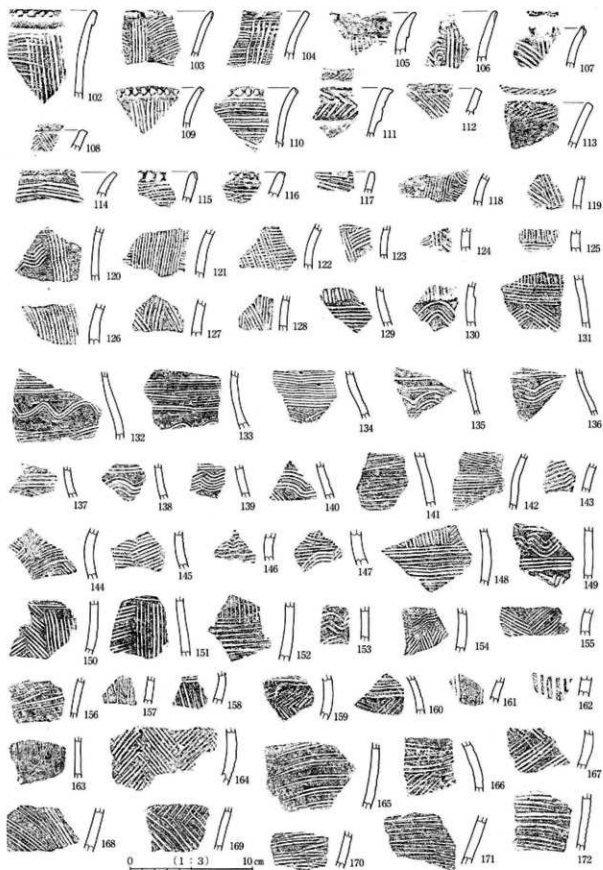


图75 Ⅲ区2次面出土弥生土器拓影③(S=1/3)

Ⅶ IV区の調査

IV区は北陸新幹線建設に係る工事用道路撤去後に着手したため、調査区の分割を行わずに調査を実施した。ただし、隣接畑地への出入口確保のため、南側で未調査部分が存在し、道路幅全面の調査はできなかった。

1 1次面の調査

古墳時代後期～中世の竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・井戸を検出している。

中世は調査区西よりの2次面で掘立柱建物（SH01）が1棟確認されている。この建物が検出された地点の1次面では溝と土坑群が検出されているが、これらは確実にSH01に重複しており、さらに新しい段階の所産と考えられる。また、SH01の東側では平安時代竪穴住居群に混在して土坑群が数多く検出されている。各土坑より遺物の出土がないため時期の確定には至らないが、その主軸方向や分布状況からは中世に位置づけられる可能性が高いと考えられる。

平安時代は竪穴住居を中心とした遺構が調査区全面に展開する。検出遺構数からは本調査区の主体をなす時期と捉えられる。2次面で確認したものも含め、少なくとも13軒の竪穴住居が確認されている。カマドの設置位置は北壁・西壁・東壁の3方向が認められるが、住居軸はすべて同じ方向で共通する。住居間の重複はSB15と24、SB21と22の2箇所所で認められるに過ぎず、検出された住居数に比して少ない。

調査区西側に位置するSB14は1次面で検出されたが、東壁が不明瞭で、2次面でプランが確定している。カマドは東壁で火床部が確認され、柱穴は認められない。床面は中央部が貼床で、その貼床中央より長方形の焼土土坑が確認されている。壁面は南側が一部被熱を受けた状態で、この南壁に接する底部でも紫色に変色した被熱痕が観察された。覆土内には少量の焼土および炭が認められたが、使用目的に関わる遺物の出土はなかった。

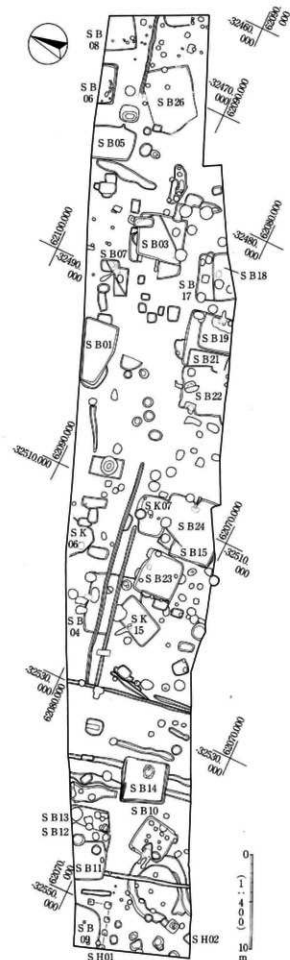


図76 IV区1次面遺構分布図 (S = 1/400)

奈良時代は竪穴住居・土坑が調査区全面に散在的に分布している。竪穴住居は9軒が検出された。2～3軒が隣接してその住居群間に空白域がみられる状況は、Ⅱ・Ⅲ区での歌期住居の分布状況と合致する。また、住居の位置はほぼ平安時代の住居分布と重なり、本地点の居住域形成が奈良時代に始まり、平安時代に継続されたことが確実である。

調査区西端部に位置するSB10は円形周溝溝周溝を掘り込んで構築されていた。4主柱穴・貼床を備え、北西壁にカマドが造り付けられていた。袖部には石材と土師器甕が立てられ、天井に使用されたと考えられる板石が壁際で確認された。床面直上の住居中央南よりからは多量の焼土・炭がまとまって検出され、天井石の状況からもカマドは埋没以前に破壊されたことが明らかな状況であった。同様に石材を使用したカマドはSB17・SK15でもみられ、当区では奈良時代住居にのみ確認される。

SK15は4.8×3.0m程の長方形プランで、貼床・カマドが確認され、住居と判明した。柱穴は認められない。SK07も同規模(4.0×3.0m程)で、貼床が検出され、同様に住居と考えられる。こうした小型長方形の住居の存在も奈良時代の特徴である。

古墳時代後期は竪穴住居4軒と土坑が調査区東側に偏って分布している。本調査区以東において歌期遺構の存在が確認できないことから、篠ノ井遺跡群での古墳時代後期居住域の東限と把握できよう。また、西側のV・VI区および新幹線地点でまとまって確認された古墳時代後期集落とは空白域を挟み、孤立的なあり方である。これは後の奈良時代において小規模居住域が東側に散在的に認められることと同様の現象と捉えられ、東側への居住域拡大の先駆的段階を示すものと考えられる。SB07は1次面で平安時代のSB03・土坑群調査時に確認され、2次面で調査を実施した。一辺約6.6mの方形プランで、貼床・柱穴を備え、実際にはカマド部分を除き浅い溝が巡る。カマドは北壁にて火床ならびに煙道が検出された。床面下では弥生時代後期土坑が検出され、先行遺構が想定される。このほか一辺約3.6mの小型住居であるSB04や付属施設が検出されなかったSB26がある。



写真57 IV区1次面全景(東から)



写真58 IV区1次面全景(西から)

地点名	遺構名	時代	重要関係		床面(坑底)	付属施設	特記事項	備考	遺構調査番号	土師器調査番号	写真番号
			先	後							
Ⅱ区1次面	SB02	奈良以降	SD201				SK54・55・56・84で構成		77 86		90
Ⅱ区1次面	SB10	奈良	SD201		貼床	石蔵カマド(西壁)		煙道が2本並ぶが、南側に付くカマドは検出されず	76	90	74
					4						
Ⅱ区1次面	SB11	平安	SB12		貼床				76	90	
					4						
Ⅱ区1次面	SB13	奈良	SB12		掘削 なし			土坑等により床面不明瞭	76		87

地点名	発掘名	時代	基礎関係		床面(基礎) 状況	行成施設	特記事項	備考	発掘出 発番号	土器出 発番号	写真 番号
			元	後							
Ⅱ 1次面	SB14	平安			陥床 なし	カマド(東壁) 壁溝	床面下より焼土遺構検出	カマド(大床)は2次面で確認	78	89 107	72 73
	SK61	奈良小					SB12に帰属する可能性高い		78	94	
Ⅱ 1次面	SB15	平安			陥床 なし				80	91	
Ⅱ 1次面	SB23	平安	SB04		礎化面 なし	カマド(北壁)			80	92	82
Ⅱ 1次面	SK15	奈良	SB04		陥床 なし	カマド(北西壁)	壁穴住居		80	93	76
Ⅱ 1次面	SK44	奈良	SB04				後生土層は2次面埋蔵の包含層からの混入		80	94	
Ⅱ 1次面	SK65	平安			(未完図)		井戸の可能性あり		80	94	
Ⅱ 1次面	SB24	平安	SK07	SB15		カマド(東壁)			81	93	83
Ⅱ 1次面	SK06	平安			平距 陥床		底面に灰あり。東側隣接土坑では焼土・灰を伴わない骨片がみられ、異源性があるか。		80 81	93	
Ⅱ 1次面	SK07	奈良	SB24		陥床 なし		陥床をもつ方形土坑	壁穴住居と考えられる	81	93	77
Ⅱ 1次面	SK11	奈良							81	93	
Ⅱ 1次面	SX03	古墳後期		SX02					81	94	
Ⅱ 1次面	SB01	古墳～奈良			陥床 なし		馬骨・牛骨検出 石製模造品・玉出土		82 86	87	10-45
Ⅱ 1次面	SB19	平安			陥床 なし	カマド(東壁)		当初、1軒の大形住居跡として調査に着手したがSB19とSB21に明確に分れることが確認される	82	92	79
Ⅱ 1次面	SB21	奈良	SK22		礎化面 なし	カマド(西壁)			82	92	80
Ⅱ 1次面	SB22	平安	SB21		陥床 なし	カマド(北壁)			82		81
Ⅱ 1次面	SK46	古墳～奈良					東半未調査		82	94	
Ⅱ 1次面	SB03	平安	SB07	SK29 SX05	礎化面 なし			床面でSB07検出	83	88	
Ⅱ 1次面	SB07	古墳後期		SB03	礎化面 なし	カマド(北壁)			83 102	87	86
Ⅱ 1次面	SB18	古墳～奈良		SB17	陥床 なし	カマド(北壁)			83	91	78
Ⅱ 1次面	SB05	平安			陥床 なし				84	89	75
Ⅱ 1次面	SK34	平安	SK37	SK33					84	94	
Ⅱ 1次面	SK37	平安		SK34					84	94	
Ⅱ 1次面	SX06	奈良							84	94	
Ⅱ 1次面	SX12	奈良小							84	94	
Ⅱ 1次面	SB26	古墳後期		SB13	陥床 なし		丸玉出土	住居とする確率的供圖なし	85	93	
Ⅱ 1次面	SK40	奈良小	SK41						85	94	
1次面	SB16	平安					SB17～19検出時に設定・消滅			89	

表11 Ⅳ区1次面主要検出遺構一覧表

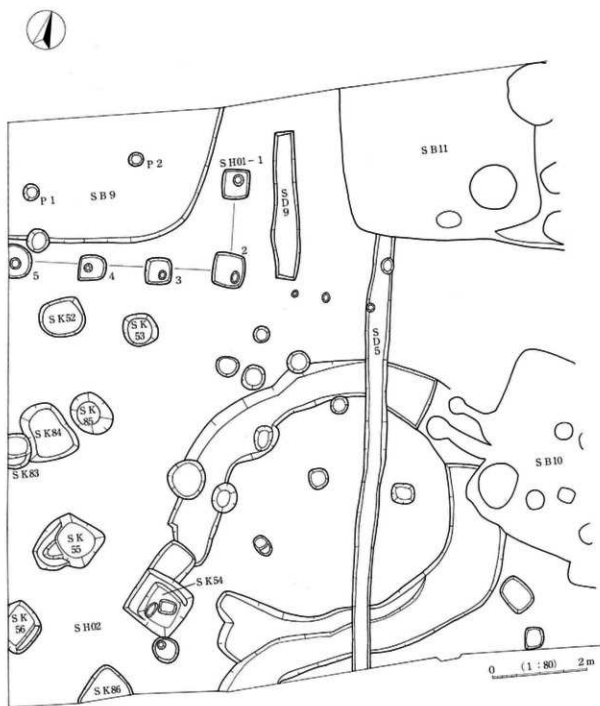


图77 IV区1次面遺構実測図① (S = 1/80)

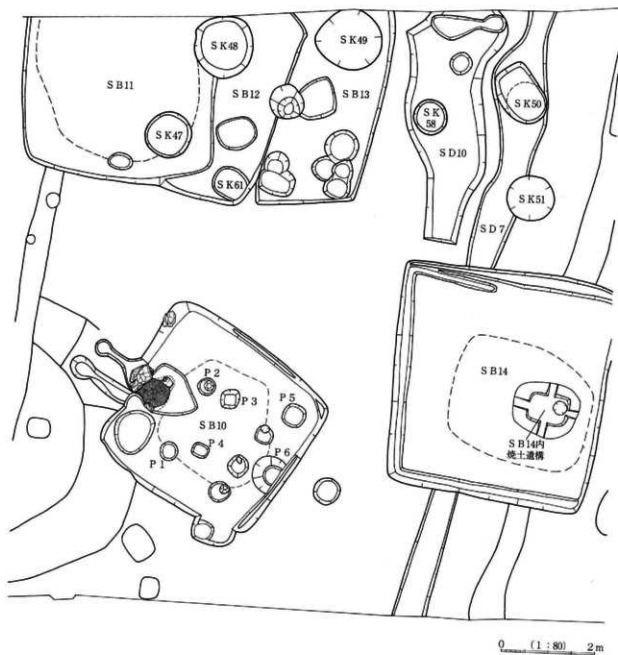


图78 IV区1次面遺構実測图② (S = 1/80)

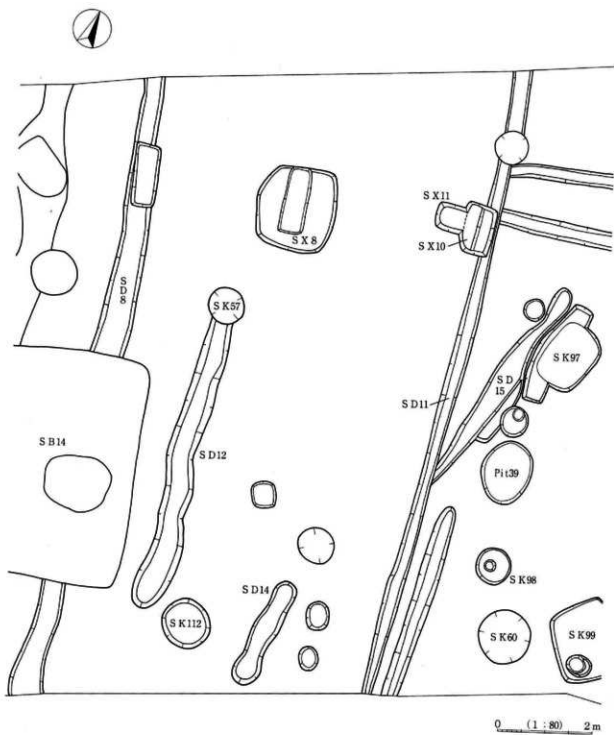


图79 IV区1次面遺構実測図③ (S = 1/80)

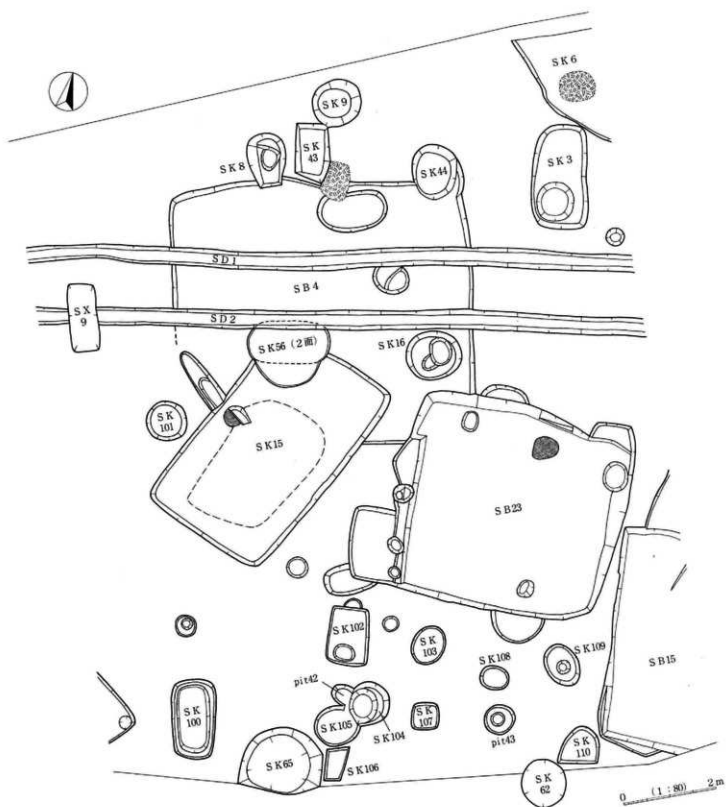


图80 IV区1次面遺構実測图④ (S = 1/80)

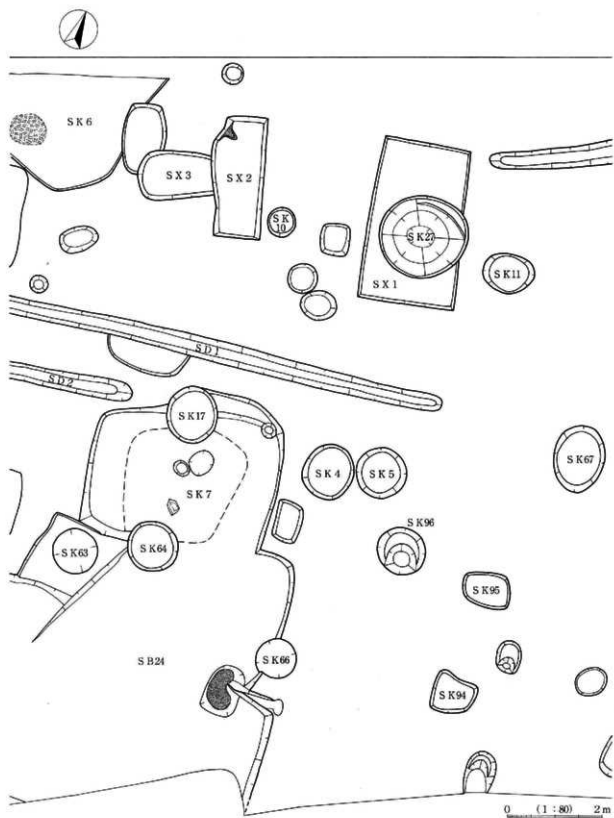


图81 IV区1次面遺構実測図⑤ (S = 1/80)

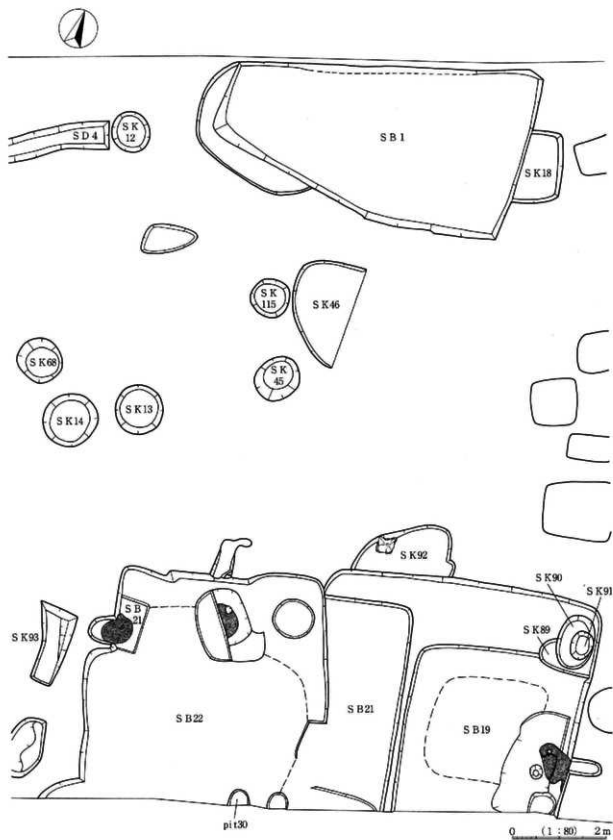


图82 IV区1次面遺構実測図⑥ (S = 1/80)

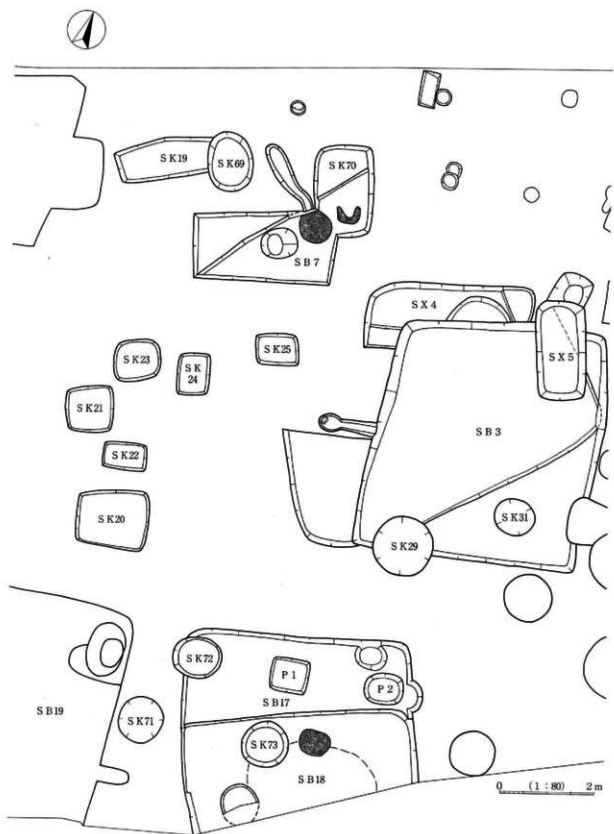


图83 IV区1次面遺構実測図⑦ (S = 1/80)

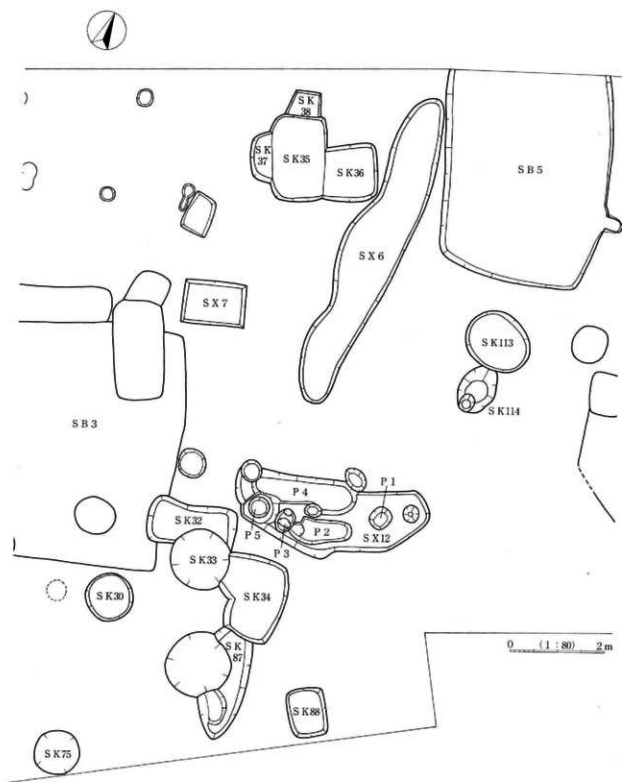


图84 IV区1次面遗构实测图⑥ (S = 1/80)

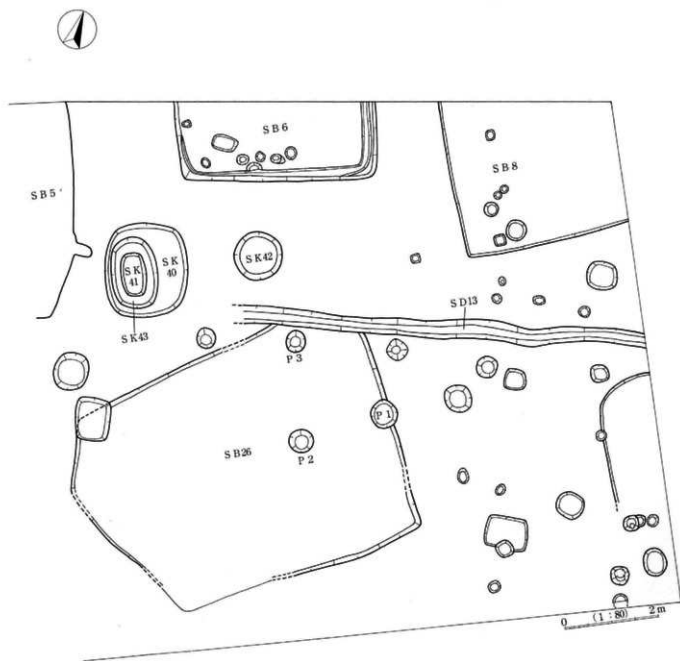


图85 IV区1次面遺構実測図⑨ (S = 1/80)

SB01 柱穴ならびにカマド等の付帯施設は認められなかった。床面は貼床である。貼床上および覆土下層から獣骨が出土している。獣骨には床面に密着した5~11と床面より浮いた1~4、13~15がある。貼床上の1~5は馬、浮いたものは牛とみられる。馬骨は貼床上に密着していることから本遺構廃棄時に埋められたと考えられるが、牛骨については定かでない。明確な掘り込みは認められなかったが、覆土の黒色化に若干の違いがあったことから、馬とは時期を逸えて埋められた可能性が考えられる。

出土遺物には土師器・須恵器のほか、石製模造品(劍形)・勾玉・管玉・灯明皿がみられる。

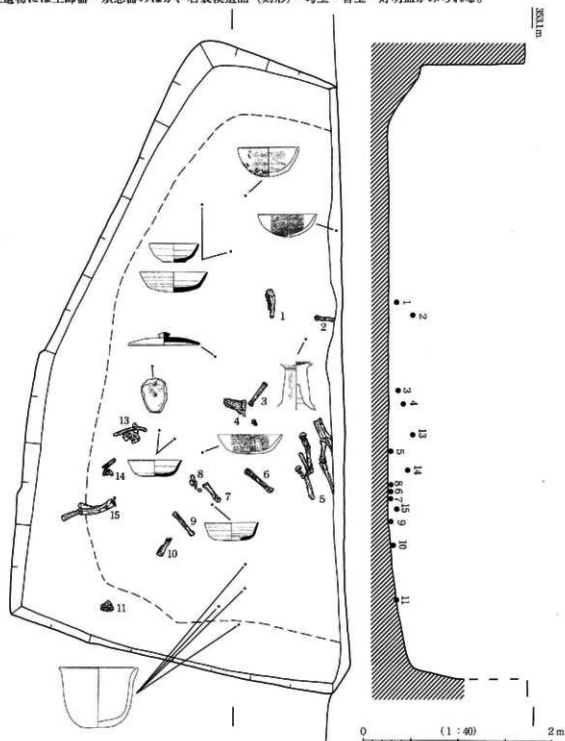


図86 SB01遺物および獣骨検出状況実測図 (S = 1/40)



写真59 S B01全景



写真61 S B01全景



写真60 S B01遺物出土状況



写真62 S B01遺物出土状況



写真63 S B01獣骨出土状況



写真64 S B01馬骨検出状況



写真65 S B01牛骨検出状況

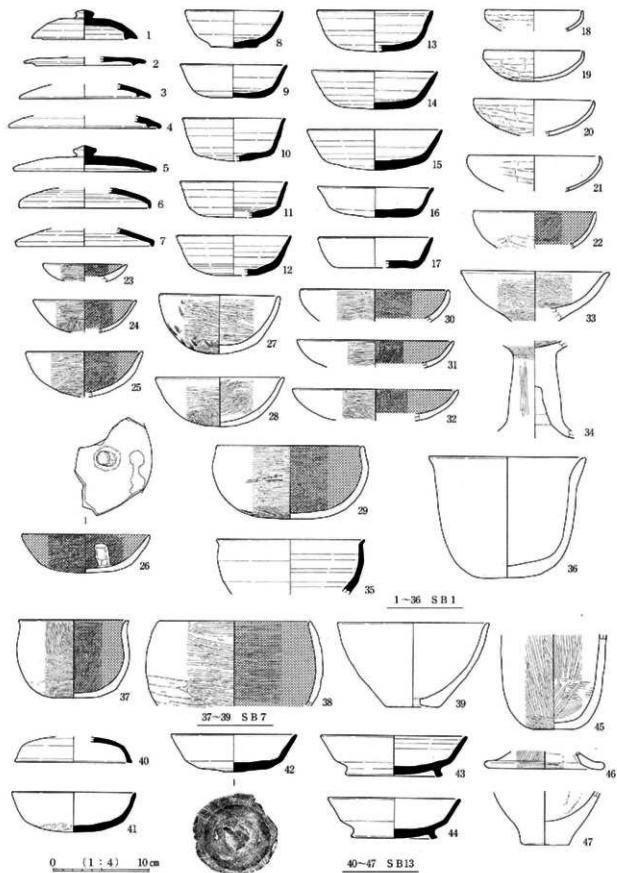


图87 IV区1次面出土土器实测图① (S = 1/4)